若江遺跡第32・33次発掘調査報告

1990．3

財団法人 東大阪市文化財協会

はしがき

若江遺跡は、昭和47年に発掘調査が開始されて以来、ほぼ毎年調査が実施され、現在では43次に至っています。これらの調査では、弥生時代から歴史時代（江戸時代）にわたる様々な遺構や遺物を検出し、若江地域の歴史を徐々にではありますが解明するに至っています。特に昭和49年から実施しました府道の拡幅工事に伴う調査では、古墳時代から室町時代にかけての集落の一部が見つかり、井戸、溝、土坑、建物などが検出されたこと、これらの遺構から当時の人々が使っていた日常生活品である椀、皿、鉢、羽釜、壺、甕、火鉢、硯、水滴、下駄、槌、石臼、貨銭などの土器、陶磁器、石製品、木製品、金属製品などが出土したことなどにより、当時の人々の生活を窺うことができました。また、これまで文献の上でしかわからなかった若江城関連の遺構、遺物が発見されたことです。城の回りを幾重にも囲むように掘られた堀、若江城の建物の礎石、壁下地、軒瓦などが見つかり、城の規模や構造などその概略が明らかになってきました。

今回刊行することができました若江遺跡第32・33次発掘調査報告では若江城の堀、堀の外を巡る土塁、築城以前の溝、土坑、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の土坑、溝、平安時代から室町時代の溝、土坑、落ち込みなどが見つかりました。これらのことから弥生時代の墓地が存在すること、古墳時代・中世の集落がより広がること、城の内堀の範囲が確定できたことなど多くの成果を得ることができました。これらの成果が、歴史研究の一助になりますとともに広く活用されることを心から願うものであります。

最後に、調査及び報告書の作成にあたってご協力・ご指導頂いた方々、関係諸機関に感謝の意を表するとともに、今後とも一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成２年３月

財団法人　東大阪市文化財協会
常務理事　塚田氏秀

例　　言

1．本書は、東大阪市若江本町４丁目、３丁目地内で実施した府道大阪東大阪線道路改良工事に伴う若江遺跡第32・33次発掘調査報告書である。

2．本調査は、財団法人東大阪市文化財協会が、大阪府八尾土木事務所の委託を受けて実施した。

3．現地調査は、第32次調査が昭和60年10月21日から昭和61年１月11日まで、第33次調査が昭和61年１月14日から昭和61年３月19日まで実施した。

4．整理作業は、平成元年７月から平成２年３月31日まで実施した。

5．事務局の体制は以下の通りである。（平成２年３月１日現在）

常務理事　塚田氏秀
常勤理事　佐藤幸治
事務局長　室田和彦（東大阪市教育委員会文化財課長）
事務局付　河本　正（東大阪市教育委員会文化財課主幹）
調査部長　原田　修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
庶務部長　下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主査）
庶務副部長　芋本隆裕（東大阪市教育委員会文化財主任）
調査副部長　福永信雄（東大阪市教育委員会文化財課主任）
調査副部長　勝田邦夫（東大阪市教育委員会文化財課）
庶務部　安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
調査部　上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）
調査担当　勝田邦夫

現地調査並びに整理作業にあたり、速水善洋、佐野仙太郎、香川治明、三浦純一、山田夏代、竹内弘明、栗須直樹、羽田野香、宮本美好子、喜多恵子、宮本朋子、植田久美、大庭みゆき、上田佳世、治川政美、中切孝彦、小路克子の尽力があった。

6．現地の土色及び土器の色調は、農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠し、記号表示もそれに従った。

7．本書の執筆及び編集は勝田が行った。出土木製品の保存処理及び樹種同定は財団法人元興寺文化財研究所に委託して実施した。

8．図版に収めた遺構写真は勝田が、遺物写真は日本アートフレームに委託して実施した。

9．調査の実施にあたっては、大阪府八尾土木事務所、株式会社金鉄屋土木のご協力を頂いた。記してお礼申し上げます。

本 文 目 次

はしがき
例言
Ⅰ．調査に至る経過…… 1
Ⅱ．位置と環境…… 2
Ⅲ．調査の概要…… 4
若江第32次調査…… 5
1．層位…… 5
2．遺構…… 5
若江第33次調査…… 15
1．層位…… 15
2．遺構 …… 16
Ⅳ．出土遺物…… 23
第32次調査出土遺物…… 26
第33次調査出土遺物…… 41
Ⅴ．まとめ…… 50

挿 図 目 次

第１図　遺跡周辺図…… 3
第２図　調査地点位置図…… 4
第３図　第32次調査層位図…… 6
第４図　堀第Ⅱ期実測図…… 7
第５図　堀第Ⅰ期実測図…… 9
第６図　土塁盛土の状況（平面図）…… 10
第７図　土塁実測図…… 11～12
第８図　溝１　土坑１実測図…… 13
第９図　土坑１　実測図…… 13
第10図　溝２実測図…… 14
第11図　溝３実測図…… 14
第12図　土坑５実測図…… 17
第13図　土坑10．18．19実測図…… 21
第14図　堀第Ⅱ期出土遺物…… 27

第15図　堀第Ⅱ期出土遺物…… 29
第16図　堀第Ⅰ期出土遺物…… 30
第17図　土墨　溝出土遺物…… 33
第18図　土坑１　整地層出土遺物…… 35
第19図　堀第Ⅱ期出土木製品…… 37
第20図　堀第Ⅱ期出土木製品…… 39
第21図　落ち込み　溝出土遺物…… 42
第22図　溝　土坑出土遺物…… 43
第23図　包含層出土遺物…… 45
第24図　土坑出土遺物…… 47
第25図　溝　包含層出土遺物…… 48
第26図　包含層出土遺物…… 49
第27図　若江33次層位図…… 52
第28図　若江33次層位図…… 53
第29図　若江33次遺構実測図…… 54
第30図　若江33次遺構実測図…… 55
第31図　若江33次遺構実測図…… 56
第32図　若江33次遺構実測図…… 57
第33図　若江33次遺構実測図…… 58
第34図　若江33次遺構実測図…… 59
第35図　若江33次遺構実測図…… 60

表　目　次

第１表　土師器皿分類表…… 24

図　版　目　次

図版１　若江32次遺構　１．堀第Ⅱ期遺物出土状況
　　２．堀第Ⅱ期遺物出土状況
図版２　若江32次遺構　１．堀第Ⅱ期漆器椀、ヘラ状木製品出土状況
　　２．堀第Ⅱ期石仏出土状況
図版３　若江32次遺構　１．堀第Ⅱ期下駄出土状況
　　２．堀第Ⅱ期紡錘車出土状況
図版４　若江32次遺構　１．堀第Ⅱ期完掘状況

		2．堀第Ⅱ期堆積土層
図版５	若江32次遺構	1．土墨盛土状況
		2．土墨盛土状況
図版６	若江32次遺構	1．堀第Ⅰ期完掘状況
		2．堀第Ⅰ期完掘状況
図版７	若江32次遺構	1．土墨東側
		2．土坑１
図版８	若江32次遺構	1．溝３
		2．溝３
図版９	若江33次遺構	1．Ａ１～Ｂ１地区全景
		2．落ち込み１　遺物出土状況
図版10	若江33次遺構	1．土坑１
		2．溝１
図版11	若江33次遺構	1．Ｂ２～Ｃ１地区全景
		2．土坑５
図版12	若江33次遺構	1．土坑５　遺物出土状況
		2．溝８
図版13	若江33次遺構	1．Ｂ３～Ｃ１地区全景
		2．Ｂ２～Ｂ３地区全景
図版14	若江33次遺構	1．方形周溝墓（東より）
		2．方形周溝墓（西より）
図版15	若江33次遺構	1．弥生土器出土状況
		2．土坑10
図版16	若江33次遺構	1．Ｃ１～Ｃ３地区全景
		2．溝17
図版17	若江33次遺構	1．土坑18
		2．土坑19
図版18	若江33次遺構	1．Ｂ４～Ｃ１地区南側断面
		2．Ｂ２地区南側断面
図版19	若江32次遺物	1．土師器皿
		2．土師器皿
図版20	若江32次遺物	1．土師器皿
		2．土師器皿
図版21	若江32次遺物	1．土師器皿
		2．瓦器釜、土師器羽釜、青花椀

図版22　若江32次遺物　1．土師器皿
図版23　若江32次遺物　1．土師器皿
図版24　若江32次遺物　1．土師器皿
　　2．瓦器羽釜、甕
図版25　若江32次遺物　1．瓦器椀、石臼
　　2．土師器皿、瓦器皿
図版26　若江32次遺物　1．土師器皿
　　2．瓦器羽釜、擂鉢、備前焼擂鉢、土師器羽釜、鍋、美濃焼皿、陶器椀
図版27　若江32次遺物　1．瓦器羽釜、椀、土師器皿
　　2．土師器皿
図版28　若江32次遺物　1．土師器皿
　　2．土師器皿、青花椀
図版29　若江32次遺物　1．木製品　木簡、ハケ、ヘラ、紡錘車、櫛、下駄、柄杓
図版30　若江32次遺物　1．木製品　漆器椀、蓋板、漆塗円板、箸
図版31　若江33次遺物　1．瓦器椀、白磁椀、土師器皿
　　2．瓦器椀、土師器羽釜
図版32　若江33次遺物　1．瓦器椀、皿、土師器皿、白磁椀
　　2．瓦器椀、皿
図版33　若江33次遺物　1．土師器皿、瓦器椀、土製品
図版34　若江33次遺物　1．瓦器椀
図版35　若江33次遺物　1．土師器皿
　　2．土師器皿、瓦器椀、皿
図版36　若江33次遺物　1．瓦器椀
　　2．瓦器椀、擂鉢、青磁椀、磁器椀
図版37　若江33次遺物　1．須恵器杯身、杯蓋、直口壺
　　2．製塩土器
図版38　若江33次遺物　1．土師器高杯、甕
　　2．須恵器杯
図版39　若江33次遺物　1．土師器高杯
　　2．土師器甕
図版40　若江33次遺物　1．弥生土器壺、無頸壺、高杯
　　2．土師器壺、弥生土器壺
図版41　若江33次遺物　1．土師器皿、壺
図版42　若江33次遺物　1．須恵器杯身、土師器壺、甕

Ⅰ．調査に至る経過

若江遺跡は、東大阪市若江北町３丁目付近を中心として、東西約650m、南北約950mに及ぶ範囲と推定される弥生時代から歴史時代（江戸時代）に至る複合遺跡である。

昭和９年楠根川（現在の第二寝屋川）流路改修工事、用水路掘削工事、昭和38年府道大阪中央環状線敷設工事、昭和42年市立若江公民分館建設工事などに伴い、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などの土器や瓦が出土したことにより遺跡として知られるようになった。若江地域では、昭和47年市立若江小学校校舎増築工事に伴う発掘調査を最初として、以降ほぼ毎年発掘調査が実施されており、現在では第43次に及ぶ。

東大阪市内には東西に延びる幹線道路が４本ある。北から府道大阪―石切線、国道308号線、府道大阪―枚岡線、府道大阪―東大阪線（旧府道四条―長堂線）である。昭和30年代後半の高度経済成長による産業の急速な発展に伴い、東大阪地域も工場、事務所、倉庫などが建設され住宅の増加もあいまって、車の利用も急激に増加の一途をたどり、道路の機能状況は飽和状態となってきた。このため大阪府八尾土木事務所は道路の拡幅工事を計画し着手することにした。若江地域では、昭和49年に拡幅工事に伴う初めての調査を実施し、近世の井戸、室町時代の土器、瓦などを検出した。（第４次調査）以後昭和52年（第10次・12次）、53年（第14次）、54年（第17次）、55年（第20次）、57年（第24次・25次）、58年（第27次）、59年（第29次）、60年（第32次）、61年（第33次）に拡幅工事に伴う調査を実施し、総面積4646㎡分を調査した。

その結果、弥生時代から古墳時代の遺物包含層を部分的ではあるが確認しており、当時期の集落の存在が窺えたこと、平安時代から室町時代にかけての集落も広がっており、井戸、溝、土坑、建物などが検出されたこと、これらの遺構から当時の人々が使っていた日常生活用品である椀、皿、鉢、羽釜、壺、甕、火鉢、硯、水滴、下駄、槌、石臼、貨銭など、土器、陶磁器、石製品、木製品、金属製品などが出土したことにより、当時の集落及び人々の生活を窺うことができるようになった。また、一連の調査で最も大きな成果が得られたのは、これまで文献の上でしかわからなかった若江城関連の遺構、遺物が検出されたことである。府道にほぼ沿うように東西方向に約160mも延びさらに北に向きを変える堀、城の建物を幾重にも囲むように掘られた数本の南北方向の堀が検出された。さらに、若江城の建物の礎石や壁下地、軒瓦、塀列建物なども見つかり、徐々にではあるが若江城の規模や構造などその概略が明らかになってきた。若江城との関連を思わせる遺物も多く、刀、鎌、鉄砲の玉、鎧の小札、締具などの武器、武具が出土している。

今回の調査地点は、第４次、10次地点の東側にあたり、既存の調査区域の東端、遺跡の範囲でいっても東端に近い地点である。第32次調査は昭和60年10月21日から昭和61年１月11日まで第33次調査は昭和61年１月14日から昭和61年３月19日まで実施し、遺物整理は平成元年７月31日から平成２年３月31日まで実施した。

II. 位置と環境

若江遺跡は、東大阪市若江本町、若江北町、若江南町一帯に所在する弥生時代から歴史時代（江戸時代）にかけての複合遺跡である。

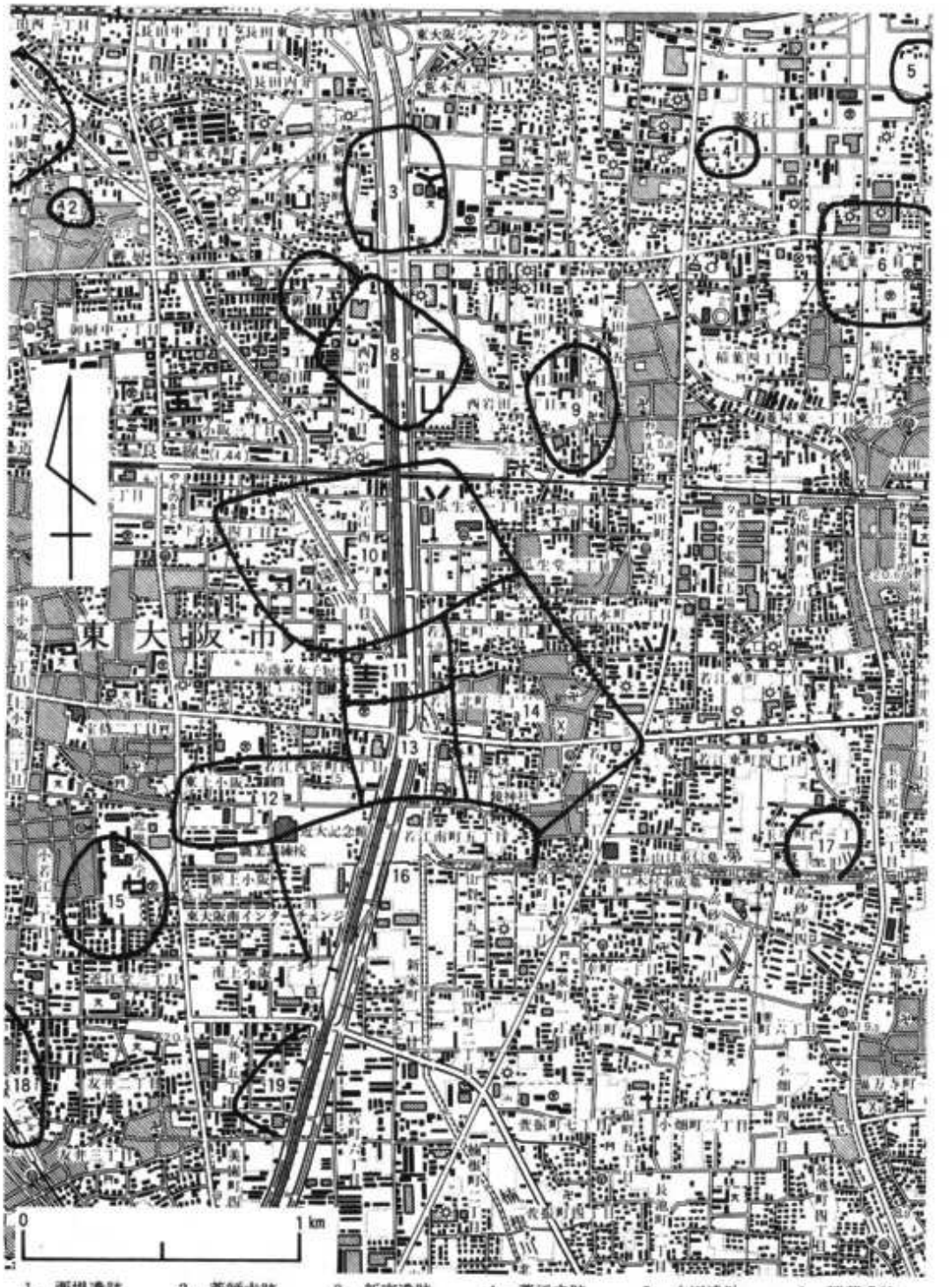
本遺跡の立地は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵、西を上町台地に囲まれた河内平野の中央部、標高４～５ｍにある。河内平野は6000～7000年前、世界的な気候の温暖化に伴い海水面が上昇し、生駒山麓まで海水が入り込んで湾を成していた。しかし、3000～2000年前頃には海退に移り、それとともに、淀川、旧大和川の土砂の運搬、堆積作用により陸化が進んだ。河流によって運ばれた砂礫や泥が堆積してできる低平地（河成堆積低地）のなかも、蛇行原、三角州など、それぞれに形態の特徴、形成過程の異なる地形に細分され、さらにその中にも、河道沿いに細長く延びる平滑な微高地（自然堤防）、その背後の低平地（後背低地）、あるいは、旧河道跡の微高地などが認められる。

若江遺跡周辺で生活が開始されたのは弥生時代からである。前期には山賀、瓜生堂、高井田、鬼虎川、中垣内といった遺跡で集落が営まれるようになる。これらの遺跡は、当時の河内湖のほとりにあたるところであり、水稲栽培に適した低湿地のある低地である。河沿いの低地は、氾濫原ともよばれるように、河川の氾濫によって砂礫や泥が堆積して形成された土地である。洪水になると、本流では流れが強くなり、ふだんは運ばれない大きな砂礫や泥が多量に運ばれる。ところが、水位が上がって河道からあふれ氾濫すると、流れの速さが急速におとろえ、運んできた砂礫は河沿いに堆積してわずかな高まりができる。洪水が繰り返されると河道沿いに帯状に延びる平滑な微高地が形成（自然堤防）される。自然堤防の背後は浅い凹地となり、氾濫水が停滞しやすく、氾濫水に浮遊して運ばれる泥（シルト、粘土）など、自然堤防よりも細粒な物質が堆積するので、排水が遅く、きわめて平滑で、湿地、沼沢地などのできやすい低地（後背低地）となる。若江遺跡では、弥生時代中期になり、遺跡の南北端で生活が開始されたようである。後期になると南端部あるいは、中央部や東寄部分で土器が出土しており集落の存在が予想される。

古墳時代になると、西岩田、意岐部、岩田、小若江、若江北などの遺跡で集落が営まれる。当遺跡でも、遺跡の南東端で土坑や溝などがみられる。

歴史時代に入ると、瓜生堂、小若江、弥刀、神並、楠附、西ノ辻などで集落がみられる。当遺跡では、平安時代の元慶年間（877～885）に若江寺があったことが『尊意贈僧正伝』によって知られ、奈良時代から室町時代に至る各時代の瓦や土器が出土している。

室町時代には、畠山氏が河内国守護に任ぜられ、河内国支配の拠点として若江城を築いた。しかし、畠山氏の家督相続争いにより畠山氏は衰退、かわって三好氏が勢力を伸ばすが、三好氏も織田信長により滅ぼされ池田丹後守教正が城主となる。若江城は、信長の石山本願寺攻めの拠点として使われるが、天正８年に和議が成立し、役目を終え廃城となる。



1．西堤遺跡　2．薬師寺跡　3．新家遺跡　4．菱江寺跡　5．吉田遺跡　6．稲葉遺跡
7．意岐部遺跡　8．西岩田遺跡　9．岩田遺跡　10．瓜生堂遺跡　11．巨摩廃寺遺跡　12．上小阪遺跡
13．若江北遺跡　**14．若江遺跡**　15．小若江遺跡　16．山賀遺跡　17．玉串遺跡　18．弥刀遺跡
19．友井東遺跡

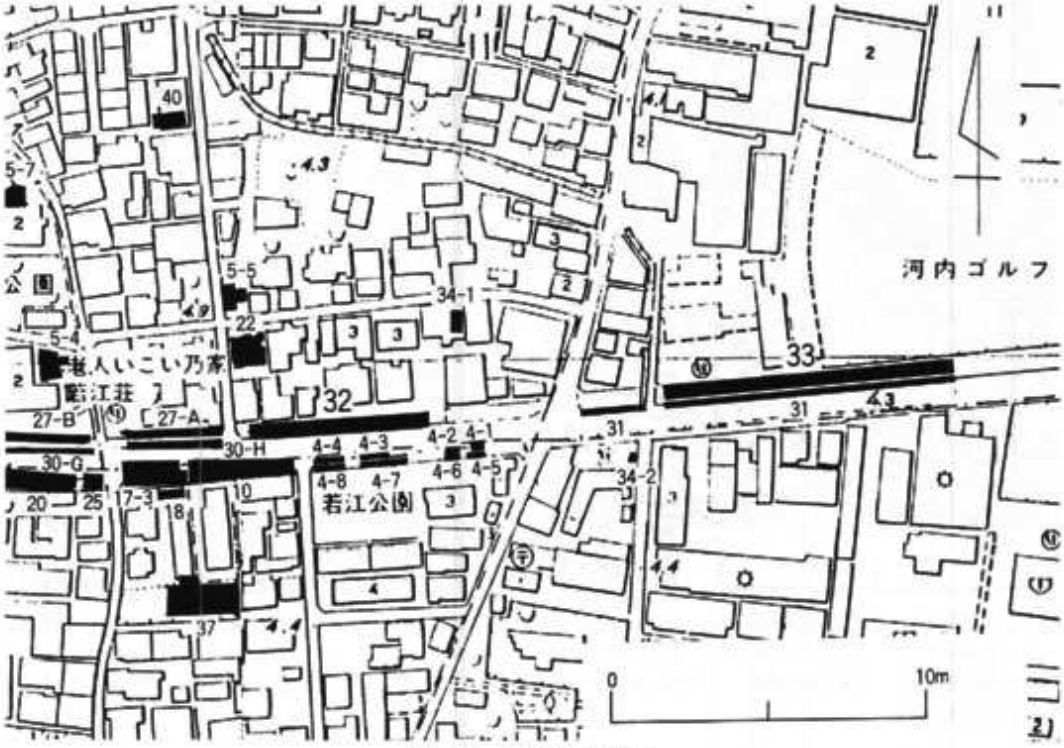
第1図　遺跡周辺図

III. 調査の概要

調査は若江本町４丁目、３丁目地内における府道大阪―東大阪線道路拡幅工事に伴うもので、現在機能している道路のすぐ北側に位置した限られた地域であり、付近には民家や商店などが密集していたため、遺構の追求が非常に困難な状況下での調査であった。

調査を実施するにあたり、遺跡調査対象地及び周辺に国家座標に基づく基本杭を設置し座標値によって地区割設定を行った。この座標によれば、第32次調査地点の西端がＹ＝―36,000、東端がＹ＝―35,940、第33次調査地点の西端がＹ＝―35,865、東端がＹ＝―35,775、である。調査での地区割はＹ＝―35,775を基点として西側へ25m毎にＡ、Ｂ、Ｃ……Ｉとし、さらにその中を５ｍ毎に区切りＡ１、Ａ２…Ａ５とした。調査対象地は幅3.5mであったが、実際には歩行者、自転車等の通路確保、民家等への影響などを考慮し約2.7mについて実施した。

調査は地表下0.3～1.2mの旧耕土まで機械掘削し、以下1.2～2.3mについて各層ごとに人力掘削により遺構、遺物の検出作業を行った。その結果、室町時代後半の若江城の堀、土塁、室町時代前半の溝、土坑、（以上第32次調査）、平安時代後半から室町時代にかけての溝、土坑、古墳時代中期末から後期初頭の土坑、弥生時代中期後半の方形周溝墓（以上第33次調査）を検出し、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、石製品、金属製品、木製品、瓦などが出土した。



第２図　調査地点位置図

若江遺跡第32次調査

調査地は若江本町４丁目で、東西70.5m、南北3.5m、面積190㎡について実施した。遺構としては堀、土塁、溝を検出し、遺物は土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、木製品、石製品、金属製品などが出土した。

１、層位（第３図）

調査地は東西方向に長いため北及び南側断面の双方について記録した。調査地点の土層はＨ５地区とＩ１地区を境として大きく違うが比較的水平堆積に近いＧ４～Ｈ５地区を中心として記述し、Ｉ１～Ｉ５は堀、土塁の項で適宜記述する。Ｇ４～Ｈ５地区の地表面の高さは東端のＧ４でT.P.４m、西端のＨ５でT.P.4.3mを測る。

第１層　盛土　Ｈ５で厚さ最大1.65m、Ｇ４～５で厚さ0.63～0.65m、平均約0.9mである。道路及び住宅などの建物が建設された時に盛土されたものである。現代。

第２層　オリーブ黒色（５Ｙ３／１）シルト　厚さ10～40㎝。旧耕土で水田に伴うものと考えられる。ほぼ水平に堆積する。

第３層　オリーブ黒色粘土の堆積層で土色の違いにより２層に分けられる。厚さ10～38㎝。

第４層　緑灰色～暗緑灰色細砂～粗砂の堆積層で土色、土質の違いにより４層に分けることができる。厚さ22～48㎝。古墳時代～近世の土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器などの細片が出土。

第５層　灰色（10Ｙ４／１）中粒砂～粗砂　厚さ15～20㎝。溝５の遺構面となっている。

第６層　暗緑灰色及び暗オリーブ灰色シルト混り細砂　土色、土質の違いにより３層に分けることができる。厚さ40～70㎝。中世～近世の土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、輸入陶磁器など出土。

第７層　暗オリーブ灰色（５ＧＹ３／１）粘土　厚さ15～100㎝。Ｈ１から東側に堆積している。

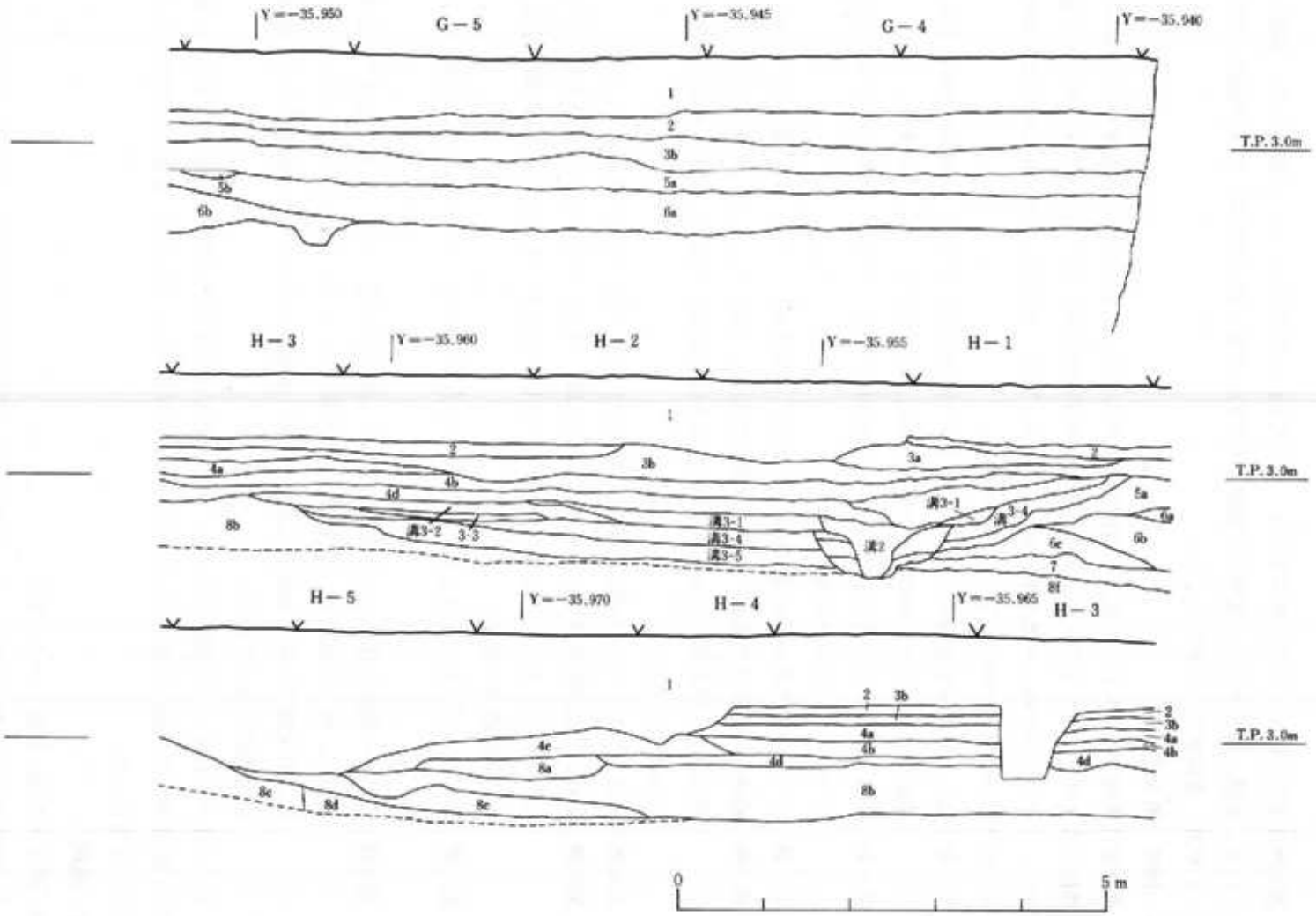
第８層　中粒砂～粗砂を中心とした堆積層である。酸化及び還元の度合により色調が大きく異なる。厚さ60㎝以上。湧水や周辺への影響などから完全に掘ることができなかった。弥生時代～近世の弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器が出土。溝４の遺構面となっている。

以上のようにＧ４～Ｈ５地区は２、３、７層を除き、大部分が砂層による堆積物であり、近世における河川の氾濫か河道となったための堆積と考えられ、室町時代の堆積土は確認することができなかった。

２．遺構

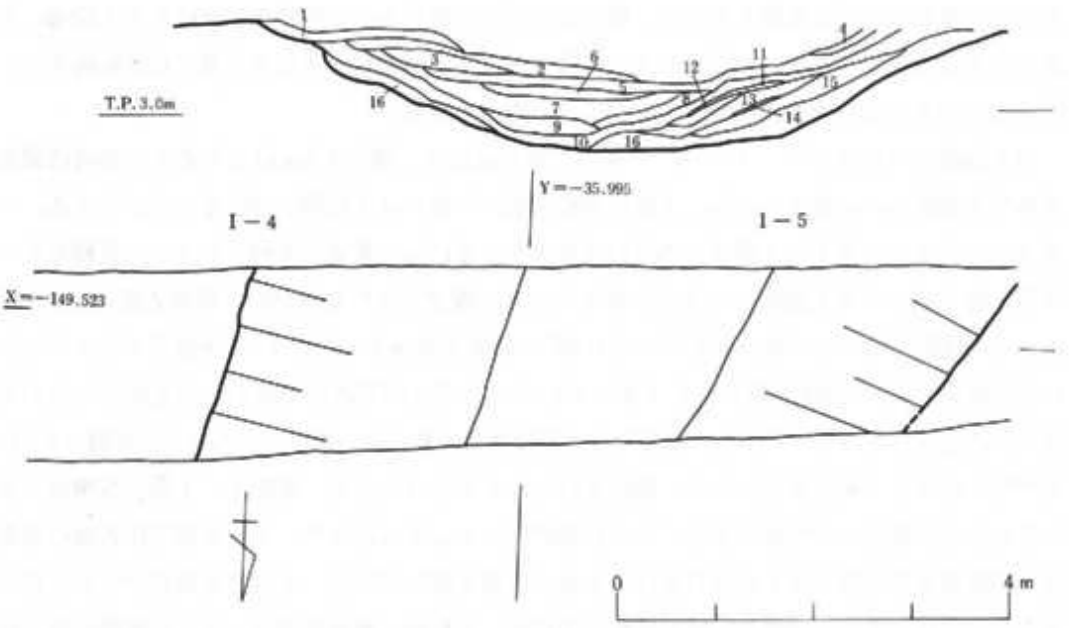
堀（第４・５図　図版１～４、６）

Ｉ２地区からＩ５地区で検出した。この堀は市立若江小学校体育館付近から東に延びるもので今回の調査地点で北向きに変わっている。堀は２時期あり、第Ｉ期が15世紀末頃、第II期が



第3図　第32次調査層位図

1	盛土		
2	オリーブ黒色	(5Y3/1)	シルト
3 a	オリーブ黒色	(10Y3/2)	粘土
b	暗オリーブ灰色	(2.5GY4/1)	細砂～粗砂
4 a	暗緑灰色	(10GY3/1)	細砂
b	緑灰色	(7.5GY5/1)	中粒砂
c	暗赤褐色	(5YR3/3)	中粒砂
d	暗緑灰色	(7.5GY4/1)	細砂～中粒砂
5 a	灰色	(10Y4/1)	粗砂～中粒砂
b	灰色	(10Y5/1)	中粒砂
6 a	暗緑灰色	(7.5GY4/1)	粘質シルト混り細砂
b	暗オリーブ灰色	(2.5GY3/1)	シルト混り細砂
c	暗緑灰色	(10GY3/1)	シルト混り細砂
7	暗オリーブ灰色	(5GY3/1)	粘土
8 a	暗褐色	(10YR3/4)	粗砂～中粒砂
b	黄褐色	(10YR5/8)	中粒砂～細砂
c	オリーブ黄色	(5Y6/3)	中粒砂
d	暗青灰色	(5B3/1)	中粒砂
e	青黒色	(10BG2/1)	中粒砂
f	緑灰色	(10GY5/1)	粗砂
溝2	暗オリーブ灰色	(5GY3/1)	粘土
溝3－1	灰色	(10Y5/1)	中粒砂
3－2	青灰色	(10BG5/1)	細砂～中粒砂
3－3	暗オリーブ灰色	(2.5GY4/1)	細砂混りシルト
3－4	青灰色	(5BG5/1)	中粒砂
3－5	暗オリーブ灰色	(2.5GY4/1)	細砂



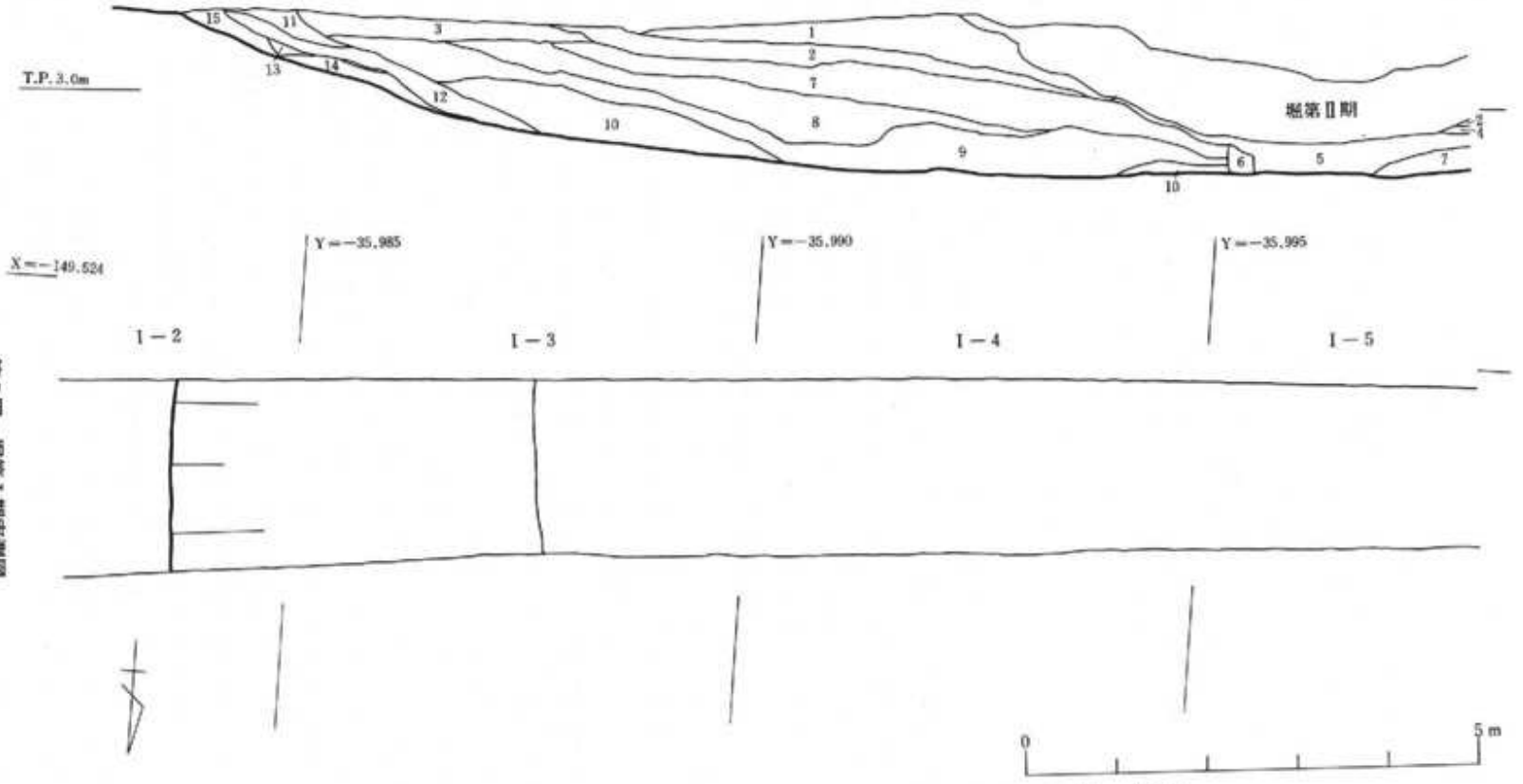
1. 5GY 3/1	暗オリーブ灰色	細礫混りシルト	
2. 7.5GY 2/1	緑黒色	中粒砂混りシルト	
3. 2.5GY 3/1	暗オリーブ灰色	植物遺体含む	シルト混り極細砂
4. 7.5GY 3/1	暗緑灰色	中粒砂混り粘質シルト	
5. 10GY 3/1	暗緑灰色	中粒砂混り粘質シルト	
6. 7.5GY 3/1	暗緑灰色	中粒砂混り粘質シルト	
7. 7.5GY 3/1	暗緑灰色	極細砂	
8. 10GY 4/1	暗緑灰色	細砂混りシルト	
9. 10GY 3/1	暗緑灰色	植物遺体含む	シルト混り極細砂
10. 2.5GY 2/1	黒色	植物遺体含む	シルト混り極細砂
11. 7.5GY 3/1	暗緑灰色	植物遺体含む	極細砂
12. 7.5GY 2/1	緑黒色	植物遺体含む	細砂
13. N 1.5	黒色	植物遺体含む	細砂
14. 7.5GY 3/1	暗緑灰色	植物遺体含む	細砂
15. 2.5GY 2/1	黒色	植物遺体含む	細砂
16. 2.5GY 3/1	暗オリーブ灰色	植物遺体含む	細砂

第4図　堀第II期実測図

16世紀後半に埋ったものと考えられる。

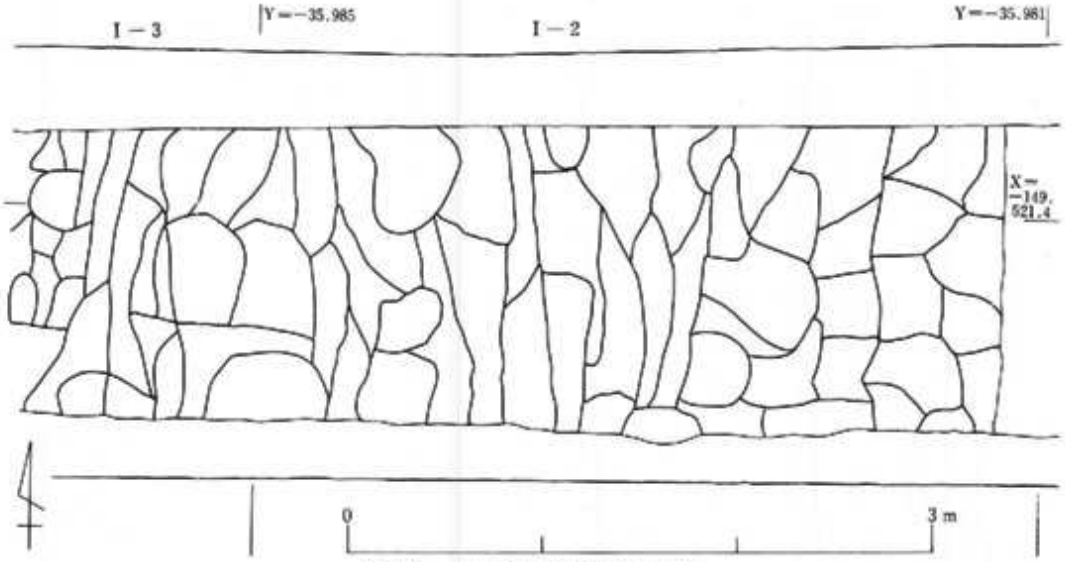
第II期堀の方向は、N—16°～35°—Eで、幅6.8m、深さ1.3mを測る。断面は皿状を呈し、緩やかな傾斜である。堆積土は16層に区分できるが大きく3層に分けられる。1～5の第I層は暗緑灰色中粒砂混り粘質シルトで植物遺体を多く含んでいる。厚さ約50cm。ここからは須恵器・土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器といった土器類、瓦、櫛・箸・ヘラ状木製品・紡錘車・墨書木製品・漆塗木製品・曲物底板などの木製品、貝・獣骨・木の実といった自然遺物が出土した。6～9の第II層は暗緑灰色粘質シルト～極細砂で植物遺体を含んでいる。厚さ約50cm。ここからは須恵器・土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器といった土器類、箸・ヘラ状木製品・下駄・柄杓・板状木製品・用途不明木製品などの木製品、桃の種・亀の甲羅及び骨・獣骨といった自然遺物、地蔵石仏といった石製品、鉄片・鉄砲の弾丸といった金属製品、瓦が出土した。10～16の第III層は暗オリーブ灰色～黒色の細粒砂で植物遺体を多く含んでいる。厚さ30cm。ここからは、土師器・瓦器・陶器といった土器類、箸・漆器椀・蓋・ヘラ状木製品・木簡といった木製品、亀などの骨、皇宋通宝などの貨銭・金銅製金具といった金属製品が出土した。出土遺物や堆積土から見ればこの堀は常に水が溜った状態であったものと考えられる。（亀の甲羅や骨が多く出土している。）また堀の近くに広葉樹が繁っていたものと思われ、木の葉、枝などが折り重なるように堆積していた。堀の中には平安時代から室町時代にかけての土師器、瓦器なども含まれているが、最も多くを占める時期は、土師器皿、羽釜から見て16世紀後半で、若江城の終末に近い時期に機能していたものと考えられる。

第1期堀の方向は、N—4°～7°—Wで、幅17m以上、深さ2.5m以上である。西肩は調査地外で東側肩のみの検出である。土砂の堆積状態から見れば3時期に分けることができる。一番古いと考えられるI—1期は、当時の地表面であるにぶい黄褐色砂層～シルトの互層を2～3段に削り込んで堀を掘削したものと考えられる。確認できた傾斜角は、現地表面のT.P.4.2mから一端25°で0.7mで30cm下がりさらに65°の角度で90cm下がり、7°の角度でややフラットになり最後に22°の角度で緩やかに下がっていく。ただこの形状は当初のものを伝えたものではないと思われる。というのは、掘削した表面は非常に軟らかい粗砂～シルトで雨が降ったり、風が吹くたびに土砂が流されたり、飛ばされたりするからである。実際I—1期の堆積をみるとほとんどが粗砂～中粒砂である。すぐに堀が埋ってしまったため、I—2期では表面に黄褐色～暗灰黄色の粘質シルトを貼り付けて土砂の流出を防いでいる。それでも周辺からの土砂の流入がみられ、オリーブ黒色～暗緑灰色の中粒砂、中粒砂～極細砂混りシルトの堆積がみられる。さらに表面を補修し、にぶい黄褐色～暗灰黄色粘質シルトを貼り付けているが中粒砂～粗砂の堆積は止まることがなく、現在の地表面まで達し、堀は完全に埋っている。過去の大雨・洪水の記録を調べてみると16世紀末まででは、15世紀代の洪水記録が一番多い。特に1477～1489年には多くの洪水記録がみうけられる。ただ、記録は若江城のあった河内国ではなく、当時の都である京都を中心とした記録であるが大体の傾向は窺うことができる。また自然災害以外にも人災による洪水もあった。『尋尊大僧正記』によると、文明15年（1483）8月22日畠山義



1. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 中粒砂〜粗砂
2. 2.5Y 7/4 浅黄色 中粒砂〜粗砂
3. 5BG 3/1 暗青灰色 中粒砂混り粘土
4. 7.5GY 2/1 緑黒色 中粒砂
5. 5GY 3/1 暗オリーブ灰色 細砂
6. 10GY 2/1 緑黒色 極細砂混りシルト
7. 7.5GY 2/1 緑黒色 粘質シルト混り中粒砂
8. 10GY 2/1 緑黒色 細砂混りシルト
9. 10G 4/1 暗緑灰色 中粒砂
10. 10G 4/1 暗緑灰色 粗砂〜中粒砂
11. 7.5Y 5/1 灰色 中粒砂
12. 5BG 3/1 暗青灰色 シルト混り中粒砂
13. 10G 3/1 暗緑灰色 中粒砂
14. 10BG 4/1 暗青灰色 粘質シルト混り中粒砂
15. 10YR 4/4 褐色 中粒砂

第5図 堀第Ⅰ期実測図



第6図　土塁 盛土の状況（平面図）

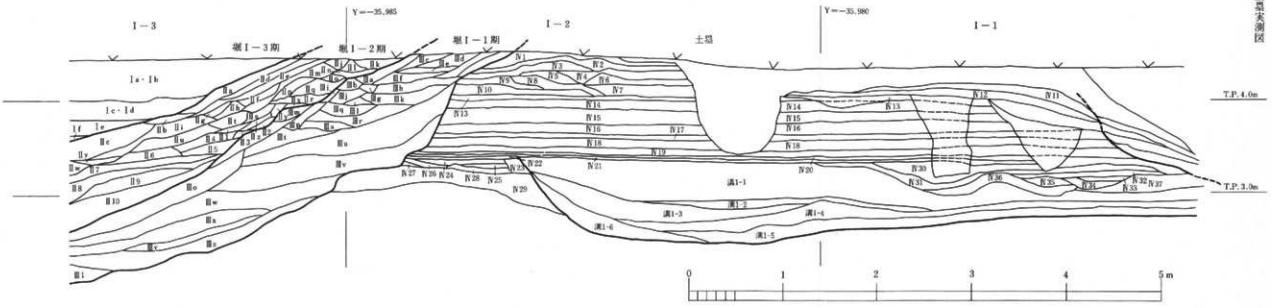
就が政長方を攻めるため淀川の大庭堤（河内千町之鼻より50町西）を2町計り切り落としたため、河内国及び摂津欠郡にまで水が及び大洪水となった。『大乗院日記目録』には「大場堤」（守口市）と「槙松堤」（八尾市）の2ヵ所を切り落とし野崎城（大東市）を攻撃したことが見えている。この堤欠潰は、日本における水攻めによる包囲攻城戦の最初の大規模な例である。第Ⅰ期堀の堆積層からは、須恵器、土師器、瓦器、陶器、輸入陶磁器が出土した。

土塁（第6・7図　図版5・7）

Ⅰ1地区からⅠ2地区で検出した。第Ⅰ期堀の外側、調査地では東側にあたる所である。土塁は、当時の地面を削り込んで作られたものである。当時の地表面はこのⅠ1地区からⅠ2地区にかけての地点が周辺部と比べても高かったようで、この高まりは南から北へ南北方向に延びている。土塁内の堆積は下からほぼ水平に黄褐色を中心とした中粒砂、シルト、灰オリーブ色粘質シルトが厚さ2～15cmで互層に約1mみられる。これは河川などによる堆積物と考えられる。この地形をうまく利用して土塁を築いたものと思われる。土塁の基底部幅8.5m、検出した上面幅約6m、高さ約1.3mである。堆積土の上面には黄褐色～暗灰黄色の粘質シルトを中心とした土砂でさらに高く築いたようである。積み上げられた盛土の状況は第6図、図版5の通りである。平面の広がり、土の厚さから1回に運ばれた土量を計算すると8000～30000㎥と推定され、モッコなどで周辺部から運んできたものと思われる。土塁中から土師器、須恵器、瓦器、陶器、弥生土器、輸入陶磁器が出土した。土塁の下から溝が検出され、この溝の埋った時期が出土遺物より15世紀前半から中葉と考えられ、土塁中の遺物も15世紀後半代であることから土塁が築かれたのは15世紀後半から16世紀前半と思われる。

若江城関係文献史料では、15世紀中葉から末にかけての記録が一番多くみられる。これは畠山持国の家督相続をめぐり義就と政長が河内国を中心に争うからである。その河内国でも当時守護所となっていた若江城をめぐる争奪戦となったためである。この若江城をめぐる攻防戦に

第7図　土層実測図



堀Ⅰ−3期

Ⅰa	暗オリーブ褐色	(2.5Y3/3)	中粒砂～粗砂
Ⅰb	浅黄色	(2.5Y7/4)	中粒砂～粗砂
Ⅰc	暗灰黄色	(2.5Y4/2)	中粒砂～粗砂
Ⅰd	黒褐色	(2.5Y3/2)	中粒砂
Ⅰe	暗オリーブ灰色	(2.5GY4/1)	中粒砂
Ⅰf	暗緑灰色	(7.5GY3/1)	中粒砂

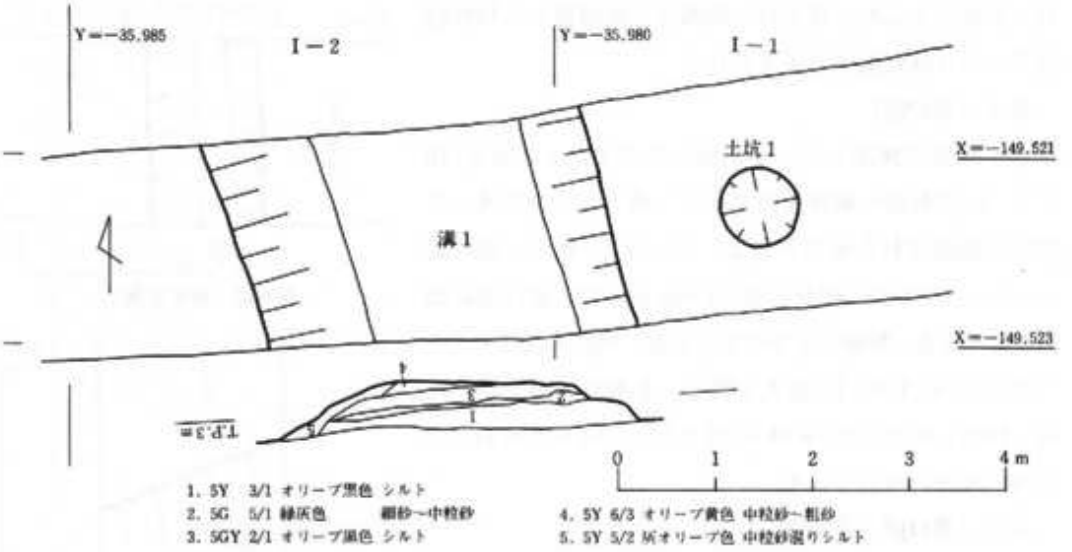
堀Ⅰ−2期

Ⅱa	にぶい褐色	(10YR5/4)	中粒砂
Ⅱb	黒褐色	(2.5Y3/1)	中粒砂
Ⅱc	オリーブ黒色	(5Y3/1)	中粒砂
Ⅱd	オリーブ黒色	(5Y3/1)	中粒砂
Ⅱe	オリーブ黒色	(5Y3/1)	中粒砂
Ⅱf	灰褐色	(7.5YR4/2)	中粒砂～細砂
Ⅱg	褐灰色	(10YR4/1)	中粒砂
Ⅱh	褐灰色	(10YR4/1)	中粒砂～細砂
Ⅱi	オリーブ黒色	(5Y3/1)	細砂～シルト
Ⅱj	褐色	(7.5YR4/3)	中粒砂
Ⅱk	にぶい黄褐色	(10YR5/3)	中粒砂～粗砂
Ⅱl	暗灰黄色	(2.5Y5/2)	中粒砂～粗砂
Ⅱm	オリーブ黒色	(5Y3/1)	中粒砂～粗砂
Ⅱn	暗灰黄色	(2.5Y4/2)	中粒砂
Ⅱo	暗灰黄色	(2.5YR5/2)	中粒砂
Ⅱp	灰色	(5Y4/1)	細砂
Ⅱq	灰色	(5Y5/1)	中粒砂～細砂
Ⅱr	褐色	(10YR4/4)	中粒砂～細砂
Ⅱs	黒褐色	(2.5	細砂～シルト
Ⅱt	黒褐色	(2.5Y3/1)	細砂～シルト
Ⅱu	黒褐色	(2.5Y3/1)	細砂～シルト
Ⅱv	暗オリーブ灰色	(2.5GY3/1)	細砂
Ⅱw	暗オリーブ灰色	(5GY3/1)	細砂
Ⅱx	にぶい褐色	(10YR5/3)	細砂
Ⅱy	黄灰色	(2.5Y4/1)	細砂～シルト
Ⅱz	暗オリーブ灰色	(2.5GY3/1)	細砂
Ⅱ1	暗オリーブ灰色	(2.5GY3/1)	細砂～中粒砂
Ⅱ2	暗オリーブ灰色	(2.5GY3/1)	細砂～中粒砂
Ⅱ3	暗オリーブ灰色	(2.5GY3/1)	細砂～シルト
Ⅱ4	暗オリーブ灰色	(2.5GY3/1)	細砂～シルト
Ⅱ5	暗オリーブ灰色	(2.5GY3/1)	細砂～シルト
Ⅱ6	暗オリーブ灰色	(2.5GY3/1)	シルト
Ⅱ7	緑黒色	(10GY2/1)	極細砂混りシルト
Ⅱ8	暗青灰色	(10BG3/1)	中粒砂
Ⅱ9			
Ⅱ10	暗緑灰色	(10G4/1)	中粒砂

堀Ⅰ−1期

Ⅲa	灰黄褐色	(10YR5/2)	中粒砂～粗砂
Ⅲb	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	中粒砂～粗砂
Ⅲc	黄灰色	(2.5Y5/1)	中粒砂～粗砂
Ⅲd	黄褐色	(2.5Y5/3)	中粒砂～粗砂
Ⅲe	暗赤褐色	(2.5YR2/4)	中粒砂～粗砂
Ⅲf	暗灰黄色	(2.5Y5/2)	中粒砂～粗砂
Ⅲg	灰色	(5Y4/1)	中粒砂～粗砂
Ⅲh	暗灰黄色	(2.5Y5/2)	中粒砂～粗砂
Ⅲi	黒褐色	(2.5Y3/2)	細砂
Ⅲj	暗赤褐色	(5YR3/4)	細砂～中粒砂
Ⅲk	暗灰黄色	(2.5Y5/2)	中粒砂～細砂
Ⅲl	褐灰色	(7.5YR4/1)	細砂
Ⅲm	褐色	(7.5Y4/6)	細砂
Ⅲn	明黄褐色	(10YR6/6)	中粒砂
Ⅲo	暗青灰色	(5BG3/1)	中粒砂混りシルト
Ⅲp	黄灰色	(2.5Y5/1)	中粒砂混りシルト
Ⅲq	灰褐色	(7.5YR4/2)	中粒砂
Ⅲr	黄灰色	(2.5Y4/1)	細砂～中粒砂
Ⅲs	黄灰色	(2.5Y 4/1)	細砂～中粒砂
Ⅲt	灰色	(7.5Y4/1)	中粒砂混りシルト
Ⅲu	黒色	(2.5GY2/1)	中粒砂混りシルト
Ⅲv	灰色	(5Y4/1)	中粒砂
Ⅲw	灰色	(10Y5/1)	中粒砂
Ⅲx	灰色	(10Y 4/1)	中粒砂～細砂
Ⅲy	褐色	(7.5YR4/3)	中粒砂～粗砂
Ⅲz	灰黄褐色	(10YR4/2)	中粒砂～粗砂
Ⅲ1	暗オリーブ灰色	(5GY4/1)	中粒砂～粗砂
Ⅳ1	暗褐色	(10YR3/4)	中粒砂
Ⅳ2	褐色	(10YR4/4)	細砂
Ⅳ3	にぶい黄褐色	(10YR5/3)	中粒砂
Ⅳ4	暗褐色	(10YR3/4)	中粒砂
Ⅳ5	褐色	(7.5YR4/3)	中粒砂
Ⅳ6	にぶい黄褐色	(10YR5/3)	中粒砂
Ⅳ7	黄褐色	(10YR5/6)	中粒砂
Ⅳ8	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	中粒砂～細砂
Ⅳ9	にぶい黄褐色	(10YR4/2)	中粒砂
Ⅳ10	褐色	(10YR4/4)	細砂
Ⅳ11	褐色	(10YR4/4)	細砂
Ⅳ12	暗褐色	(10YR3/3)	中粒砂～細砂
Ⅳ13	にぶい黄褐色	(10YR5/3)	中粒砂～細砂
Ⅳ14	にぶい黄橙色	(10YR6/4)	シルト混りの細砂
Ⅳ15	黄褐色	(10YR5/6)	中粒砂～粗砂
Ⅳ16	灰オリーブ色	(5Y5/3)	細砂
Ⅳ17	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	シルト
Ⅳ18	褐色	(10YR4/4)	中粒砂
Ⅳ19	暗灰黄色	(2.5Y4/2)	細砂
Ⅳ20	オリーブ褐色	(2.5Y4/6)	シルト
Ⅳ21	黄褐色	(10YR5/8)	細砂～シルト
Ⅳ22	灰色	(5Y5/1)	シルト
Ⅳ23	灰オリーブ色	(5Y6/3)	中粒砂
Ⅳ24	オリーブ黒色	(5Y3/1)	中粒砂～細砂
Ⅳ25	灰色	(7.5Y4/1)	中粒砂～細砂
Ⅳ26	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	細砂～シルト
Ⅳ27	灰黄褐色	(10YR5/2)	細砂
Ⅳ28	灰色	(5Y4/1)	細砂
Ⅳ29	黄灰色	(2.5Y5/1)	中粒砂～粗砂
Ⅳ30	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	細砂～シルト
Ⅳ31	黄褐色	(10YR5/6)	細砂
Ⅳ32	灰オリーブ色	(5Y5/2)	シルト
Ⅳ33	オリーブ黒色	(5Y3/1)	シルト～細砂
Ⅳ34	黒褐色	(2.5Y3/2)	細砂～中粒砂
Ⅳ35	黒褐色	(10YR3/2)	中粒砂
Ⅳ36	暗青灰色	(10BG3/1)	細砂～中粒砂
Ⅳ37	緑黒	(10G2/1)	中粒砂
小			

溝1-1	オリーブ黒色	(5Y3/1)	シルト
1-2	緑灰色	(5G5/1)	細砂～中粒砂
1-3	オリーブ黒色	(5GY2/1)	シルト
1-4	暗青灰色	(10BG3/1)	中粒砂～粗砂
1-5	緑黒色	(7.5GY2/1)	中粒砂混りシルト
1-6	灰色	(10Y5/1)	中粒砂

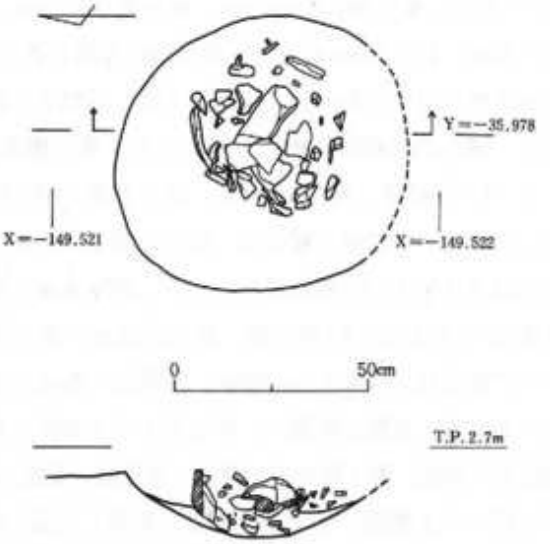


第8図　溝1　土坑1実測図

際しこの土塁が築かれたと考えられる。

溝1（第8図）

Ｉ１地区からＩ２地区で検出した。方向はＳ—15°〜20°—Ｅで、幅3.7〜3.8m、深さ45〜65cm、長さ2.5m以上で、底は南に傾斜し低くなる。断面は概ね皿状であるが東側は２段に落ちる。溝内の堆積は５層に分層できた。第１層オリーブ黒色シルト、層厚８〜26cm、第２層緑灰色細砂〜中粒砂、層厚３〜14cm、第３層オリーブ黒色シルト、層厚13〜16cm、第４層オリーブ黄色中粒砂〜粗砂、層厚12cm、第５層灰オリーブ色中粒砂混りシルトで第１層から土師器、須恵器、陶器、瓦器、輸入陶磁器、桃の種、第３層から土師器皿、羽釜、須恵器片、瓦器椀、擂鉢、陶器片、白磁片、第４層から土師器皿、瓦器椀、羽釜、須恵器、陶器片、弥生土器片、第５層から土師器羽釜、皿、瓦器椀、羽釜、陶器片、須恵器片、青磁椀片、白磁片が出土した。埋没した時期は、土師器皿から15世紀前半から中葉と考えられる。



第9図　土坑1実測図

土坑1（第8・9図　図版7）

Ｉ１地区で検出した。検出面はT.P.2.64mの明黄褐色（10ＹＲ６/６）細砂層上面である。長径75cm、短径69cmの楕円形を呈する土坑である。深さ17cm。埋土は黄灰色（2.5Ｙ４/１）シルト混り中粒砂で、土師器皿、羽釜、須恵器片、瓦器羽釜、椀、陶器片、白磁片、砥石、自然

石、瓦が出土した。埋られた時期は土師器皿から14世紀後半から15世紀前半と考えられる。

溝２（第10図）

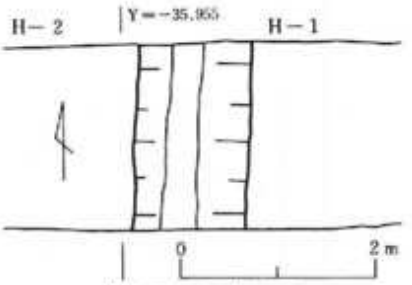
Ｈ１地区で検出した。検出面はT.P.2.5mの灰色(10Ｙ５/１)中粒砂～細砂上面である。溝３が完全に埋った段階で掘削されたものである。Ｓ－３°－Ｗで、幅1.15～1.2m、深さ33～60㎝、長さ1.9m以上で、底は南に傾斜し低くなる。断面はＶ字状を呈する。堆積土は暗オリーブ灰色(５ＧＹ３/１)粘土１層で、土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器(伊万里焼)が出土した。埋った時期は江戸時代後半と考えられる。

溝３（第11図　図版８）

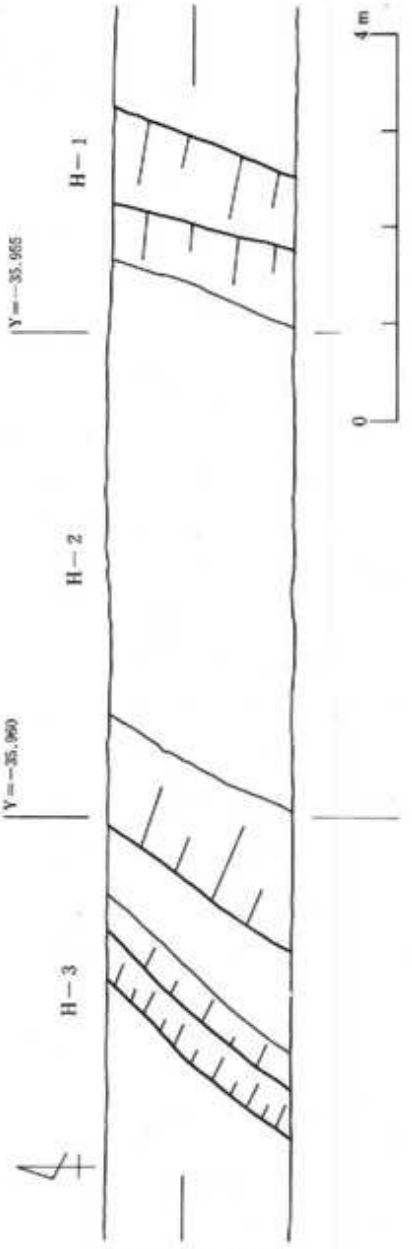
Ｈ１地区からＨ３地区で検出した。方向はＳ－21°～41°－Ｗで、推定幅7.6～8.2m、検出幅９～10m、深さ66～80㎝、長さ2.5m以上で、底は南に傾斜し低くなる。断面は概ね皿状であるが、東側は２段、西側は３段に落ちる。溝内の堆積は５層に分層できた。第１層灰色(10Ｙ５/１)中粒砂、層厚約20㎝、第２層青灰色(10ＢＧ５/１)細砂～中粒砂、層厚10～15㎝、第３層暗オリーブ灰色(2.5ＧＹ４/１)細砂混りシルト、層厚８㎝、第４層青灰色(５ＢＧ５/１)中粒砂、層厚約20㎝、第５層暗オリーブ灰色(2.5ＧＹ４/１)細砂、層厚18～26㎝で第１層から土師器、瓦器、陶器片、第２層から土師器、瓦器、須恵器、陶器、第３層から土師器、須恵器、瓦器、陶器、第４層から土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器(伊万里焼)が出土した。埋没した時期は伊万里焼から江戸時代後半と考えられる。

整地層

遺構ではないが、堀の埋ったあとに上を覆うように盛土がされている。Ｉ４地区からＩ５地区でみられ、厚さ20～55㎝で２層に分けられる。上層はにぶい黄褐色(10ＹＲ４/３)細砂～中粒砂、下層は鉄分を多く含み暗灰黄色(2.5Ｙ４/２)中粒砂～粗砂である。この整地層は若江城が廃城となった天正８年頃になされたものと考えられる。時期は異なるが若江第20次、25次、27次調査でも整



第10図　溝２実測図



第11図　溝３実測図

地層を検出している。

若江遺跡　第33次調査

調査地は若江本町３丁目で、東西90m、南北3.2m、面積288㎡について実施した。遺構としては落ち込み、溝、土坑、方形周溝墓を検出し、遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、陶器などが出土した。

１．層位

調査地は第32次調査区の東約100～200mに位置する。断面実測は詳細を期するため、南北両面について行ったが、ここでは南壁のものを記載する。以下、確認した土層を列挙した上で特徴を記す。

第１層　盛土　Ａ４地区で0.7㎝、Ｃ４地区西端で1.3mあるが、平均0.8mぐらいである。道路及び周辺の建物を建設する時に盛土されたものである。

第２層　Ａ１地区からＤ３地区でみられる。旧耕土であるが詳細にみれば５層に分けられる。２ａ層は青黒色（５Ｂ２/１）極細砂混りシルト、２ｂ層はオリーブ黒色（５ＧＹ２/１）極細砂混りシルト、２ｃ層は青黒色（10ＢＧ２/１）極細砂混りシルト、２ｄ層は暗青灰色（５Ｂ３/１）極細砂混りシルト、２ｅ層は緑黒色（10ＧＹ２/１）細砂で、それぞれの厚さは８～22㎝ある。古墳時代から現代にかけての土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、貝殻、炭などが出土した。

第３層　Ａ１地区からＡ５地区でみられる。２層に分けられる。３ａ層はオリーブ黒色（10Ｙ３/２）粘質シルト、３ｂ層は暗オリーブ色（7.5Ｙ４/３）極細砂で、層厚12～22㎝ある。古墳時代から江戸時代にかけての土師器甕、皿、羽釜、須恵器片、瓦器椀、皿、鉢、羽釜、陶器片、磁器片（伊万里焼椀）、白磁椀、青磁椀のいづれも細片が出土した。

第４層　ほぼ全地区で検出した。４層に分けられる。４ａ層はオリーブ黒色（7.5Ｙ２/２）粘質シルト混り細砂～中粒砂、４ｂ層は暗青灰色（５ＢＧ３/１）粘質シルト、４ｃ層は暗緑灰色（５Ｇ４/１）極細砂、４ｄ層は暗青灰色（10ＢＧ３/１）粘土で、鉄、マンガンを多く含んでいる。層厚８～34㎝。古墳時代から中世にかけての土師器高杯、甕、羽釜、椀、皿、須恵器甕、杯身、杯蓋、瓦器椀、羽釜、白磁片、青磁片が出土した。第１遺構面で落ち込み、土坑、溝などが見つかった。

第５層　ほぼ全地区で検出した。オリーブ灰色（10Ｙ４/２）極細砂であるが、Ａ３地区では褐色（7.5ＹＲ４/４）粘質シルトが混っている。層厚６～36㎝。古墳時代から中世にかけての土師器甕、羽釜、高杯、椀、皿、須恵器杯身、瓦器椀が出土した。第２遺構面で溝が見つかった。

第６層　Ａ２～Ｄ３地区で検出した。３層に分けられる。６ａ層はオリーブ黒色（５Ｙ３/１）粘質シルト、６ｂ層は暗オリーブ灰色（５ＧＹ４/１）粘土、６ｃ層は緑黒色（7.5

ＧＹ２/１）粘質シルトで、Ａ３～Ａ５地区では暗緑灰色（５Ｇ４/１）を呈する。層厚は10～26㎝。弥生時代から中世にかけての弥生土器甕、土師器甕、壺、高杯、羽釜、皿、瓦器椀、羽釜、須恵器片が出土した。第３遺構面で溝、土坑が見つかった。

第７層　Ｂ３～Ｄ３地区で検出した。３層に分けられる。７ａ層は灰オリーブ色（7.5Ｙ４/２）細砂で、層厚は７～32㎝ある。弥生時代から中世にかけての弥生土器甕、無頸壺、広口壺、土師器甕、高杯、羽釜、須恵器杯、製塩土器、瓦器片が出土した。第４遺構面でＣ２からＣ４地区で土坑、溝が見つかった。

第８層　Ｂ３～Ｃ５地区で検出した。３層に分けられる。８ａ層は暗青灰色（５ＢＧ４/１）細砂、８ｂ層は暗青灰色（５ＢＧ４/１）粘土、８ｃ層は灰オリーブ色（7.5Ｙ４/２）極細砂である。無遺物。第５遺構面でＢ４からＣ１地区にかけて弥生中期後半の方形周溝墓、Ｄ３地区で古墳時代の土坑が見つかった。

第９層　Ｄ地区で検出した。２層に分けられる。９ａ層は暗青灰色（５ＢＧ３/１）粘質シルト、９ｂ層青黒色（10ＢＧ２/１）粘土である。無遺物。第６遺構面でＤ３地区において古墳時代の土坑が見つかった。

２．遺構

第４層の第１遺構面では落ち込み１基、溝11条、土坑12基、第５層の第２遺構面では溝１条第６層の第３遺構面では溝３条、土坑２基、第７層の第４遺構面では溝２条、土坑４基、第８層の第５遺構面では方形周溝墓１基が見つかった。

第１遺構面（第４層上面　第12、29、30図、図版９～12）

落ち込み１

Ａ１からＡ２地区で検出した。西側肩部は南北方向に延びる。南側肩部は波状を描き不定形である。検出した規模は南北1.7m、東西4.8m、深さ44㎝で、堆積土は２層あり、上層が暗緑灰色（7.5ＧＹ４/１）中粒砂～粗砂、下層がオリーブ褐色（2.5Ｙ４/４）極細砂で、古墳時代から中世にかけての須恵器杯身、壺、甕、土師器甕、把手、羽釜、皿、円筒埴輪、瓦器椀が出土した。埋没した時期は瓦器椀から14世紀前半と考えられる。

土坑１

Ａ３地区で北側の一部を検出したが大半が調査区外に延びる。不定形な形で深さは24㎝、堆積土は２層に分かれ、上層が青黒色（５Ｂ２/１）粘土で厚さ３～６㎝、下層が暗オリーブ褐色（2.5Ｙ３/３）シルトで厚さ16～21㎝である。古墳時代から中世にかけての須恵器高杯、土師器甕、羽釜、皿、瓦器椀が出土した。埋没した時期は瓦器椀から12世紀後半と考えられる。

土坑２

Ａ４地区で北半分を検出した。平面形は方形または長方形と考えられる。東西0.4m、南北0.4m以上、深さ11㎝で、堆積土は青黒色（５Ｇ２/１）粘土１層である。須恵器、土師器の細片が出土した。時期不明。

土坑３

Ａ４からＡ５地区で北側の一部を検出した。溝２を切っている。不定形な土坑で東西3.5m、南北1.5m以上、深さ34cmで、堆積土は暗緑灰色（10Ｇ３／１）粘質シルトである。古墳時代から中世にかけての須恵器甕、土師器高杯、皿、瓦器椀、青磁蓮弁文椀が出土した。埋没した時期は瓦器椀から13世紀前半から中葉と考えられる。

土坑４

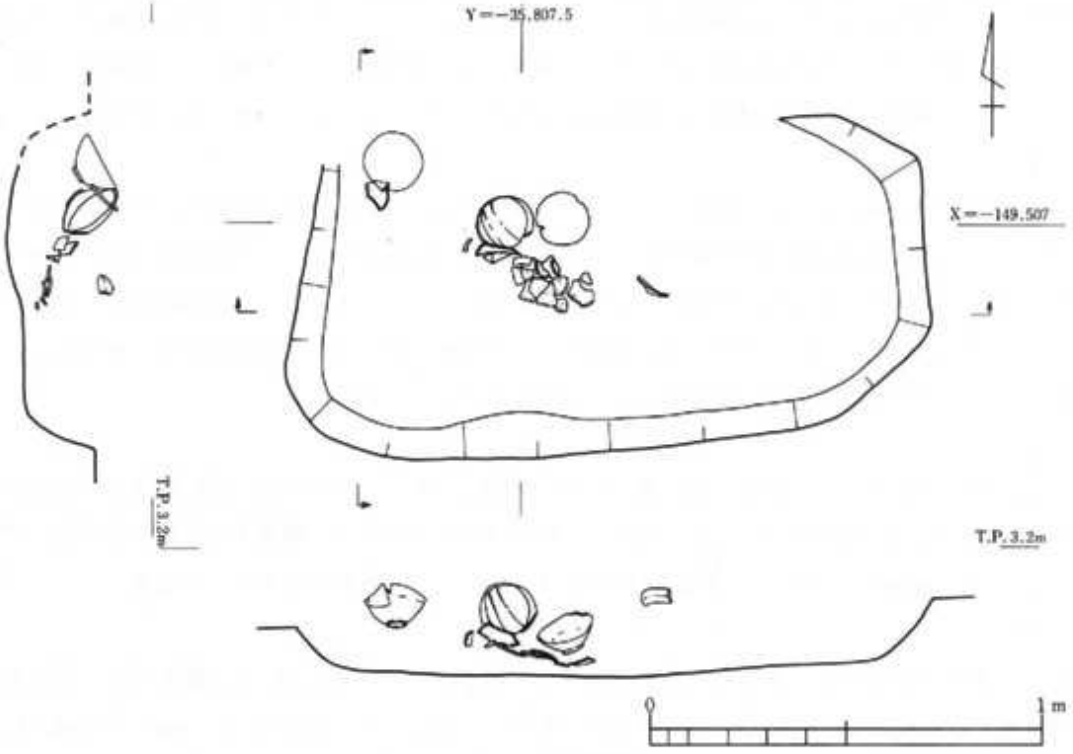
Ａ５からＢ１地区で南半分を検出した。平面形は円形で直径約３ｍ、深さ30cmを測る。堆積土は３層に分けられる。第１層は暗青灰色（５ＢＧ３／１）極細砂で厚さ９cm、第２層は緑黒色（10Ｇ２／１）粘土で厚さ６～13cm、第３層はオリーブ灰色（10Ｙ４／２）細砂混りシルトで厚さ９～20cmある。古墳時代から中世にかけての須恵器、土師器、瓦器、焼土が出土した。細片のため時期は不明。

土坑５

Ｂ２地区で検出した。平面形は隅丸長方形で、規模は東西1.7m、南北約0.9m、深さ約0.2mを測る。堆積土は暗オリーブ灰色（５ＧＹ３／１）細砂混りシルトで、古墳時代から中世にかけての土師器高杯、羽釜、皿、須恵器、瓦器椀が出土した。埋没した時期は瓦器椀から12世紀中葉から後半と考えられる。

土坑６

Ｃ１地区で南半分を検出した。溝７を切っている平面形は隅丸長方形で幅0.6m、長さ１ｍ



第12図　土坑５実測図

以上、深さ14cmを測る。堆積土は暗緑灰色（10G 3/1）極細砂で、中世の土師器皿、羽釜、瓦器椀、瓦が出土した。埋没した時期は瓦器椀から12世紀後半と考えられる。

土坑7

C 1地区で土坑6の西側に隣接する形で検出した。平面形は土坑6と同じく隅丸長方形で、中心軸は土坑6と107°の角度を生じる。規模は幅45cm以上、長さ約1m、深さ10cmで、堆積土は暗緑灰色（5G 3/1）細砂～中粒砂混りシルトである。須恵器、土師器、瓦器、青磁片が少量出土した。細片のため時期は不明。

溝1

A 4地区で検出した。北西から南東方向に延びる溝である。両端は調査地外に延びる。幅37～76cm、長さ2.8m以上、深さ0.1mで、断面形は皿状を呈する。底面は北端でT.P.2.887m、南端でT.P.2.797mである。溝内の堆積土は青黒色（5B 2/1）粘土で、古墳時代から中世にかけての須恵器杯蓋、土師器甕、皿、瓦器椀、羽釜、白磁椀が出土した。埋没した時期は瓦器椀から12世紀後半と考えられる。

溝2

A 5からB 3地区にかけて検出した。東端は土坑3によって切られ、西端は調査地外に延びる。ほぼ東西方向に延びる溝で、幅14～36cm、長さ13.8m以上、深さ18～27cmを測る。断面形は概ね皿状を呈するが、B 1地区では北肩が2段に落ちる。底面は東端でT.P.2.773m、B 1地区でT.P.2.866m、西端のB 3地区でT.P.3.037mである。溝内の堆積土は2層あり、上層が青黒色（10BG 2/1）極細砂混りシルト、下層が緑黒色（7.5GY 2/1）極細砂で、古墳時代から中世にかけての土師器高杯、把手、羽釜、皿、須恵器片、瓦器椀、皿、白磁椀、青磁椀、瓦、馬歯が出土した。埋没した時期は瓦器椀から13世紀前半から中葉と考えられる。

溝3

B 2からB 3地区にかけて検出した。溝2の北側で溝2と平行に延びる溝である。東側を土坑5に切られ、西は調査地外に延びる。幅0.3m以上、長さ2.2m以上、深さ約0.2mで、溝内にはオリーブ黒色（7.5Y 2/2）粘質シルトが堆積していた。溝内からは古墳時代から中世にかけての土師器甕、高杯、羽釜、皿、須恵器片、瓦器椀、甕、火舎、複弁蓮華文八葉軒丸瓦が出土した。埋没した時期は、瓦器椀から13世紀前半と考えられる。

溝4

B 2地区で検出した。南北方向に延びる溝で北側を土坑5に切られる。南は調査地外に延びる。幅0.7m、長さ0.8m以上、深さ16cmで、断面は皿状を呈する。堆積土は上層が青黒色（10BG 2/1）細砂混りシルト、下層は緑黒色（10GY 2/1）極細砂である。無遺物。

溝5

B 3地区で検出した。東北東から西南西方向に延びる。長さ4.1m以上、深さ17cmで、底面は西端でT.P.2.593、東端で2.813mである。堆積土は暗緑灰色（10G 3/1）細砂で土師器皿、須恵器片、瓦器椀、瓦が出土した。時期は瓦器椀より12世紀後半から13世紀前半と考えられる。

溝6

溝7を切って掘られた溝である。溝7と同じ東西方向の溝である。幅30～36㎝、長さ4.8m以上、深さ12㎝、断面は皿状を呈する。底面は西端でT.P.2.997m、東端で2.936m、暗緑灰色（10G 3/1）細砂混りシルトが堆積しており、古墳時代から中世にかけての土師器高杯、把手、皿、須恵器片、瓦器椀が出土した。埋没した時期は瓦器椀から13世紀中葉から後半と考えられる。

溝7

B5からC1地区で検出した。幅22～53㎝、長さ6.3m、深さ10～13㎝、底面は東側でT.P.2.962m、西側で2.864mである。断面は皿状を呈し、暗青灰色（5BG3/1）細砂～中粒砂が堆積し、古墳時代から中世にかけての土師器高杯、羽釜、皿、須恵器壺、瓦器椀が出土した。埋没した時期は瓦器椀より12世紀後半と考えられる。

溝13

C2からC5地区で検出した。ほぼ東西方向に延びる溝で、土坑10、溝14、溝15を切っている。幅30～80㎝、長さ16m以上、深さ6～19㎝、底面はC5地区東端付近でT.P.3.017m、C3地区東端で2.985m、C2地区東端で2.943mで東に行く程低くなる。断面は皿状を呈し、暗青灰色（10BG3/1）細砂が堆積していた。溝内からは古墳時代から中世にかけての須恵器、土師器、瓦器、輸入陶磁器などが出土した。埋没した時期は瓦器椀から13世紀中葉から後半と考えられる。

溝15

C3からC5地区で検出した。溝13とほぼ平行に延びる溝で大半が溝13により切られている。幅38～40㎝、長さ10m以上、深さ33～38㎝、底面はC3地区でT.P.2.811m、C4地区で2.757m、C5地区で2.737mで西に行くにつれて低くなる。断面は皿状を呈し、青黒色（5BG2/1）シルトが堆積している。古墳時代から中世にかけての土師器高杯、皿、須恵器、瓦器椀などが出土した。埋没した時期は瓦器椀から13世紀前半から中葉と考えられる。

第2遺構面（第5層上面、第31図、図版12）

溝8のみを検出した。第5層上面において検出したのであるが、本来は第4層において検出されるべきものであったと考えられる。溝8はB2からC1地区で検出した。ほぼ東西方向に延びる溝である。幅約1.5m、長さ22.5m以上、深さ32～36㎝、底面はC1地区西端付近でT.P.2.872m、B5地区中央で2.672m、B4地区中央で2.593m、B3地区東端で2.578m、B2地区東端で2.562mと東に行く程低くなる。断面は台形、堆積土はC1地区で第1層暗緑灰色（10G 3/1）粘質シルト混り極細砂〈厚さ約15㎝〉、第2層暗緑灰色（5G4/1）極細砂〈厚さ7㎝〉第3層暗青灰色（5BG4/1）粘土〈厚さ9㎝〉、第4層暗灰色（N3）細砂〈厚さ13㎝〉、B4地区では第1層暗青灰色（10BG4/1）粘質シルト混り極細砂〈厚さ20㎝〉、第2層オリーブ黒色（5GY2/1）細砂〈厚さ13㎝〉、B2地区では第1層暗青灰色（5BG4/1）粘質シルト混り極細砂〈厚さ16㎝〉、第2層青黒色（10BG2/1）細砂〈厚さ16㎝〉で

古墳時代から中世にかけての須恵器、土師器高杯、甕、羽釜、皿、瓦器椀、白磁椀、青磁椀、瓦、馬歯、焼土などが出土した。埋没した時期は瓦器椀から13世紀前半から中葉と考えられる。

第３遺構面（第６層上面　第32図、図版13）

Ｂ２からＣ１地区で検出した。土坑２基、溝３条がある。

土坑８

Ｂ３地区東端で北半分を検出した。不定形な土坑で検出幅1.9m、長さ0.8m以上、深さ９㎝、断面は皿状を呈し、堆積土は暗青灰色（５ＢＧ４／１）極細砂である。無遺物。

土坑９

Ｂ３地区で検出した。土坑８が埋ってから作られたもので南北方向に長い長方形を呈する。幅42～45㎝、長さ１ｍ、深さ８㎝、断面は台形を呈し、暗緑灰色（５Ｇ４／１）極細砂が堆積している。土師器高杯、皿、小型丸底壺が出土した。５世紀中葉のものが大半であるが中世の遺物も混っている。時期は細片のため不明。

溝９

Ｂ２地区で検出した。東西方向から南北方向に向きを変えている。幅20～30㎝、長さ1.6m以上、深さ６㎝、底は東に行く程低くなる。断面は皿状を呈する。堆積土は暗オリーブ灰色（５ＧＹ３／１）粘質シルトである。無遺物。

溝10

Ｂ３地区で検出した。南南西から北北東に延びる溝である。幅30～42㎝、長さ0.9m以上、深さ４㎝、底は北に行く程低くなる。断面は皿状を呈する。堆積土は暗オリーブ灰色（５ＧＹ４／１）極細砂で、無遺物である。

溝11

Ｃ１地区で検出した。ほぼ南北方向に延びる溝である。幅63～74㎝、長さ0.9m以上、深さ７～11㎝で底は北に行く程低くなる。断面は皿状を呈し、緑黒色（10Ｇ２／１）粘質シルト混り細砂が堆積する。土師器、須恵器、瓦器の細片が出土した。

第４遺構面（第７層上面　第33・34図　図版15～17）

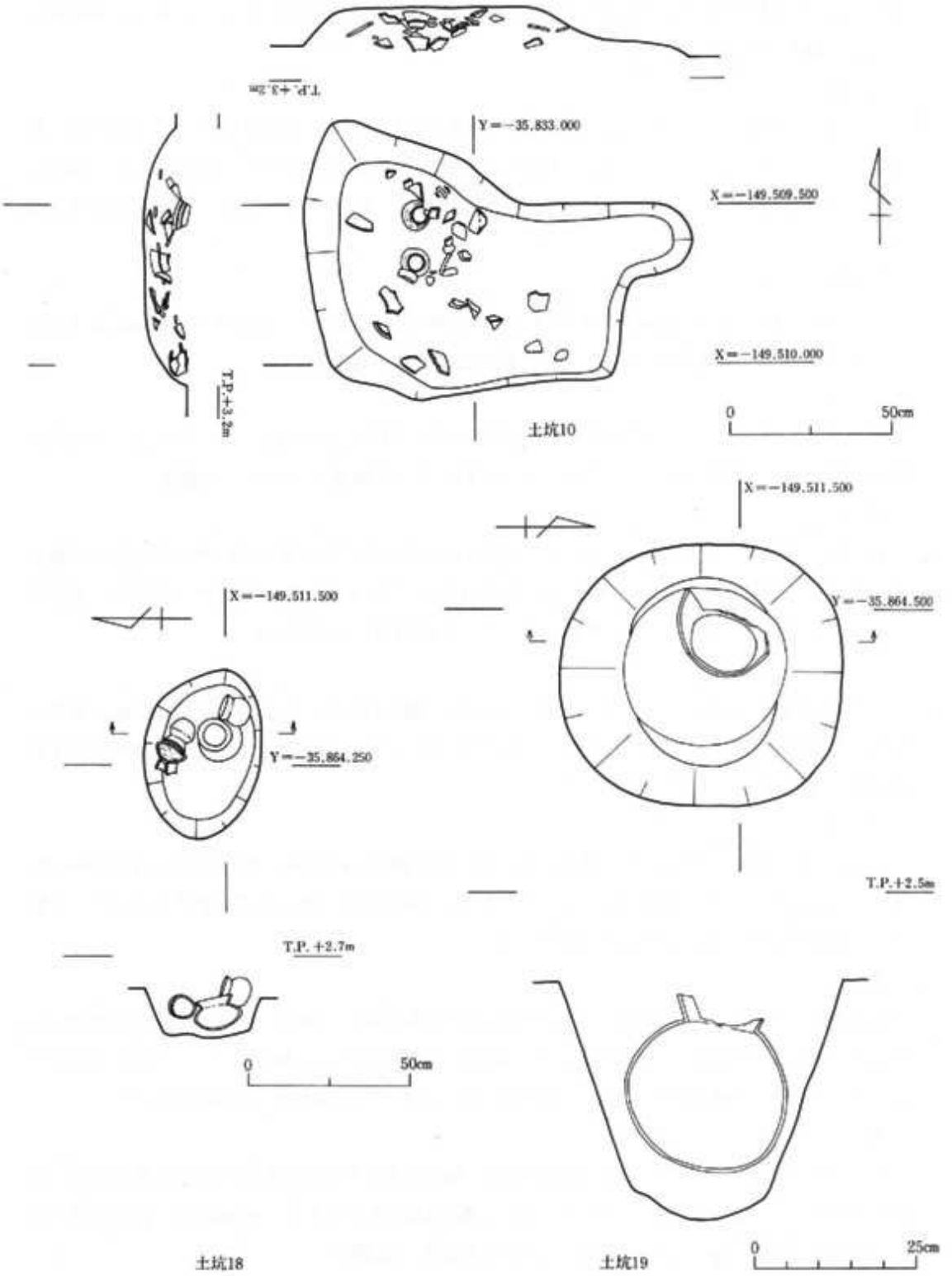
Ｃ２からＤ３地区で検出した。溝２条、土坑４基がある。ただＣ～Ｄ地区の第１遺構面では古墳時代と中世の遺構が同一面で検出されているが、ここでは古墳時代のものをまとめて記述する。土坑５基、溝１条がある。

土坑10

Ｃ２地区で検出した。南側の一部を溝13により切られている。南北推定1.1m、東西1.3m、深さ36㎝、不定形な土坑である。堆積土はオリーブ黒色（５ＧＹ２／１）シルトで、須恵器杯身、杯蓋、壺、土師器甕、高杯、製塩土器が出土した。５世紀末から６世紀前半に埋ったものと考えられる。

土坑11

Ｃ３からＣ４地区で検出した。南端の一部のみの検出である。東西3.3m、南北0.25m以上、



第13図　土坑10、18、19実測図

深さ0.1mで方形を呈すると思われる。堆積土は暗緑灰色（7.5GY3/1）シルト、須恵器、土師器の細片が少量出土した。

土坑12

C3地区で検出した。土坑11、13により一部を切られている。楕円形を呈すると思われ、短径72cm、長径68cm以上、深さ20cm、堆積土は2層あり上層が暗青灰色（10BG3/1）細砂、〈厚さ13cm〉、下層が暗緑灰色（7.5GY3/1）シルト〈厚さ7cm〉である。土師器片が少量出土した。

土坑13

C3地区で検出した。長楕円形を呈する。東西90cm、南北22cm、深さ6cm、断面はU字状を呈する。堆積土は暗緑灰色（10G3/1）極細砂である。無遺物。

土坑14

C4地区で検出した。大部分は調査地外に延びる。円形又は楕円形と考えられる。推定直径86cm、深さ11cm、暗青灰色（5BG3/1）粘質シルトが堆積していた。無遺物。

溝14

C2からC3地区で検出した。北から南に向かう溝が東に弧を描いて向きを変えさらに南に延び蛇行する溝である。幅55～80cm、長さ2m以上、深さ10cm、断面は皿状を呈する。暗青灰色（5BG3/1）粘質シルトが堆積しており、土師器細片が少量出土した。

土坑15

C2地区西端で検出した。土坑16が埋ったあとに掘られたものである。東西2.46m、南北0.5m、深さ13cmである。オリーブ黒色（5GY2/1）シルトが堆積していた。古墳時代の土師器高杯、甕、弥生土器底部が出土した。

土坑16

C2からC3地区で検出した。東西に長い楕円形で幅0.9～1.2m、長さ3.75m、深さ14cmで、鉄、マンガンを多く含む暗緑灰色（7.5GY4/1）粘質シルト混り細砂が堆積していた。古墳時代の土師器高杯、甕、須恵器片が出土した。

溝16

C3地区で検出した。北北東から南南西に延びる溝である。幅1.7～1.9m、長さ2.2m以上、深さ47～48cm、断面はV字状を呈する。堆積土は2層あり、上層はオリーブ黒色（5GY2/1）シルト、下層は暗緑灰色（7.5GY3/1）シルトで土師器片が少量出土した。

溝17

C4地区で検出した。東辺はほぼ南北方向、西辺は北東から南西方向に延びる溝である。幅1.3～2.9m、長さ2.6m以上、深さ35～45cm、断面は椀状を呈する。底面は南に行く程低くなる。堆積土は暗緑灰色（10GY4/1）シルトである。無遺物。

土坑18

D3地区で検出した。東西方向に長い楕円形で、長径53cm、短径36cm、深さ15cmである。

埋土は暗緑灰色（10G 3／1）細砂で、小型丸底壺6個体、土師器高杯が出土した。

土坑19

D3地区で検出した。第7層の下層であり、位置的には土坑18の南西に隣接する形となる。楕円形で南北44㎝、東西40㎝、深さ38㎝、堆積土は暗青灰色（10BG 3／1）粘質シルトである。土師器壺が口縁部を上にした状態で出土した。

第5遺構面（第8層上面　第35図　図版14、15）

B3～C1地区で方形周溝墓の一部を検出した。墳丘裾部南辺は長さ8.6mで方位はS—85°—Wである。周溝は南東隅で幅約3.2m、深さ16㎝、南西隅で幅1.5m、深さ15㎝、周溝底面は南西部が一番高くT.P.2.479m、北及び東にゆくにつれ低くなり、東西隅ではT.P.2.265mとなる。周溝内の堆積土は黒色（N1.5）極細砂混り粘土で南東隅から弥生土器片が出土した。墳丘盛土は第8a層暗青灰色（5BG 4／1）細砂上面からみられ約0.5mの厚さがある。盛土は大きく2層に分けられ、上層が灰オリーブ色（7.5Y 4／2）極細砂、厚さ約0.3m、下層が緑黒色（10G1.7/1）細砂混り粘土である。墳丘盛土の上面近くで供献土器と思われる甕が1点出土した。

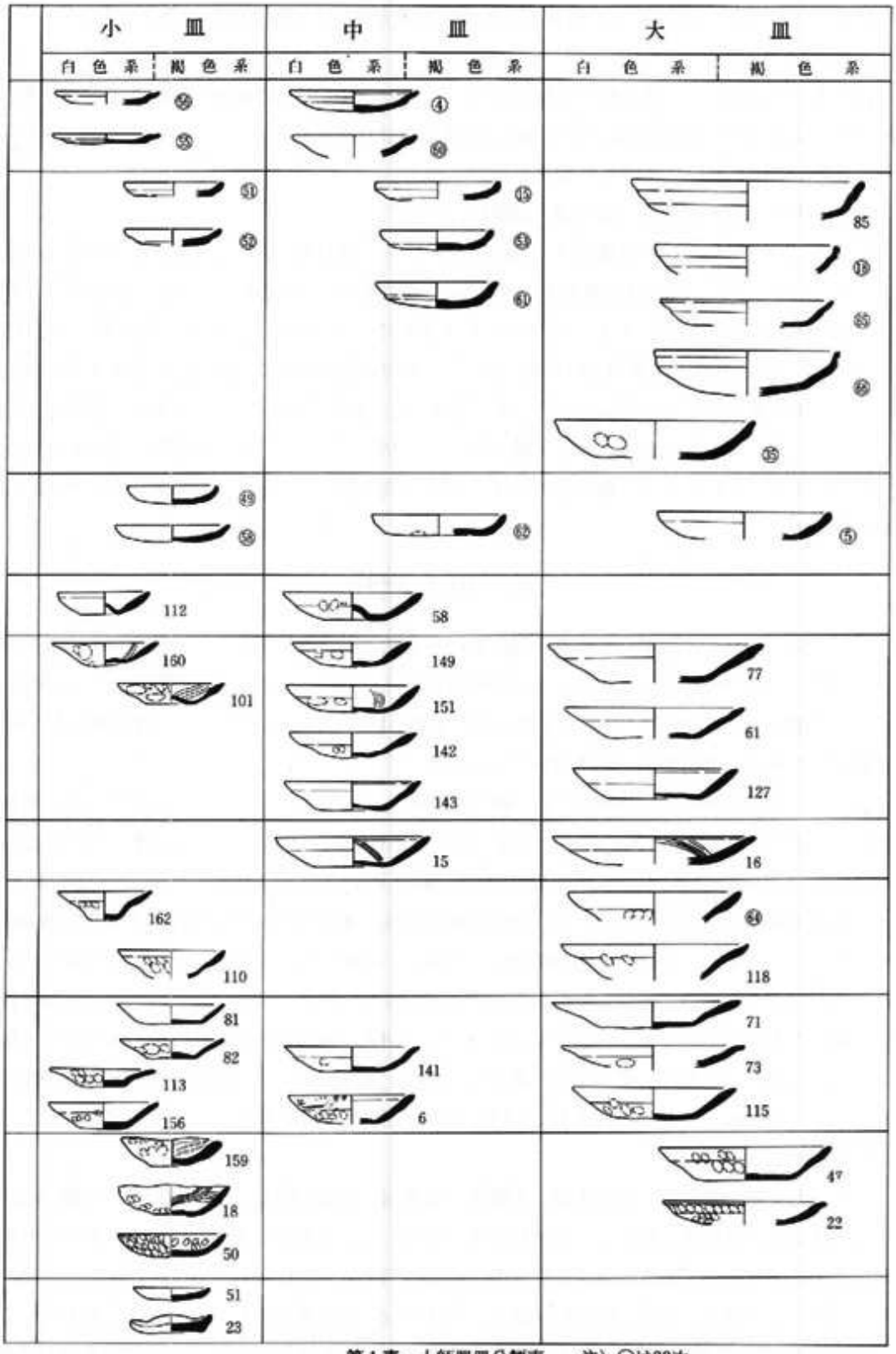
Ⅳ．出土遺物

32次、33次調査では遺構、整地層、包含層から多量の遺物が出土した。遺物は、弥生時代から歴史時代（江戸時代）にまで及ぶが、32次調査では室町時代のものが圧倒的に多く、33次調査では古墳時代と鎌倉時代のものが多かった。遺物の種類では土器が多いが、32次調査では瓦、木製品、石製品、金属製品、自然遺物などがある。

出土した遺物の整理は、各遺構ごとの埋土、堆積土から取り上げられたものを中心に、整地層やその他の包含層出土遺物の種類、器種に分けてその変化を考察するように心掛けながら行った。しかし、若江遺跡においては、遺跡の存続期間が約1400年もの長きにわたって断続的、あるいは継続的に生活が営まれていて、新旧遺構の重複も著しくそのため先行する時期の遺物が多く混入している。このため遺構の時期は一番新しい時期のものを採用したが、遺物整理においては図化できるものを掲載したため相当の時間幅をもったものとなったものもある。短時間の同時性をもったものではないことをお断りする。調査で検出された遺構の中で遺物が多く出土したのは堀で以下土坑、落ち込み、溝などである。堀などでは同一種類、同一器種を多量に検出しているため、すべてを図示したわけではなく遺構の組成の概要と特徴を捉えられるように取捨選択した。

出土した土器の種類は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器である。土器の種類を示す用語は焼成技法、胎土などの違いにより区分した。土師器は古墳時代のものから室町時代のものまでを含み、焼成温度が600～800度、酸化焔によって焼かれたもので、灰白色、褐灰色、淡橙色、灰黄色、灰色、にぶい黄橙色、黄灰色などの色調でやわらかい土器である。

須恵器も土師器同様、古墳時代から鎌倉時代までのものを含み、窯を用いて1000度以上の高



第1表　土師器皿分類表　　注）○は33次
○なしは32次

温、還元焔によって焼かれたものである。耐火性のある淡水性粘土を用いており、灰色、灰白色を中心とするが、還元、酸化の状態により褐灰色、明赤灰色などの色調を示す。

瓦器は器表に炭素を吸着させるが、その過程で還元化するため、器壁の断面が灰白色を呈する。ただ、表面の炭素の吸着が不充分で黒色、灰色になっていないものでも製作技法が同一であれば瓦器に含めている。

陶器は、7世紀後半代から奈良時代にかけて鉛釉を施した三彩、緑釉などの彩釉陶器が、続いて灰釉を施した高火度焼成の施釉陶器が生まれ、平安時代末頃から日本の各地で中世の古窯が形成され、生産される。須恵器の伝統をひきながら酸化焔焼成による茶褐色の色調に転化した常滑、瀬戸、美濃、備前、丹波、信楽などがあり、壺、甕などの貯蔵容器、椀、皿、鉢、擂鉢などの食器類、調理具が焼かれている。

磁器は、1200度以上の高温で焼かれた硬質で吸水性のない焼物である。素地は白色または灰白色で、透明または半透明の釉がかけられる。中国では漢代に青磁、白磁が焼かれ始め、宋代でその最盛期をむかえた。日本では平安時代以降江戸時代まで各期を通じて中国陶磁の影響を受け模倣に努めるが、完成されるのは江戸時代初期、肥前の有田においてである。

出土遺物の中で一番多くの割合を占めるのは土師器皿である。記述する上での繁雑さを少なくするため分類を行った。分類するにあたっては色調、形態差に注意を払った。色調差は、生産地の差及び工人差を表しているものと考えられる。形態差は時間差と製作技術系統の差を表すものと考えられる。色調では大きく白色系と褐色系に分けられ、大きさの上からは小皿、中皿、大皿に分けた。小皿は6～8㎝前後、中皿は9～11㎝前後、大皿は12㎝以上のものとした。形態では大きく8型式に分けることができたが、この分類表で使用した遺物は32・33次調査で出土したものに限ったため、該当するものがない場合は空白にした。

A型式　やや丸底ぎみ又は平らな底部から外反しながら立ち上がり、口縁部は水平近くに伸び、端部を内側に肥厚させるもので、平安中期～後期に特徴的なものである。口縁部を強くヨコナデし外反させているが、平安後期になるとヨコナデ及び肥厚が弱くなっていく傾向にある。胎土はほとんどが白色系である。

B型式　平らな底部から屈曲して外上方へ立ち上がる体部をもつ。古いものは口縁部に抉るような2段のヨコナデを施すが、新しいものは一段のヨコナデとなり抉りも浅く弱くなる。褐色系が大部分を占める。

C型式　基本的にはB型式に入るものと考えられるが、体部のヨコナデがほとんどみられなくなったものである。褐色系。

D型式　上げ底を呈するものをいう。緩やかに外上方に開く体部をもつ。D_1は底部の突出が著しい、所謂「ヘソ皿」と称されているものである。D_2は突出の緩やかな底部で、内底周縁に沿って時計回り方向のナデを施し、その末端を上方へ引き上げている。口縁部は肥厚し、端部は尖りぎみにおさめる。D_3はD_2とほぼ同じであるが口縁部があまり肥厚しないものである。

E型式　上げ底ぎみの底部から外上方に開く体部をもつ。体部下半から中央部にかけてユビオサエがみられ上半との間に屈曲あるいは外反がみられる。体部内面及び外面上半にヨコナデがみられる。白色系が多い。

F型式　平坦な底部から直線あるいはやや外反しながら外上方に開く体部をもつ。内底面周縁に沿って時計回りにナデ上げる。口縁上端の内外面をナデ調整する。体部外面下半及び外底面はユビオサエである。

G型式　底部から体部へ丸みを見せて続くが、形態は非常にいびつで雑な作りである。全体に器壁が厚く、体部外面には指頭圧痕が多く認められる。体部内面は時計回りにナデ上げるが雑である。すべて褐色系である。

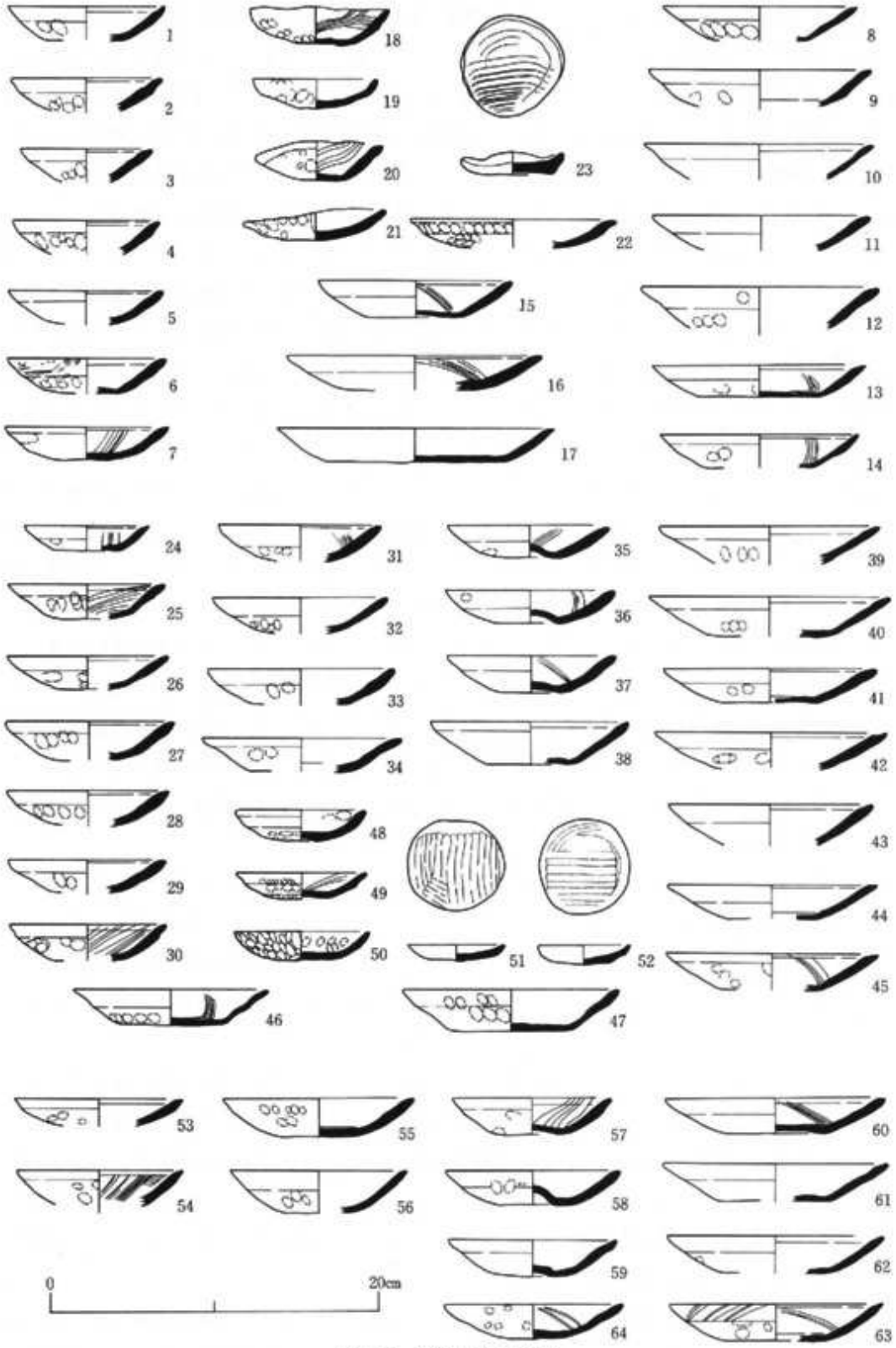
H型式　口径が6㎝前後と小さく、扁平な皿である。底部から体部へ緩やかに移行する。体部の立ち上がりが短く底部との境界が不明瞭なものもある。内面は一方向の直線的なハケメがみられるが1.7㎝、5本と粗いものである。口縁部はヨコナデをするが完全に1周しないものもある。胎土には0.7～0.3㎜大の長石粒を含む。褐色系。

若江第32次調査出土遺物

堀第II期

第1層から須恵器片、土師器皿、羽釜、瓦器椀、羽釜、皿、陶器、輸入陶磁器といった土器類、瓦、櫛・箸・ヘラ状木製品・紡錘車・墨書木製品・漆塗木製品・曲物などの木製品、貝・獣骨・木の実などの自然遺物が出土した。第2層からは1層と同様の土器類、箸・ヘラ状木製品・下駄・柄杓・板状木製品、桃の種・亀の甲羅及び骨・獣骨、地蔵石仏、鉄砲の弾丸、瓦が出土した。第3層からは土師器、瓦器、陶器といった土器類、箸、漆器椀・蓋・ヘラ状木製品・木簡、亀などの骨、皇宋通宝などの貨銭・金銅製金具などが出土した。

土師器　第1層出土の皿は、D型式が多く全体の約7割を占める。特にD_2型式が多く5割を越す。次いでG型式、F型式となる。1～11、14はD_2型式、12、13、17はF型式、15、16はD_3型式、18～22はG型式、23はH型式である。1～7は口縁端部内側に面をもつ（Iタイプ）。1は口縁端部に灯芯の煤の付着がみられる。また、底部内外面に黒斑があり褐灰色（10YR5/1）を呈する。2～9、11、13、14、17、20は灰白色（7.5YR8/2、10YR8/2、10YR8/1、2.5Y8/2、2.5Y8/1、5Y8/2、5Y8/1、7.5Y8/1、10Y8/1）、10は淡橙色（5YR8/3）、12、15、16は褐灰色（10YR6/1、10YR4/1）、18、19は灰黄色（2.5Y6/2）、21は灰色（5Y6/1）、22は内面が暗灰黄色（2.5Y5/2）、外面が黒褐色（5YR2/1）、23はにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。8～11は口縁部内面に面はみられないが、ほぼ同一の調整手法と思われる。ただ1～7の口縁外面のヨコナデが幅0.7～0.8㎝が多いのに対し、8～11では小皿、中皿が1.1～1.3㎝、大皿が1.6～1.7㎝である（IIタイプ）。13、14は中間的なもので口縁部内面に面様のものがみられ、口縁部外面のヨコナデの幅が1.1～1.3㎝ある（IIIタイプ）。12、15、16は底部及び体部の$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{2}$に黒斑がみられるものである。



第14図　堀第II期出土遺物

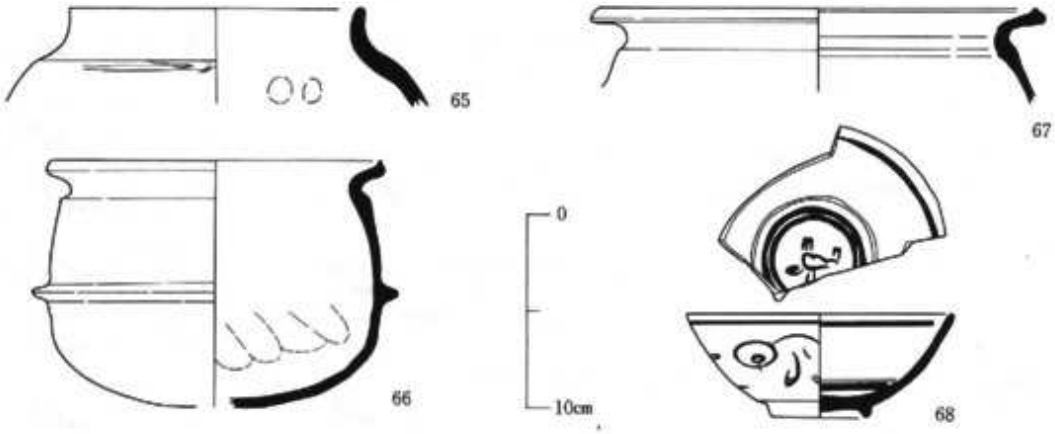
この黒斑は内外面にみられることから焼成段階で重ね焼きされた結果生じたものと考えられる（ｂ１タイプ）。底部周辺に沿って時計回りのナデがされているが、ナデが強くハケ様を呈する（Ⅳタイプ）。口縁部外面のナデも同様で強くハケ様を呈し、幅1.5～1.9cmある。口縁端部内面は凹線様を呈する。17も底部内外面に黒斑を有するが底部面積の$\frac{1}{2}$以下で円形を呈する。18、20は内底面に一方向のナデ、底部周縁に沿って時計回りのナデがみられ末端を上方へ引き上げるD_2型式と同様の手法を用いている。しかし作りは雑である。胎土には金雲母、長石が少量みられる。20の口縁部には灯芯油痕の煤がみられる。19、21の内面はナデであるが口縁部外面にはみられない。18、20以上にいびつで雑な作りである。胎土には細かい金雲母が少量みられる。22は基本的にはD_2型式と同様の手法を用いているが、口縁部外面はナデがみられずユビオサエにより調整し外反させている。23のハケメ原体は1.9cm幅、６本である。ハケは底部周縁に沿う形で時計回り、のち一方向のハケ、最後に口縁部を時計回りにナデを施す。皿の片側半分内外面に黒斑がみられる。

第２層出土の皿は、Ｄ型式が多く全体の７～８割を占め、あとはＦ、Ｇ、Ｈ型式である。Ｄ型式の中でD_2型式がほとんど占める。D_2型式も調整手法で分けるとＩタイプが２割（24、27～29）、IIタイプが３割（24、26、31～34）、IIIタイプが１割（30、38）、Ⅳタイプが４割（39～45）である。Ⅳタイプでは43を除き内外面は黒斑がみられる（ｂ１タイプ）。D_1型式（35～47）は口縁端部に灯芯油の煤がみられる。35の底部から体部にかけての内外面に重ね焼きしたと思われる黒斑がみられる。46、47はＦ型式でIIタイプの調整手法である。48～50はＧ型式である。底部及び体部内面は平滑であるがナデの痕跡は認められない。48は口縁部外面にヨコナデがみられるが、49、50はユビオサエである。51、52はＨ型式である。口縁部に沿ってハケを施したのち底部に一方向のハケを施す。52の口縁部外面はヨコナデを施す。胎土には0.1～１mmの長石を少量含む。

第３層出土の皿は、Ｄ型式が多く全体の８割を占め、残りはＦ型式である。Ｄ型式の中ではD_1が３割、D_2が７割で、D_2型式のうちＩタイプが２割、Ⅳタイプが８割である。Ⅳタイプでは61～63が黒斑のあるｂ１タイプである。55、56、62の口縁部内外面に煤の付着がみられるが、55の煤は灯芯油痕とは違った付着のしかたである。64は作りが雑で口縁端部の全周にわたって灯芯油痕がみられる。

土師器羽釜　66、67はやや下ぶくれの球形の体部と「く」の字形に外反する口縁部からなり胴部中位よりやや下に幅の狭い断面三角形の鍔をめぐらしている。66の口縁端部は内上方につまみ上げ突出させている。67も肥厚させ内側に突出させている。口縁部内外面はヨコナデ、頸部外面はユビオサエと強いヨコナデにより稜がある。体部内外面はナデである。66は口径16.9cm、器高12.7cm、67は口径22.3cmである。菅原正明氏の大和型I_1型[(1)]と考えられ、16世紀後半に位置づけられる。66は２層、67は３層出土。

瓦器茶釜（65）　球形に近い体部と直立した短い口縁部とからなる。体部に幅の狭い鍔がめぐり肩部に１対の環付を貼り付けるものと考えられる。肩部に１条の凹線がめぐる。体部及び



第15図　堀第Ⅱ期出土遺物

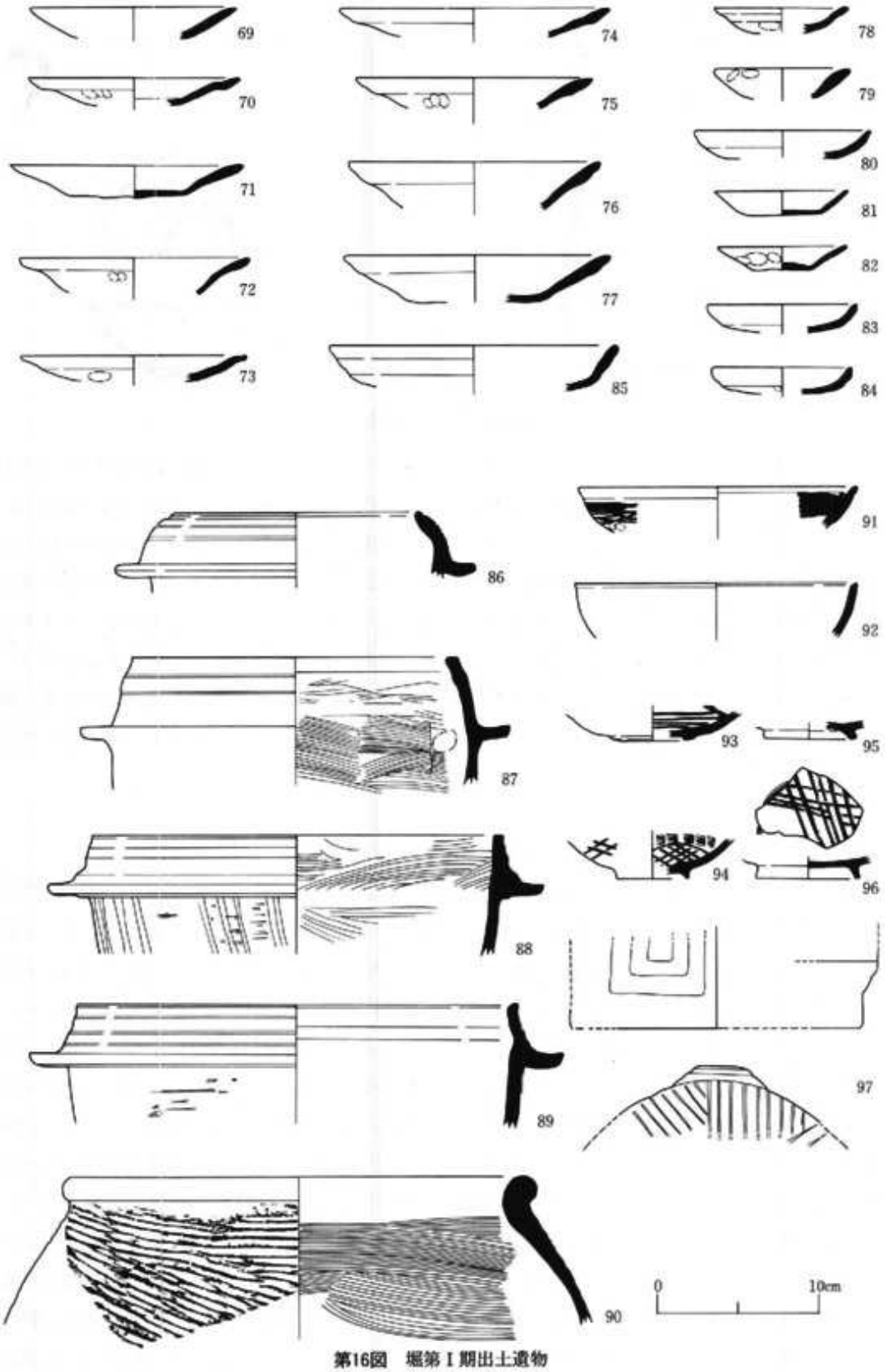
口縁部外面はヨコ方向に丁寧なヘラミガキ、内面はヨコナデである。色調は外面が黒（N２）内面は黒褐色（2.5Y３/２）で外面は黒光りしている。非常に堅く焼き締まっている。３層出土。

染付椀（68）　底部から内弯ぎみに緩やかなカーブをもって口縁部に続く。口縁端部は丸くおさめる。器壁は薄く、精巧な作り振りを見せる。体部外面は口縁部直下と底部付近に呉須で１条の圏線を描き、その間に唐草文様を描く。内面は口縁部直下に３㎜幅の太い圏線を１条めぐらす。内底面周縁に１条の沈線をめぐらし、その内側に２㎜の太さの圏線を２条めぐらす。圏線の内側には草花文を描く。呉須は全体に鈍い発色をみせる。削り出し高台でほぼ全面に施釉する。釉の厚さは0.3～0.5㎜である。磁胎は灰白色である。ひびが入った所を２ヵ所で補修している。中国製。

堀第Ⅰ期

須恵器、土師器、瓦器、陶磁器が出土した。

土師器　皿はB、D、F型式がある。B型式は混入と考えられる。D型式が３割弱、F型式が７割強である。D型式は69、77、79である。69はD_2型式のⅣ（ｂ１）タイプである。灰白色（7.5Y８/２）を呈する。77はD_2型式Ⅳタイプである。内面は赤黒色（7.5R２/１）、外面は赤灰色（10R６/１）であるがｂ１タイプとは違い内面全体と口縁端部が黒くなっている。内底面は一方向のナデを施す。79は口縁端部が肥厚するもので内底面周縁に沿ってナデ上げているが、作りは悪い。褐色系で灰白色（５Y７/２）を呈する。F型式は70～76、81、82である。70～72、74～76は体部外面中位にユビオサエがあり、口縁端部が肥厚する。ただ75、76はｂ１タイプである。73は口縁部のナデが強く外反し肥厚しない。以上のF型式は白色系で灰白色（2.5Y８/１）を呈する。ｂ１タイプは75灰白色（10YR８/２）、黒褐色（10YR３/１）、76が灰白色（7.5Y７/１）黒褐色（10YR３/１）を呈する。81、82は褐色系で、81はにぶい橙色（7.5YR７/３）、82はにぶい橙色（５YR７/３）を呈する。白色系と同様の手法であるが、内底面周縁に沿ってのナデが弱く、体部外面のユビオサエも弱い。81は器壁が薄い。細かい長石、石英、金雲母の微粒を含む。B型式はすべて褐色系である。78、83は口縁部に１段の



第16図　堀第Ⅰ期出土遺物

ヨコナデを80、84、85は2段のヨコナデを施す。78は口縁部が外反し、端部は丸くおさめる。83は口縁部が直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。80のヨコナデは弱いが、84、85は強く屈曲が著しい。85は大皿である。78、80、83の胎土には非常に細かい金雲母を含む。

瓦器　羽釜、甕、椀がある。86～89は羽釜である。86は半球形の体部をもつ。口縁は内弯し外面に沈線を3条めぐらす。口縁端部は上方にわずかに突出させているが、丸くおさめる。内外面とも丁寧にヨコナデする。鍔の下半はヘラで調整し面をもつ。内外面とも灰色（N5）を呈する。菅原正明氏の河内J b[1]に相当する。87は口縁部が内傾し、外面に2条の沈線がめぐる。口縁端部は内側につまみ出され肥厚する。体部から口縁部にかけての内面には1.4㎝、11本からなる原体でハケメを施す。口縁部はヨコナデを施す。88は外傾する口縁部をもつ。口縁部外面には段をめぐらす。体部外面はヘラケズリ、内面は2.1㎝、9本の原体で粗いハケメを施す。89は内傾ぎみに立ち上がる口縁部をもつ。口縁部外面には段をめぐらす。口縁端部はヘラで調整し面を持つ。体部外面はヘラケズリ、口縁部内面は強いヨコナデである。88、89は河内D型に相当する。90は甕である。体部外面に粗い右下がりの平行タタキメをもつ。頸部は内傾し、口縁部を短く外方に折り返し玉縁状を呈する。体部内面は1.3㎝、14本からなる原体でハケメを施す。口縁部はヨコナデである。91～96は椀である。91は内外面とも2.5㎜の太さのヘラミガキを密に施す。92は口縁端部内側に沈線がめぐる。非常に幅の細かいヘラミガキを密に施す。大和型の椀である。93は断面台形の低い高台を貼り付ける。内底面にナデ、のち並行の暗文を施す。94は断面三角形の割合高い高台を付ける。体部外面は分割してヘラミガキされている。内底面はジクザクを交叉させ斜格子の暗文としている。ヘラミガキの幅が狭く、密で丁寧なことから大和型のものと考えられる。96は高台をもち、内底面に斜格子の暗文をもつ。高台の径も大きく11世紀後半～12世紀初頭頃のものと考えられる。

石臼　上石であり、刻み目は主溝が8本、副溝が8本の8分画8溝式である。副溝の幅は1.7㎜、主溝は3㎜で、副溝の間隔は5～7㎜である。摺面は周縁部分から中央部の心木軸受けに向かって隙間がしだいに広くなっていく。この隙間のことを「ふくみ」といい、上石と下石との最大のふくみが0.5㎜程度といわれる[2]が、この場合は上石の破片であり隙間がどれぐらいになるかは不明である。摺面から4㎝上に挽き木を取り付ける方形の穴がある。一辺1.9㎝、奥行き3.5㎝以上であり、穴の四周には方形の飾りがある。飾りの厚さは約1㎝で方形郭が3段よりなる。石材は砂岩である。この石臼は茶臼と考えられる。お茶の葉を微粉末にした抹茶をたてる茶の湯は、中国から栄西が伝え『喫茶養生記』を著したとされている。しかし、栄西は薬研で粉にしていたといわれ、抹茶を挽く石臼が現れたのは鎌倉時代末頃といわれ、それも輸入品として渡来したものである。茶臼の国産化は室町時代に入ってからで、それまで禅宗の高僧や上流階級の間で行われていた茶の風習が武士の間にも広まったからである。抹茶の原料葉は、覆いをかぶせて日蔭で柔らかく育てた葉を蒸して、揉まずに乾燥し、粗砕きして茎の部分を除去し、葉肉の部分だけを集め、これを上石の中央部の供給口に入れ、心木との隙間で粗砕きされ、上石、下石の隙間に入り込み、周縁部分の摺あわせ面で粉にされる。『宗及他会記』

によると、天正8年（1580）5月21、22日の両日にわたり、若江で茶会が催されている。多羅尾玄蕃、野間左吉兵衛尉康久、池田丹後守教正の若江三人衆が参加しており、若江城中において行われたものと推定されている。[3]

土壁

土師器、須恵器、瓦器、陶器、輸入陶磁器、弥生土器が出土した。

土師器　皿はC～F型式がある。98はC型式で褐色系である。内底面周縁に沿ってのナデが弱く、体部のヨコナデはほとんどみられない。体部の器壁が厚い。にぶい橙色（5YR6/4）を呈する。99はE型式、白色系で淡黄色（2.5Y8/3）を呈する。100、101はD_2型式である。両方とも褐色系で100は橙色（5YR6/6）、101は明褐灰色（7.5YR7/1）を呈する。100の口縁部外面はヨコナデにより沈線様のものがめぐる。白色系に比べ作りは雑である。102～104は白色系である。灰白色（2.5Y8/1）を呈する。102はF型式、103はE型式、104はD_2型式である。

瓦器　105は皿である。底部内外面から体部まで密にヘラミガキされている。内底面は並行の暗文もみられる。11世紀代のものと考えられる。混入である。

溝1

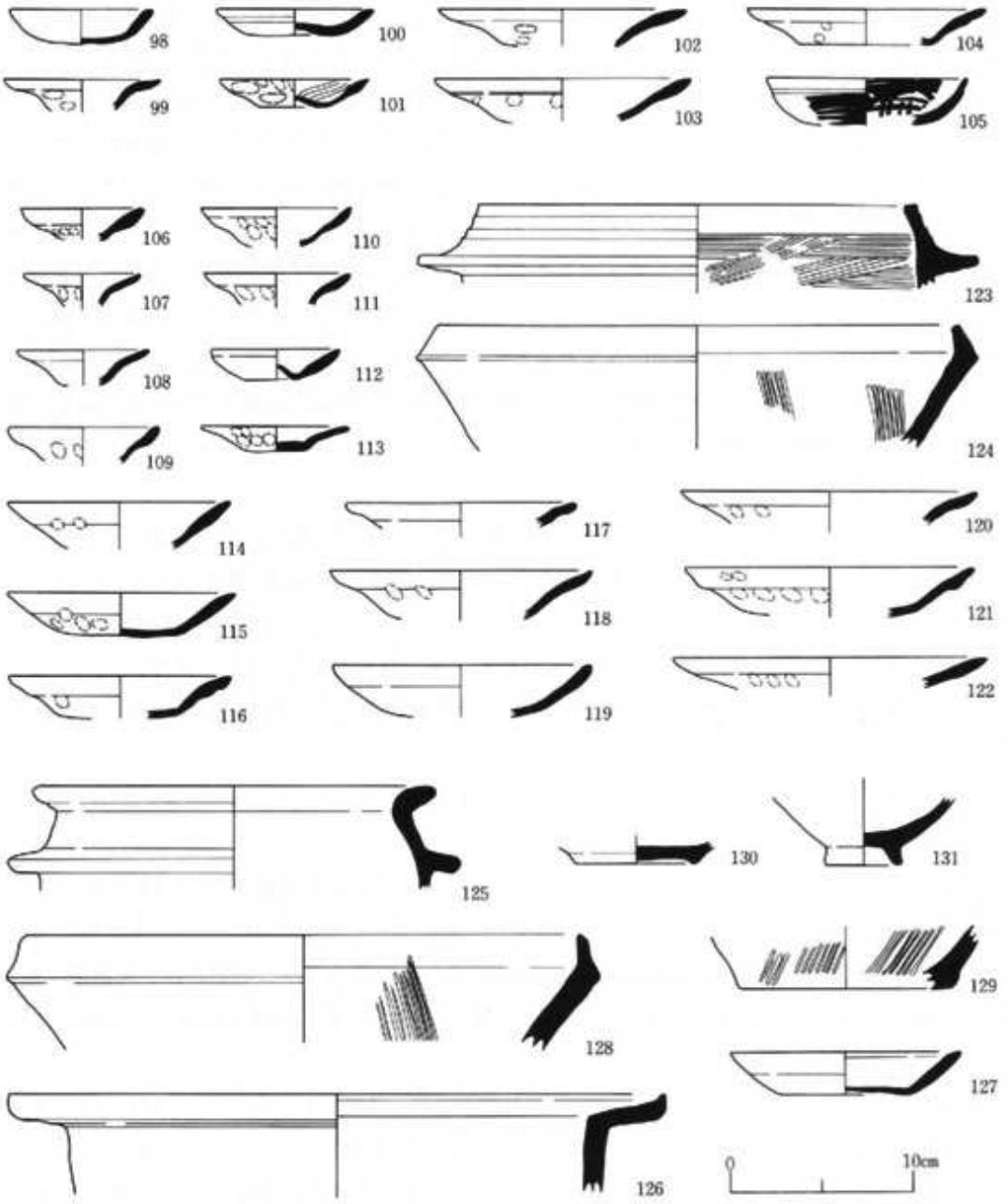
第1層から土師器、須恵器、陶器、瓦器、輸入陶磁器、桃の種、第3層から土師器皿、羽釜、須恵器片、瓦器椀、擂鉢、陶器片、白磁片、第4層から土師器皿、瓦器椀、羽釜、須恵器片、陶器片、弥生土器片、第5層から土師器皿、羽釜、瓦器椀、羽釜、陶器片、須恵器片、青磁椀片、白磁片が出土した。

土師器　皿はB、D～F型式がある。106～111はE型式の小皿である。106～108は白色系で、灰白色（5Y8/1）、109～111は褐色系で灰白色（5Y7/2）～にぶい黄橙色（10YR7/2）を呈する。112はD_1型式で褐色系である。にぶい黄橙色（10YR7/3）を呈する。底部周縁に沿ってのナデは逆時計回りである。器壁は厚い。113はF型式である。白色系で灰白色（7.5Y7/1）を呈する。114～116はF型式の大皿である。白色系で灰白色（5Y8/1）を呈する。115の底部内面はハケメ状にもつ一方向のナデがみられる。118、120～122はE型式の大皿である。白色系で灰白色（7.5Y8/1）を呈する。119はB型式と考えられる。平底の底部より緩やかに内弯しながら外上方に立ち上がる。体部内面と口縁部をヨコナデする。白色系で灰白色（7.5Y8/1）を呈する。

瓦器　椀、擂鉢、羽釜がある。123は羽釜である。内傾する口縁部外面に段を3段めぐらしている。口縁端部は面をもち、外側に肥厚する。肩部に幅の広い鍔をめぐらす。口縁部と鍔はヨコナデ、体部内面はハケメである。河内D型である。

陶器　124は備前焼擂鉢である。直線的に外上方に立ち上がる体部に、内傾し上下にやや拡張する口縁部をもつ。口縁端部丸くおさめる。擂目は1.7cm、7本の櫛状施文具により底部から口縁部に向かって施文されている。にぶい赤褐色（5YR4/4）を呈する。

溝2



第17図　土壙、溝出土遺物

土師器、須恵器、瓦器、磁器（伊万里焼）が出土した。

土師器　羽釜、鍋、皿がある。125は羽釜である。球形に近い体部に「く」の字形に外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。鍔は水平よりやや下がりぎみにめぐらす。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデである。内面は灰白色（10ＹＲ８／２）、外面は褐灰色（10ＹＲ４／１）を呈する。河内Ｂ型である。126は鍋である。直立して立ち上がる体部に屈曲して外方向に開く口縁からなる。口縁端部は肥厚し上方につまみ上げる。口縁部及び体部内面

は入念なヨコナデである。内面は灰黄色（2.5Y 6/2）、外面は褐灰色（10YR 5/1）を呈する。127はD_2型式の皿である。白色系で灰白色（2.5Y 8/2）を呈する。黒斑がみられる。

陶磁器　備前焼、美濃焼、唐津焼、伊万里焼がある。128は備前焼擂鉢である。124とよく似た形態である。ただ口縁部のヨコナデが強いため外反する。擂目は2.6cm、10本の櫛状施文具により施されている。灰赤色(7.5R 4/2)を呈する。130は美濃焼皿である。平底から内弯ぎみに短く立ち上がる体部をもつ。高台は低く断面三角形である。淡緑色の透明感のあるガラス質の釉を全面に施している。釉には粗い貫入がみられる。131は唐津焼椀と思われる。内弯しながら立ち上がる体部をもつ。高台はやや開きぎみの安定したものである。透明感のあるガラス質の釉を全面に施している。釉には細かい貫入がみられる。オリーブ黄色(5Y 6/3)を呈する。

瓦器　椀、擂鉢がある。129は擂鉢である。擂目は2.3cm、7本の櫛状施文具で斜放射状に施されている。体部外面は粗いハケメである。

土坑1

土師器皿、羽釜、須恵器片、瓦器羽釜、椀、陶器片、白磁片、砥石、瓦などが出土した。

瓦器　羽釜と椀がある。132は羽釜である。内傾する口縁部の外面に段を2段めぐらす。口縁端部は外方に肥厚し、上部に平坦面をもつ。肩部に水平よりやや下がりぎみの鍔をめぐらす。口縁部、鍔はヨコナデ、体部内面はハケメである。河内D型である。133は椀である。内面のミガキが数回程度の圏線と粗いものである。高台が消滅する前後のものと思われる。器面の炭素の吸着は割合よく灰色（N 6）を呈する。

土師器　皿と羽釜がある。134はF型式である。白色系で灰白色（7.5Y 8/2）を呈する。

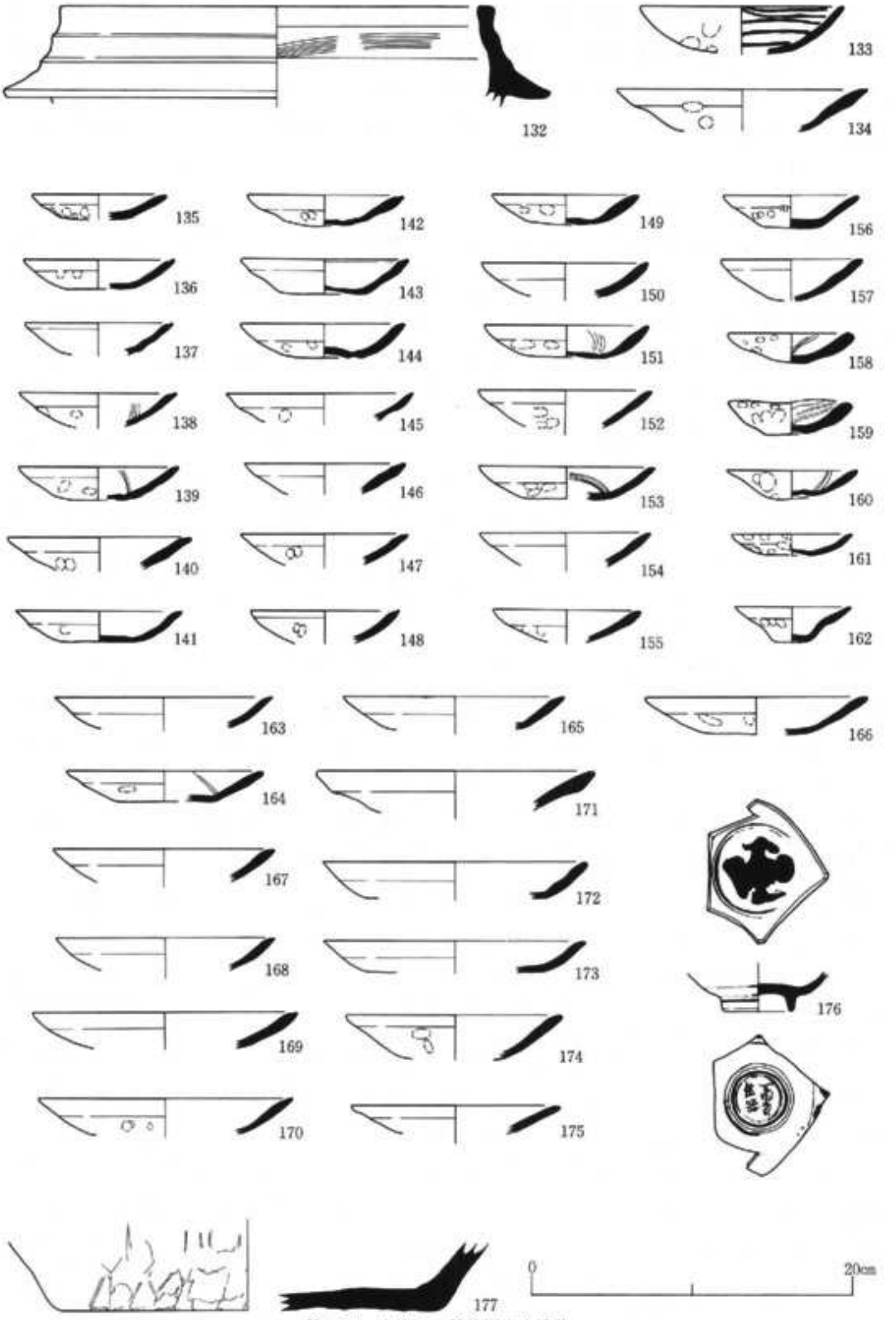
整地層

整地層は2層に分けられ上層からは古墳時代から近世初頭に至る須恵器片、土師器皿、羽釜、瓦器椀、羽釜、国産陶磁器、輸入陶磁器（青磁、白磁、青花）が、下層からは弥生時代から近世初頭に至る弥生土器甕、壺、須恵器杯蓋、杯身、高杯、土師器高杯、羽釜、皿、瓦器椀、皿、羽釜、国産陶磁器、輸入陶磁器（青磁、白磁）が出土した。しかし、出土遺物の大部分を占めるのは土師器皿である。

土師器　皿、羽釜、高杯がある。135～175は皿である。135～137はC型式、138～140、142はD_2型式のⅢタイプ、144～147、149～155、157、160、161、163～168はD_2型式のⅡタイプ、143、148はD_2型式のⅠタイプ、166、169、170はD_2型式のⅣタイプ、162、171はE型式、141、156、172～175はF型式、158、159はG型式である。

陶磁器　176は青花である。内底面が緩やかに盛り上がっている。高台畳付はヘラケズリされ露胎となっている。内底面周縁に沿って二重円圏が描かれ、その中に如意雲を表わす。高台内には二重円圏内に「冨貴佳器」という字句を描いている。小野正敏氏分類の碗E群[4]にあたる。177は壺又は甕の底部である。内面には自然の灰釉がかかっている。外面はヘラによる調整である。

木製品（第19、20図　図版29、30）



第18図　土坑１、整地層出土遺物

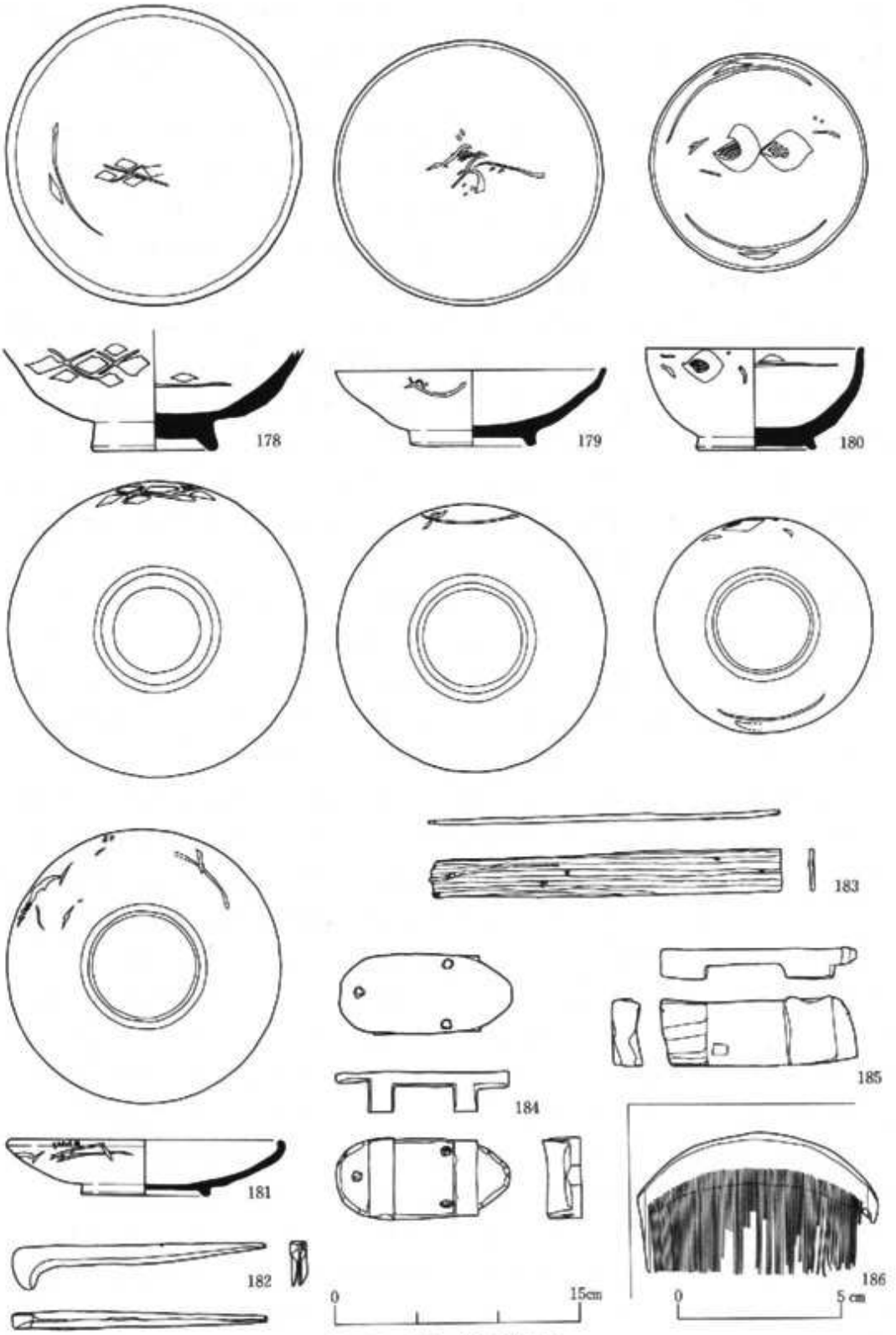
今回の調査で出土した木製品は300点あまりあるが、それ以外に不明用材、板材、加工木片などがある。木製品では漆器椀、蓋、皿、箸、食器を置く折敷など食膳具、容器としての曲物や桶、樽などの木栓、柄杓、装身具としての櫛、紡績具としての紡錘車、履物としての下駄、墨で板に字を書いた木簡、ヘラやハケ状の木製品など様々な種類がある。すべて堀第II期からの出土である。

漆器（178～181、191、197）　完形のもの、破片のものを含めて7点出土した。ほとんどが椀であるが、蓋や皿、用途不明の台脚状のもの、円盤状のものがある。器形は薄手で浅い179、181からやや厚手で深さを増す178、厚手で深い180があり、高台の低いものと、1.8cmと高いものがある。漆の色は内外面とも黒が178、179、180、内面が朱で外面が黒が181、他に内外面とも朱が1例ある。178は口径18cm以上、高さ6.3cm以上で、底部の厚さが1.6cmと厚いものである。内底面に×により区画された中に菱形をそれぞれに入れた紋を入れ、体部下半にも弧線の上に菱形を配した文様、体部外面中央付近にも×に菱形文を二つ重ねた紋を朱漆で描いている。179も内底面と体部外面に朱漆で文様を入れる。口縁部は欠損している。180も口縁部と高台部が欠損している。口径13.3cm以上、器高6.3cm以上である。内底面、体部内外面の相対する面に幾何学文を朱漆で描く。181は蓋であろう。外面口縁部直下の相対する面2ヵ所に文様を描く。191は台脚状のものである。人目にふれる一面にだけ漆を塗っている。何かに取り付けられていたと思われ、目釘が3ヵ所でみられる。197は円盤状のものである。直径5.6cm、厚さ0.9cmである。両面とも黒漆である。片側の1.1～1.3cmがわずかに高くなり段を形成し、この段の片側のみに朱漆を塗っている。漆の剝離がみられ、再加工したものと考えられる。樹種は178～180がトチノキ、181が広葉樹（不明であるがムラサキシキブに似る）、両面朱塗の椀がカバノキ、191、197がヒノキである。

下駄　2点出土した。台と歯とを一木から作る連歯下駄である。鼻緒孔の位置は、前壺を台の中央にあけ、後壺を後歯の前にあける。鼻緒孔は台の上面から錐などであけたものと思われる。歯の作りは台とほぼ同じ幅で、縦断面が長方形を呈するものである。184の歯先は中央部が凹んでおり、歯の両端にすり減りがみられないことから、日常に使用されたものではなく儀式などに使用され捨てられたものと思われる。台の裏面にはノミ痕が残り、周回は面取りがされている。樹種は184がスギ、185がマツ（二葉松）である。

櫛　（186）　板片の一側縁から細い歯を挽きだし、表面を平滑に研ぎあげた横櫛である。棟が半円形を呈するものである。幅7.2cm、高さ4.2cm、厚さ1cm、歯数は6.7cmで61本である。歯の長さは中央で3.2cm、両端で2cmである。樹種不明。

木簡（187～189）　木片に墨書のあるのが木簡である。木簡は内容により大きく4つに分けられている。文書様木簡、付札、習字・落書、その他である[5]。文書は書式上何らかの形で授受関係が明らかにされているものを指す。付札は物品の品名、数量を表わすだけの付札と貢進物付札の2種がある。習字・落書は同じ文字を何回となく書きつらねたものや戯れ書き、落書などである。高価な紙と違って木は小刀で削り取れれば何回となく書き付けることができる。



第19図　堀第II期出土木製品

188は「いろはにほへと」と書かれたものでこの習字にあたるものと考えられる。その他は呪符や告知札である。187は形態から付札と考えられるが内容は不明である[6]。189は「六十二」と書かれてある

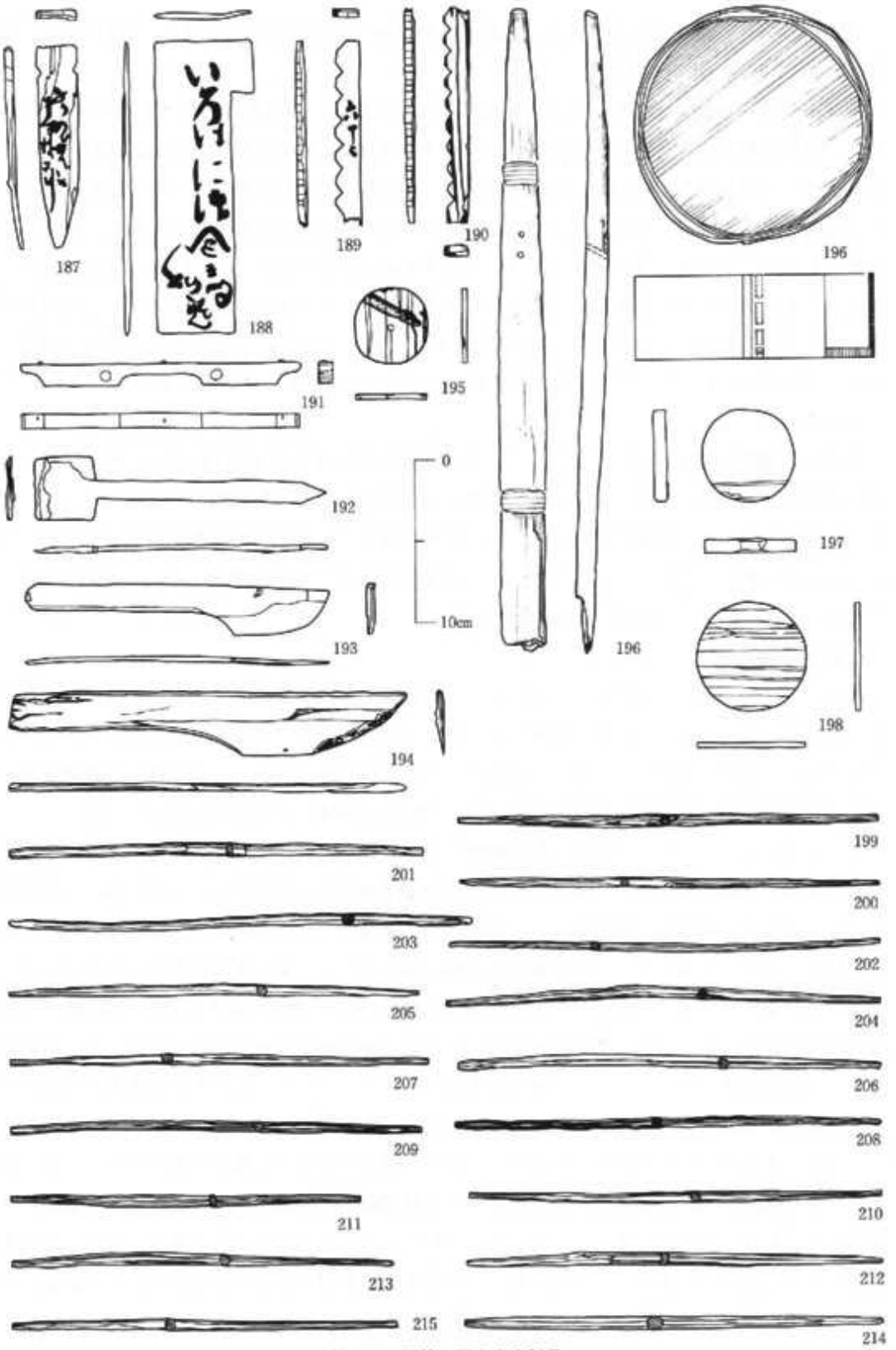
ハケ状木製品（192） 小さな細板を削って作ったものである。一木で形態から身と柄に分けられる。身は先縁が一直線になっていて片側のみ削り、あるいは磨り減っていて薄くなり尖っている。身の幅は4㎝、長さ3.7㎝、厚さ0.2㎝である。身から幅を狭めて柄となる。柄の幅は頸部で1㎝、柄尻にゆくほど幅を増し1.3㎝となるが、尻部先端は三角形に鋭く尖っている。長さ14.3㎝、厚さ0.2～0.3㎝。樹種はスギである。

ヘラ状木製品（193、194） 細板を包丁形に整形したものである。193は長さ18.5㎝、刃部幅2.9㎝、柄部幅1.6㎝、厚さ0.2㎝。刃の基部から弓状に削り込んで幅を狭くし柄部を作る。刃は作り出されてはいない。柄尻は半円形に仕上げている。194は長さ24.3㎝、刃部幅3.7㎝、柄部幅2.4㎝、厚さ0.3～0.4㎝。193と同じく刃の基部から弓状に削り込んで柄部を作る。柄尻は斜めに直接的に切っている。刃部は片側のみ削り出して刃を付けている。類例は大坂城三の丸[7]、広島県草戸千軒町遺跡[8]、尾道市街地遺跡[9]、福井県一乗谷朝倉氏遺跡[10]、東京都青戸・葛西城址[11]などで出土している。樹種は両方ともスギである。

紡錘車（195） 糸をつむぐ時、回転によって糸に撚りをかける器具の部品。円板の中心に径0.4～0.3㎝の円孔がある。この中に糸巻棒を通しこれを心棒として独楽のように回転させれば、一端に結ばれた糸は撚られながら軸棒に巻きつき紡錘（つむ）となる。ただし糸巻棒は残っていなかった。円板の直径4.5㎝、厚さ0.3㎝で周縁はきれいに面取りされている。外周面と片面の一部に墨書の跡がみられる。樹種はスギである。

曲物柄杓（196） 曲物とは桧や杉などの薄板を円筒形に曲げて、両端の重ね合った部分を桜の皮紐で綴り合わせて側板とし、これに底板を木釘などで接合した容器の総称である。196は直径14.5㎝、高さ43㎝の円形曲物を身にして棒状の柄を取り付けたものである。身の側板の綴合せは2ヵ所、内面にはケビキはみられない。側板は2枚の薄板を重ねてあり、底板との結合は4ヵ所から打ち込んだ木釘によって行う。底板を結合したあとさらに側板の外に2枚の薄板を綴合わせている。柄は扁平な細棒で先端を徐々に細く削り出している。曲物の身には柄の先端を挿入する孔はみられず、柄の先端が底面より約60度の角度をもって削られていることから曲物の上面から底板の隅に向かって、水平面から17～18度の角度で装着されていたものと思われる。曲物上面との結合は1個の貫通した釘孔が柄にみられることから木釘によるものと思われる。先端より27～39㎝の間は手による磨耗のため角がとれ断面が楕円形を呈する。柄の現存長39.3㎝、幅2.8㎝、厚さ1.5㎝。樹種はモミである。

箸（199～215） 完形品で86点、破片を含めると200点以上出土している。いずれも木目方向の削りによって仕上げられている。形態的には、断面が長方形、方形のものと、楕円形、円形を呈するものに分けられる。直径は0.5～1.5㎝であるが、0.7㎝前後が多数を占める。長さは15.7～28.6㎝であるが21～26㎝の長さの箸が全体の76%を占める。



第20図　堀第II期出土木製品

蓋板（198） 円板状のものである。周縁に目釘跡がなく蓋板と考えられる。直径6.5㎝、厚さ0.3㎝。樹種はヒノキである。

用途不明品　189、190は切欠きのある板。細板の一側縁に三角形の切欠きをならべる。189は他の破片と接合でき現存長19.7㎝、幅1.6㎝、厚さ0.6㎝。190は現存長13.5㎝、幅1.6㎝、厚さ0.6㎝。これ以外にも現存長11.8㎝、幅1.7㎝、厚さ0.5㎝のものがある。いずれも樹種はスギである。類例が平城宮６ＡＢＥ区整地層出土[6]がある。182は柄状の木製品である。柄尻は山形に突起を作り全面を丁寧に削っている。厚さ0.9㎝、全長15.2㎝。上面は平らな面となり、先端から６㎝のところに幅0.3㎝、深さ0.2㎝の溝を掘る。柄の下面は両側を薄くして両刃状に作っている。樹種はヒノキである。183は幅2.6㎝、現存長21.2㎝、厚さ0.3㎝の細板の両端と中央に0.3㎝大の円孔をあけている。左側は欠損している。樹種はスギである。

金属製品

鉄砲玉　堀第Ⅱ期第２層から出土した。黒褐色を呈するもので直径12.75㎜、重さ11.7ｇある。鋳張りなどはみられず、表面を細かく叩いて整形したと思われる細かな凹凸がみられるが、精巧な作りである。青銅製と思われる。若江遺跡ではもう１点第24次調査で出土している。これは表面が白色をしており、この白色の部分は鉛が酸化した鉛丹と考えられる。直径11.63～12.3㎜、重さ9.6ｇ。一端に枝状の鋳張りが残っている。

石製品（図版２）

石仏　タテ34.5㎝、ヨコ27㎝、厚さ14㎝の花崗岩製である。裏面はほぼ平らで火を受けたのか黒色で煤が多く付着している。地蔵石仏と考えられる。胸より上は欠失していて全体の様子は窺えない。表面も磨耗しているため彫成手法が明らかではないが、一石一尊仏で薄肉彫り、姿態は立像で足及び衣を身に付けているのはわかるが、錫杖、宝珠などは明らかでない。

若江地域には、このような地蔵石仏が割合みうけられる。若江北町３丁目の浄土真宗「信行寺」の西南に地蔵堂があり、この中に二幡石造地蔵菩薩立像が安置されている。高さ1.6mの花崗岩の自然石の表面を舟形に彫り、その中に高さ92㎝の石仏を半肉彫りしている。右手に錫杖を持ち、左手に宝珠を持つ。南北朝時代初期の石仏として、東大阪市の指定文化財となっている。若江東町３丁目の府道沿いに長沢辻地蔵石仏がある。立像で高さ1.7m、幅83㎝の花崗岩の表面を舟形に彫り、像高62㎝の像を刻んでいる。像の左に「康永元年（1342）」の銘が刻まれ、南北朝時代の石仏として市の指定文化財となっている。このほか第39次調査で石垣の中から丸彫りの地蔵菩薩立像が出土している。また、地蔵石仏ではないが、若江北町３丁目の「蓮浄寺」本堂裏の墓地南西に、永禄２年（1559）銘のある十三仏板碑がまつられている。南北朝の争乱以降、若江地域は特に両畠山による家督相続争いの舞台となり、度重なる戦乱の惨禍にあい、数多くの死者を出したものと考えられる。このような中で天下泰平、あるいは追善や逆修供養（逆修とは生きている間に自分たちの死後の菩提と冥福を祈るために行う法養仏事のこと）の祈願をこめて造立されたものと思われる。

33次調査出土遺物

落ち込み1

古墳時代から中世にかけての須恵器杯身、壺、甕、土師器甕、把手、羽釜、皿、円筒埴輪、瓦器椀、白磁皿が出土した。1は瓦器椀である。器形は皿状であり、内面のミガキも2回しかみられず高台も消失した時期のものと考えられる。口径11.8cmである。2は白磁皿である。底部は平底である。内底面周縁に1条の沈線をめぐらしている。灰白色の釉を施すが、底部外面と体部外面下半は釉を掻きとっている。

溝2

古墳時代から中世にかけての土師器高杯、把手、羽釜、皿、須恵器片、瓦器椀、皿、白磁椀、青磁椀、瓦、馬歯が出土した。

土師器　3、4はA型式、5はC型式の皿である。3は口縁端部が肥厚し器壁も厚い。3、4とも白色系で灰白色を呈するが、3の方が胎土が精良で4は胎土がやや粗く、金雲母やくさり礫を含む。5は褐色系でにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土に長石、金雲母を含む。

瓦器　椀と皿がある。6～13は椀である。6～11の口縁部は強くヨコナデするため外反する。体部外面のヘラミガキは9を除き全くみられない。9も2～3回のヘラミガキで指による凹凸が目立つ。内面のヘラミガキは圏線状であるが粗くなっている。見込みの暗文は8、9、11が並行線、10が細い線による斜格子、12は全面を塗りつぶすような太い線で乱雑にミガキを施している。13は口縁端部内面に沈線がめぐっている。ミガキの線も平均0.4mmと細いものである。大和型である。14は体部外面にヘアピン様のヘラミガキを少し施している。内底面もヘアピン様のジクザクの連続する並行線と思われる。ヘラミガキの線も細く、楠葉型または大和型の皿と考えられる。

溝3

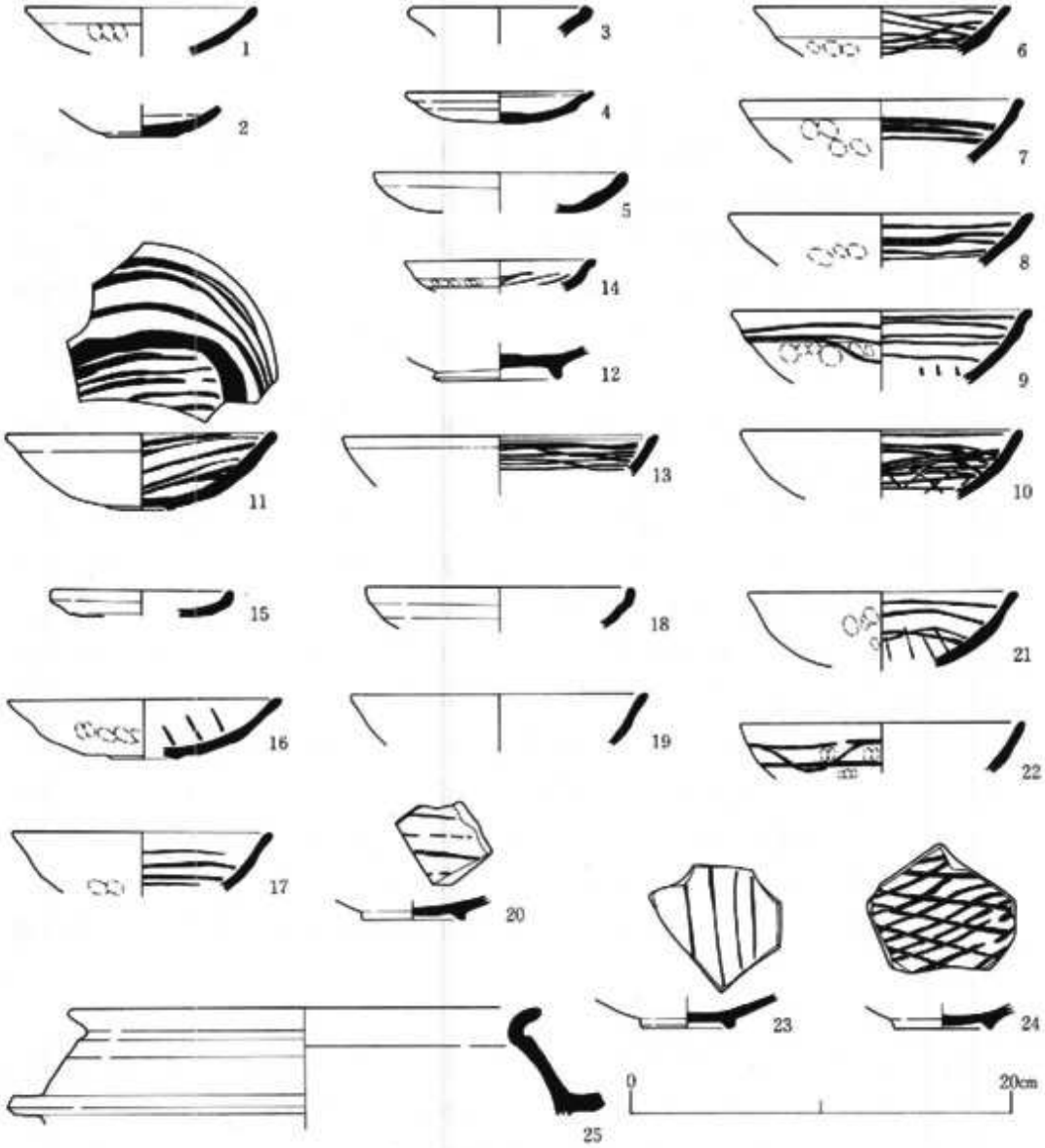
古墳時代から中世にかけての土師器甕、高杯、羽釜、皿、須恵器片、甕、火舎、複弁蓮華文八葉軒丸瓦が出土した。18はB型式の大皿である。褐色系でにぶい橙色（7.5YR8/3）を呈する。口縁部のナデは2段であるが弱い。19、20は瓦器椀である。20の高台は断面三角形で低いものである。内底面に並行線の暗文をもつ。

溝6

古墳時代から中世にかけての土師器高杯、把手、皿、須恵器片、瓦器椀が出土した。15はB型式の中皿である。口径9.4cm。褐色系でにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。細かい長石、金雲母、角閃石を含む。16の高台は低く断面台形を呈する。内底面には並行線の暗文がみられるが間隔が粗い。灰白色（7.5Y7/1）を呈する。

溝8

古墳時代から中世にかけての須恵器、土師器高杯、甕、羽釜、皿、瓦器椀、白磁椀、青磁椀、瓦、馬歯、焼土が出土した。21～24は瓦器椀である。21の内面は数回程度の圏線ミガキである。

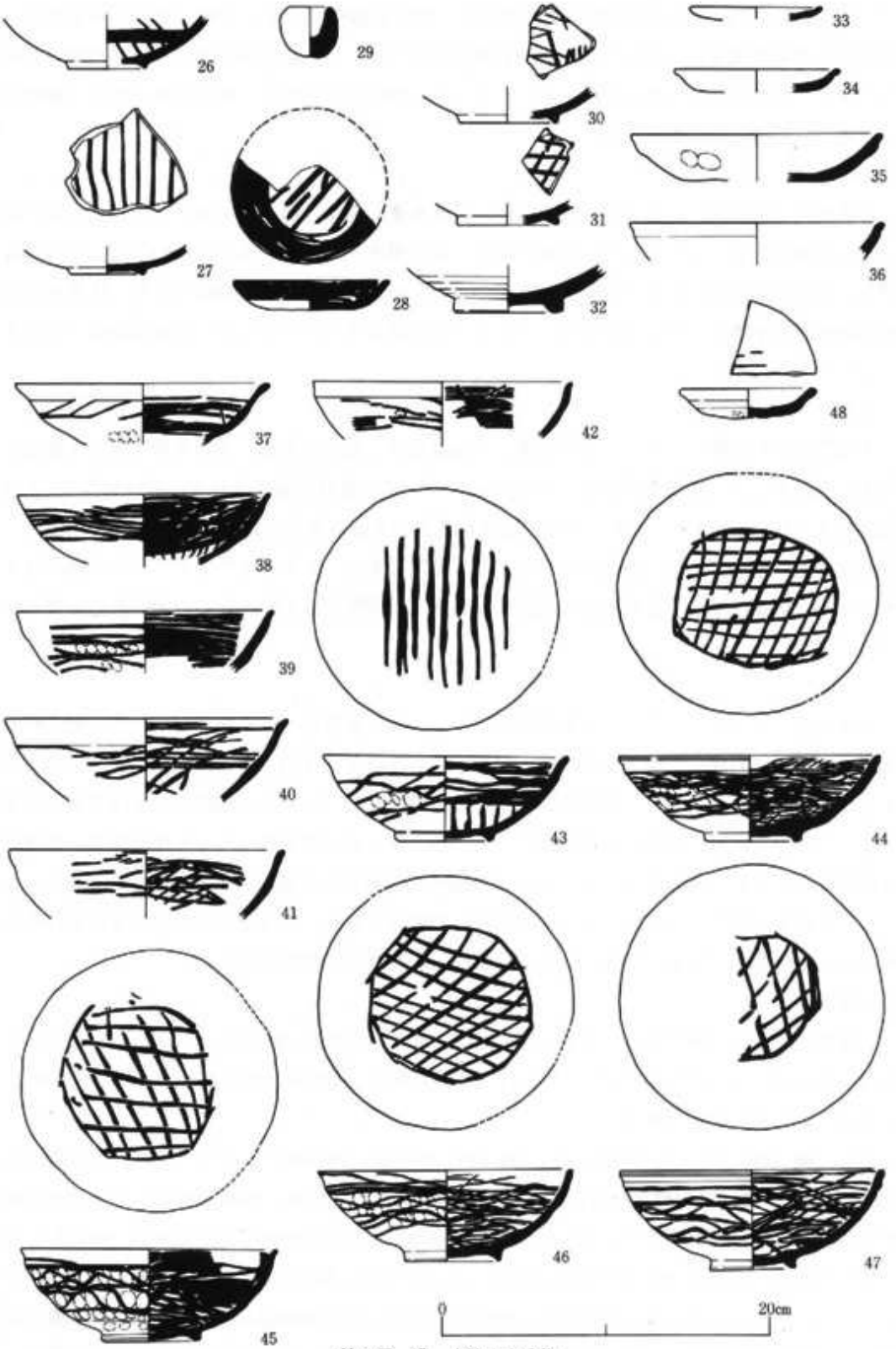


第21図　落ち込み、溝出土遺物

内底面は細い並行暗文である。23の高台は台形を呈し、内底面は間隔の粗い並行暗文である。24の内底面は割合密な斜格子状暗文である。25は土師器羽釜である。頸部が内傾して立ち上がり口縁部は「く」字形に外反する。口頸部のナデが強く稜線がめぐる。口縁部、頸部はヨコナデである。褐色系でにぶい黄橙色（10ＹＲ７/２）を呈する。胎土には中粒～細粒の長石、石英、角閃石、金雲母を含む。

溝１

古墳時代から中世にかけての須恵器杯蓋、土師器甕、皿、瓦器椀、羽釜、白磁椀が出土した。30、31は瓦器椀である。断面三角形の低い高台である。内底面は30が0.5㎜程度の細い並行暗



第22図　溝、土坑出土遺物

文、31は1.5～2㎜の太さの斜格子暗文である。32は白磁椀である。口縁、体部上半を欠く。外に開きぎみの削り出し高台をもつ。灰白色（5Y7/1）の釉を高台内、畳付けを除いて両面に施す。高台外面は一部のみ釉がかかっている。内外面には細かい貫入がみられる。磁胎は灰白色（7.5Y8/2）を呈する。

土坑1

古墳時代から中世にかけての須恵器高杯、土師器甕、羽釜、皿、瓦器椀が出土した。33～36は土師器皿である。すべてB型式の皿である。33は褐色系でにぶい橙色（7.5YR7/3）、34、35は白色系で灰白色（2.5Y8/2、10YR8/1）を呈する。36は瓦器椀である。体部から口縁部内外面を平滑にヘラミガキしているがミガキの線は明らかではない。口縁部は強くヨコナデするため外反する。

土坑3

古墳時代から中世にかけての須恵器甕、土師器高杯、皿、瓦器椀、青磁蓮弁文椀、土製品が出土した。26、27は瓦器椀である。内底面はナデのあと並行の暗文を施す。暗文は0.7～1㎝間隔で太さ1.5～2㎜のミガキである。28は瓦器皿で2㎜前後の太いヘラミガキを密に施す。内底面は並行暗文である。29はミニチュアの土製品である。上半が欠失しているため器形は不明である。器壁は厚く、底部周辺に黒斑がみられる。調整法は不明。長石、角閃石、金雲母を含む。

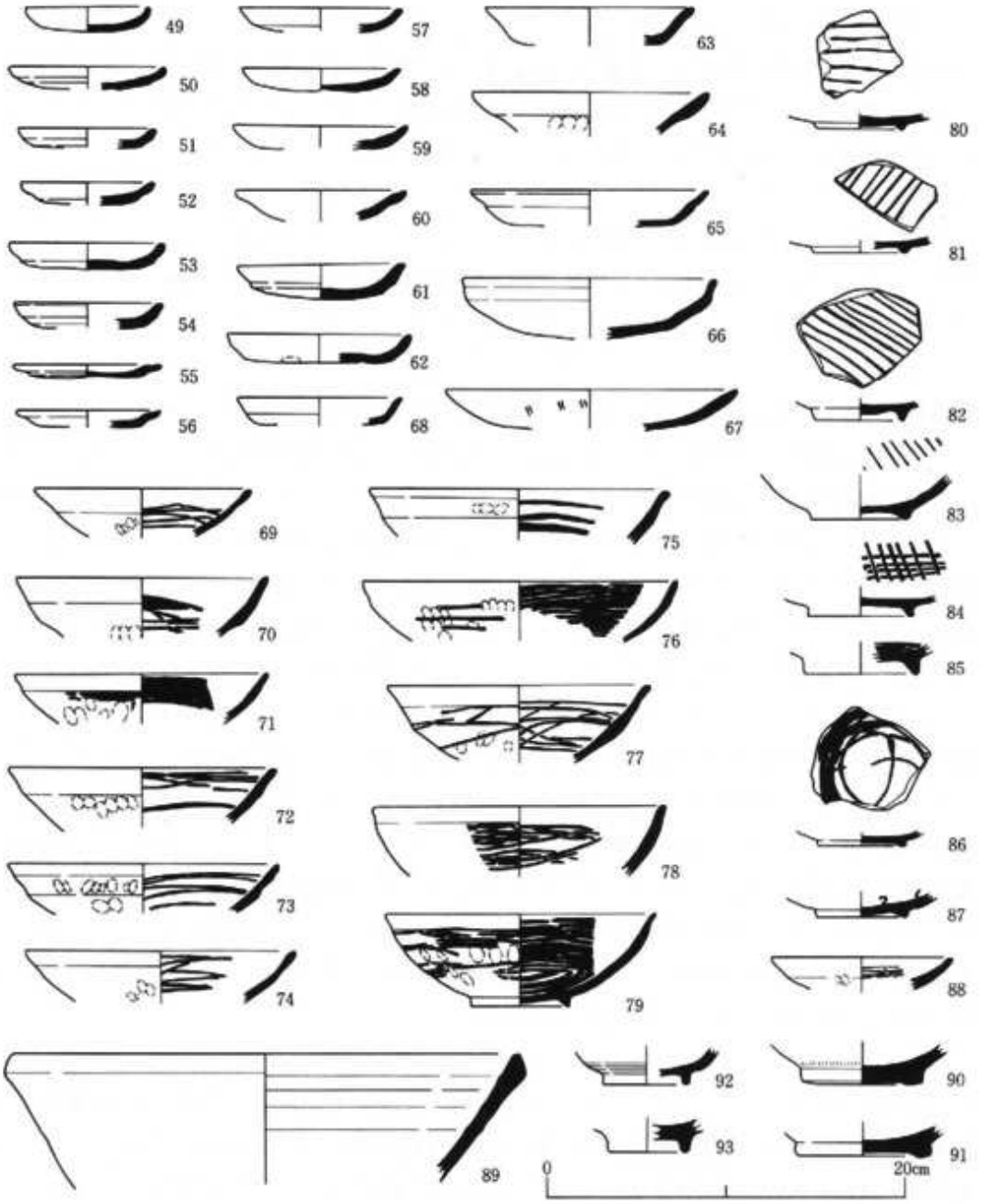
土坑5

古墳時代から中世にかけての土師器高杯、羽釜、皿、須恵器、瓦器椀が出土した。37～47は瓦器椀である。内底面の暗文は並行線、斜格子であるが斜格子の方が多い。43の並行線暗文の太さは4㎜前後と特に太い。38は0.5㎜と細い。斜格子は0.7～1㎝の間隔で太さは2㎜前後である。内面のミガキは圏線状で密である。ただ40、41、47は斜放射状にミガキを施す。外面は分割を意識した44、47もあるがそれ以外は圏線状ではあるが不規則で乱雑なミガキである。高台は低く断面三角形と台形のものが半々ぐらいの割合である。48は瓦器皿で内底面に並行暗文を施す。口縁部のヨコナデが強いため外反する。器壁は5㎜前後と厚い。

包含層

土師器　49～67は皿である。A型式（55、56、60）、B型式（50～54、57、61、65、66）、C型式（49、58、59、62、63、67）、E型式（64）がある。褐色系（49～54、57～59、61～67）白色系（55、56、60）がある。

瓦器　椀（69～87）と皿（68、88）、鉢（89）がある。内外面とも密なヘラミガキを施すもの（78、79）、外面は口縁部付近にわずかに圏線状のヘラミガキ、内面は密なヘラミガキを施すもの（71、76）外面のヘラミガキがなく、内面のヘラミガキが粗くなったもの（69、70、73～75）がある。内底面の暗文は並行なもの（77、79～82）、格子のもの（84）、密にぬりつぶすもの（85）がある。86、87は大和型で、86は同心円文、87は連結輪状である。68、88は皿である。68は平底から屈曲して口縁部が外上方に立つ。88は底部から口縁部までなだらかに続く。



第23図　包含層出土遺物

89は鉢である。内外面とも煤が付着して全体に黒ずんでいるため瓦器の中に入れたが、形態及び製作手法は東播系須恵器こね鉢と同じである。直線的に立ち上がる体部に外傾する端面をもつ口縁を付す。紐巻き上げ成形と思われ、内外面ともヨコナデである。長石粒を多く含む。

磁器　90、91は白磁椀である。玉縁の口縁をもつものと考えられる。器肉も厚く、高台は幅広で削り出しが浅いため底部も厚い。90は灰白色（5Y7/1）、91は灰白色（10YR7/2）

を呈する。92、93は近世国産陶磁器である。93は伊万里焼と思われる。

古墳時代～奈良時代

須恵器杯身、杯蓋、直口壺、土師器高杯、甕、壺、把手、製塩土器、滑石製紡錘車などが出土した。遺構としては土坑からの出土が多く、土坑10、14～16、18、19から出土した。その他の遺構では溝２、３、８、13、落ち込み１、土坑９から出土しているが混入である。

土坑９

土師器高杯　小型丸底壺など古墳時代のものが大半を占めるが、中世の遺物も混っているので混入と考えられる。110の杯底部は扁平で口縁部は緩やかに外反しながら外上方に立ち上がる。表面が磨耗していて調整法は明らかではないがヨコナデと思われる。

土坑10

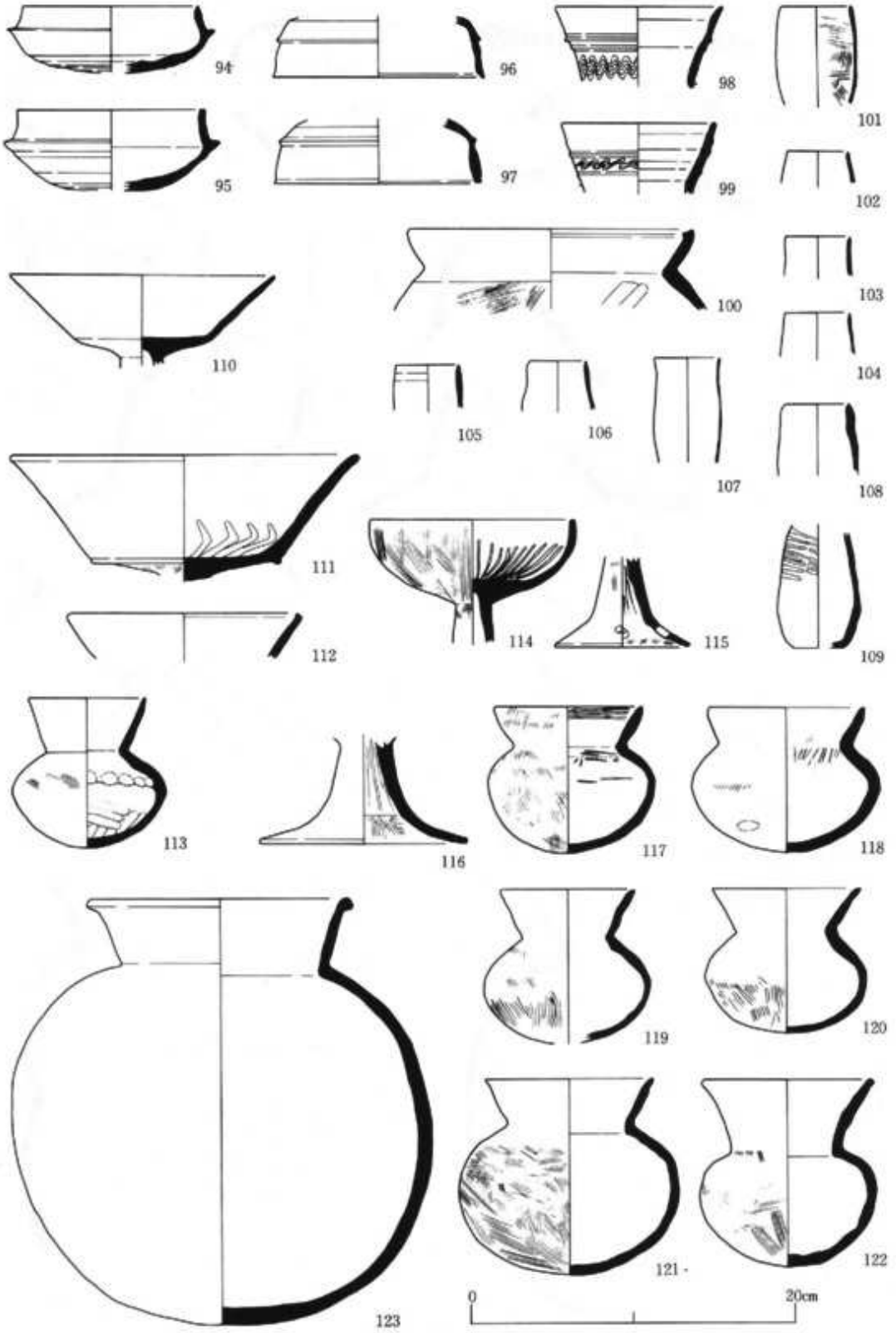
須恵器杯身、杯蓋、壺、土師器甕、高杯、製塩土器が出土した。94、95は杯身である。94の立ち上がりの内傾度は大きい。94の端部は丸くおさめる。95の端面は水平である。底部ヘラケズリの範囲は94が$\frac{2}{3}$、95が$\frac{4}{5}$強である。96、97は杯蓋である。天井部と口縁部とを分ける稜は短く鋭さに欠ける。天井部は欠失しているが96はやや扁平、97は丸味をましてふくらんでいる。98、99は直口壺の口頸部である。外上方に直線的に延びる口頸部に断面三角形の凸帯を２条めぐらしている。98は凸帯２条をめぐらした下に波状文を、99は２条の凸帯間に波状文をめぐらしている。100は土師器甕である。短く内弯する口頸部をもち、口縁上端は内側にやや肥厚し、稜線をもつ。口頸部内外面ともヨコナデ、体部外面はハケメである。101～109は製塩土器である。101、102、106は白色系で灰白色（2.5Y８/２）、その他は褐色系で浅黄橙色（7.5YR８/３）、橙色（7.5YR７/６）、赤橙色（10R６/６）を呈する。105、108は器壁が厚く、胎土も他と違っている。口頸部が内傾し端部が丸くおさめるもの（101、102、106）、口頸部が外反し端部が尖りぎみにおさめるもの（103、107）がある。109は体部下半から底にかけてのもので外面にやや右下りのタタキメがある。101、106の内面はナデ、外面はユビオサエの指紋が顕著である。105、108の内面はナデである。胎土、調整法の違いで４タイプに分けられるがそれぞれ生産地の違いを表わすものと考えられる。

土坑14

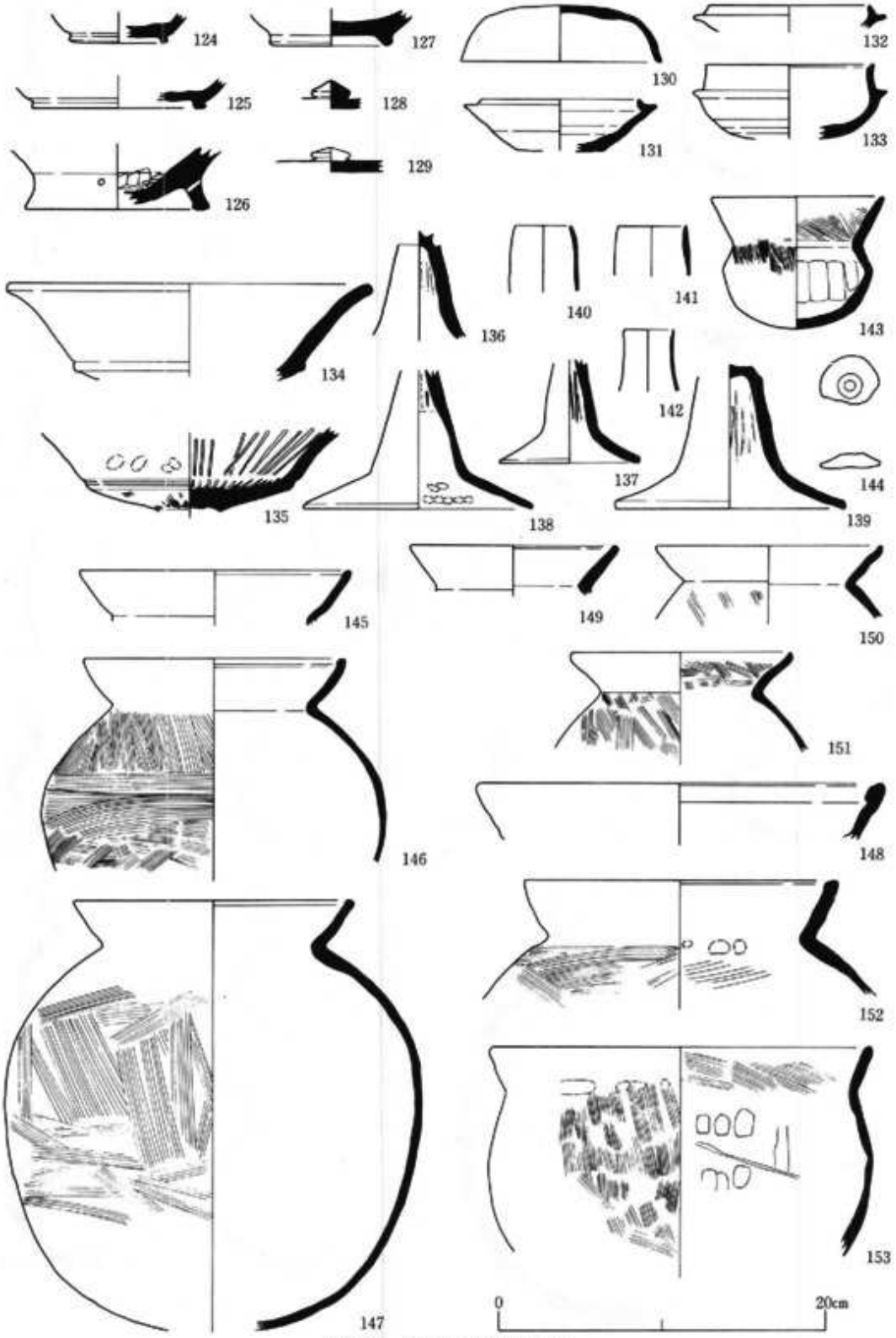
土師器高杯、甕、壺が出土した。111は高杯杯部である。底面は平らで外上方に直線的に立ち上がる口頸部をもつ。底部外周に粘土をつぎたし凸帯状を呈する。底部から口頸部にかけて放射状～斜放射状の暗文を施す。112の甕口縁端部は内側につまみ上げられ肥厚する。113の小型丸底壺は肩が張り扁球形を呈する。体部内面はヘラケズリする。

土坑16

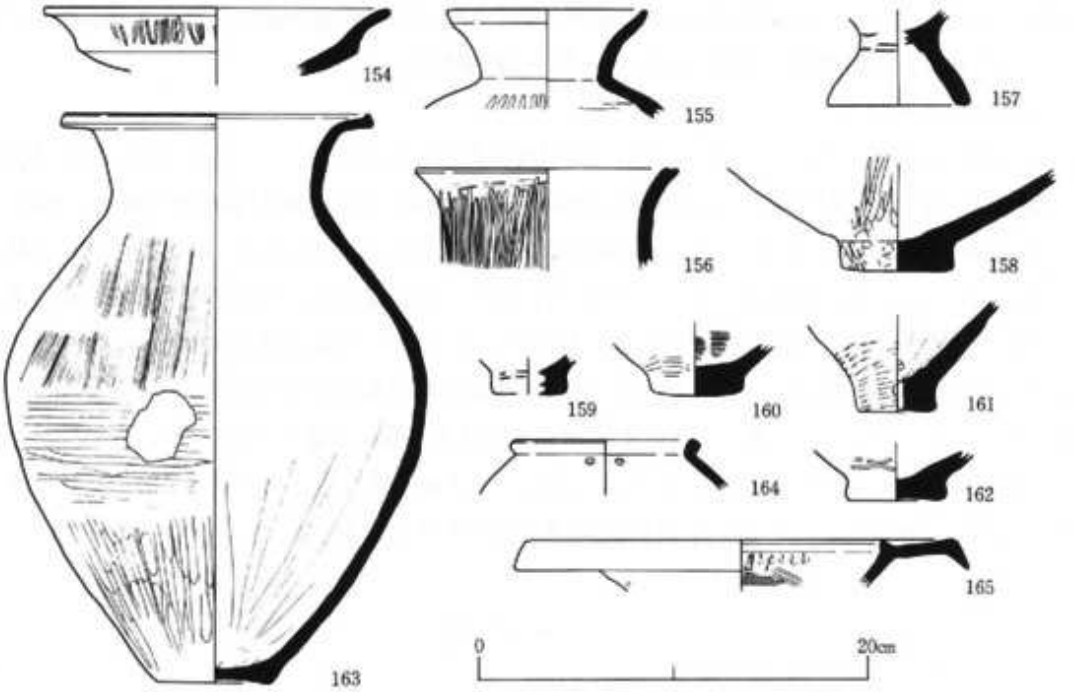
土師器高杯、甕、須恵器片が出土した。114は内弯して立ち上がる口頸部で、口縁は直立する。内外面は丁寧にヨコナデ、内面は底部中央から口縁部にかけて放射状の暗文を施す。外面及び脚部はハケメである。口縁部の１ヵ所に半円形の黒斑がみられる。115は内外面ともハケメで裾部に外から内に向ってあけられた円孔が１つみられる。


94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
0
20cm

第24図　土坑出土遺物



第25図　溝、包含層出土遺物



第26図　包含層出土遺物

土坑18

小型丸底壺6個体、高杯脚部が出土した。117、121は灰白色（10YR8/2）を呈し、頸部を強く丁寧にナデている。体部内面はヘラケズリ、外面及び口縁部はハケメである。胎土に石英、長石を多く含む。119、120は淡黄色（2.5Y8/3）を呈し、体部から底部のヘラケズリは顕著ではなく、外面のハケメも雑であり凹凸がめだつ。口縁部はヨコナデである。118、122の器壁は厚い。にぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、底部内面はヘラケズリ、体部外面はハケメ、口縁部はヨコナデである。胎土に0.2～7㎜大の長石、石英、金雲母を多く含む。122の体部外面と口縁部外面に厚く煤が付着し、底部から体部の内面に有機質の付着（焦げつき）がみられる。煮炊に使ったものと考えられる。116の脚部外面はヘラナデがみられる。

土坑19

土師器壺が出土した。123は球形の体部に、垂直よりやや外傾し直線的に立ち上がる口縁部をもつ口縁端部は外方に肥厚する。体部内外面はヘラナデ、口縁部はヨコナデである。

包含層及び中世遺構混入の遺物

124～133は須恵器、134～143、145～153は土師器、144は滑石製紡錘車である。131、132は落ち込み1、147、151は溝2、134、135は溝3、138、149、150は溝8、124、141、146は溝13、137、139は土坑15、129は第1層、127、128、136、153は第3層、133、140、142、143、145、148、152は第4層、125、130は第5層、126、144は第6層出土である。134は底部周縁に粘土を貼り付け凸帯をめぐらす。135は底部と口縁部の境で粘土を接合し、接合面の外面をヘラで調整することにより凸帯状を呈する。146、147の体部内面はヘラケズリ、外面はハケメ、口縁

部はヨコナデである。口縁端部は内側に肥厚する。149～151の体部内面はヘラケズリ、外面はハケメである。口縁端部は内側へつまみ上げられ肥厚する。

弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は第６～７層の包含層と方形周溝墓から出土している。155、156、160～162は第６層、他は第７層で163は方形周溝墓の供献土器である。154～162は弥生第Ⅴ様式、163～165は第Ⅳ様式の土器である。154は高杯杯部、155は広口壺、156は長頸壺、157は台付甕、158は壺底部、159～162は甕底部である。163は広口壺で、口縁端部を上方へ肥厚させている。端面には凹線がめぐる。体部外面下半は上下方向のヘラミガキ、中位は横方向のヘラミガキ、上半はハケメである。体部中位と肩部の２ヵ所に外側から焼成後の穿孔が認められる。胎土には角閃石が多く含まれ、灰褐色（7.5ＹＲ６/２）を呈する生駒山西麓の土器である。164は無頸壺である。165は高杯杯部で口縁部に幅３㎝内外の水平縁をもうけ、その外端を曲折させて垂れ、内端には水平線をめぐる１条の隆起帯を突出させたものである。

Ⅴ．まとめ

第32次調査では江戸時代の溝、室町時代後半の若江城の堀、土塁、室町時代前半の溝、土坑、第33次調査では平安時代後半から室町時代にかけての溝、土坑、古墳時代中期中頃から後期にかけての土坑、弥生時代中期後半の方形周溝墓を検出した。

若江城の堀は２時期あるのが確認された。第Ⅰ期が15世紀末頃、第Ⅱ期は16世紀後半に埋ったものと考えられる。第Ⅱ期の堀の方向はＮ－16°～35°－Ｅで、第10[12]、17[12]、20[13]、25[14]次調査で検出された東西方向の堀がこの地点で北に方向を変えているのが確認された。また、第14次調査[15]で検出されている南北方向の堀と合わせ考えると、内堀の南辺の長さが内法で約130m、外法で約160mとなることがわかった。今回検出の第Ⅱ期の堀の幅は6.8m、深さ1.3mで皿状を呈していた。この堀の堆積土は粘質シルトで植物遺体を多く含み、常に水が溜り淀んだ状態であったことがわかった。第Ⅰ期の堀はＮ－４°～７°－Ｗで、幅17m以上、深さ2.5m以上である。堆積土は黄褐色を中心とした粗砂層～シルトで周辺からの土砂の流入が激しく、すぐに堀が埋ってしまうような環境にあったものと思われる。土塁は若江遺跡においては初めての検出である。基底部幅8.5m、検出した上面幅約６m、高さ1.3mである。土塁は当時でも微高地であった地面を削り込みその表面に黄褐色～暗灰黄色の粘質シルトを中心とした土砂を積み上げたものである。平面の広がり、土の厚さなどから推定すると１回に運ばれた土量は８～30ℓ であったものと考えられる。土塁は大阪府羽曳野市高屋城の場合、城内と城外、各郭を区切るものとして堀とほとんど組み合わさって存在している。しかも、堀の内側、つまり本丸側に土塁が築かれている。基底部幅15m、上端幅４m、高さは城外からみて５m、城内から２mを測る。積み方は、築城以前の遺物包含層や畑畝跡の上に外堀を掘削した時の土砂を外側に高く内側に傾斜して低くなるように積んでいる[16]。若江城の場合は内堀の外側に土塁をめぐらしている。しかし、

この土塁の外側は傾斜面となり大きく下がっている。今回は付近の建物、道路への影響などから深く掘削することができず、土塁が機能していた当時の地表面を検出することができなかったが、土塁上端から最低２ｍ以上の比高差があったものと考えられ十分機能しえたものと思われる。土塁の下から築城以前と考えられる土坑、溝が検出され、若江城の築城が15世紀中頃ぐらいと考えられる。ただ今回の地点だけでの推定であるため、今後周辺部の調査結果を待って再考したい。

遺物では堀の中から瓦、土師器皿、羽釜、瓦器釜、国産陶器、輸入陶磁器といった土器類、櫛、箸、ヘラ状木製品、紡錘車、木簡、漆器椀、蓋、漆塗木製品、下駄、柄杓といった木製品、地蔵石仏などの石製品、鉄砲の弾丸、貨銭などの金属製品が出土した。特に鉄砲の弾丸は青銅製で精巧な作りであり、戦いの様子を彷彿とさせるものである。

第33次調査では、中世集落に伴う溝、土坑を検出した。検出した遺構の時期は12～13世紀代が中心で一部14世紀に下がるものも存在する。若江遺跡の既存の調査では古墳時代～奈良時代の遺物が割合多く含まれているが、遺構が明確ではなかった。しかし、第33次調査では５世紀中頃から６世紀初頭にかけての土坑、溝を検出することができ、集落の広がりも確認することができた。弥生時代の遺構については、遺跡の西南部で後期の水田跡が検出されている[17]だけであるが、今回新たに弥生時代中期後半の方形周溝墓１基が確認できた。今回の調査地の北西約60mの地点でも弥生時代中期の遺物が出土していることから、墓域がさらに広がることが予想される。

遺物では弥生時代中期後半の広口壺、無頸壺、高杯、後期の広口壺、長頸壺、甕、台付甕、５世紀中頃から６世紀初頭に至る土師器甕、壺、高杯、小型丸底壺、製塩土器、須恵器杯身、杯蓋、直口壺、滑石製紡錘車、奈良時代の須恵器、12世紀～15世紀に至る土師器皿、羽釜、瓦器椀、皿、国産陶器、輸入磁器などが出土した。

注(1) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　1983年

(2) 三輪茂雄『粉の文化史』―石臼からハイテクノロジーまで―　新潮社　1987年

(3) 森田恭二「文献から見た若江城」『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ』遺構編　東大阪市遺跡保護調査会　1982年

(4) 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会　1982年

(5) 狩野久　『木簡』日本の美術160　至文堂　1979年

(6) 東大阪市立郷土博物館菅原章太氏に判読して頂いたところ表面は「なかのなさも　ます数ろり」で、裏面は判読できなかったということである。

(7) 藤井直正、木下亘、中瀬史子ほか『大坂城三の丸跡Ⅰ』京橋口における発掘調査報告書
大手前女子大学史学研究所　大坂城三の丸跡調査研究会　1982年

(8) 田辺英男編「草戸千軒町遺跡―第35・36次発掘調査概要―」『草戸千軒町遺跡調査年報』1986
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1988年

(9) 森重彰文編『尾道市街地発掘調査概要』―尾道市長江一丁目―1981
尾道市教育委員会　1984年

(10) 福井県立朝倉氏遺跡資料館編『一乗谷朝倉氏遺跡』XⅦ 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1986年
朝倉氏遺跡調査研究所編『朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』　福井県教育委員会　1979年

(11) 葛西城址調査会『青戸・葛西城址Ⅱ区』葛西城址調査会　1976年

(12) 勝田邦夫、阿部嗣治『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ』遺構編　東大阪市遺跡保護調査会　1982年

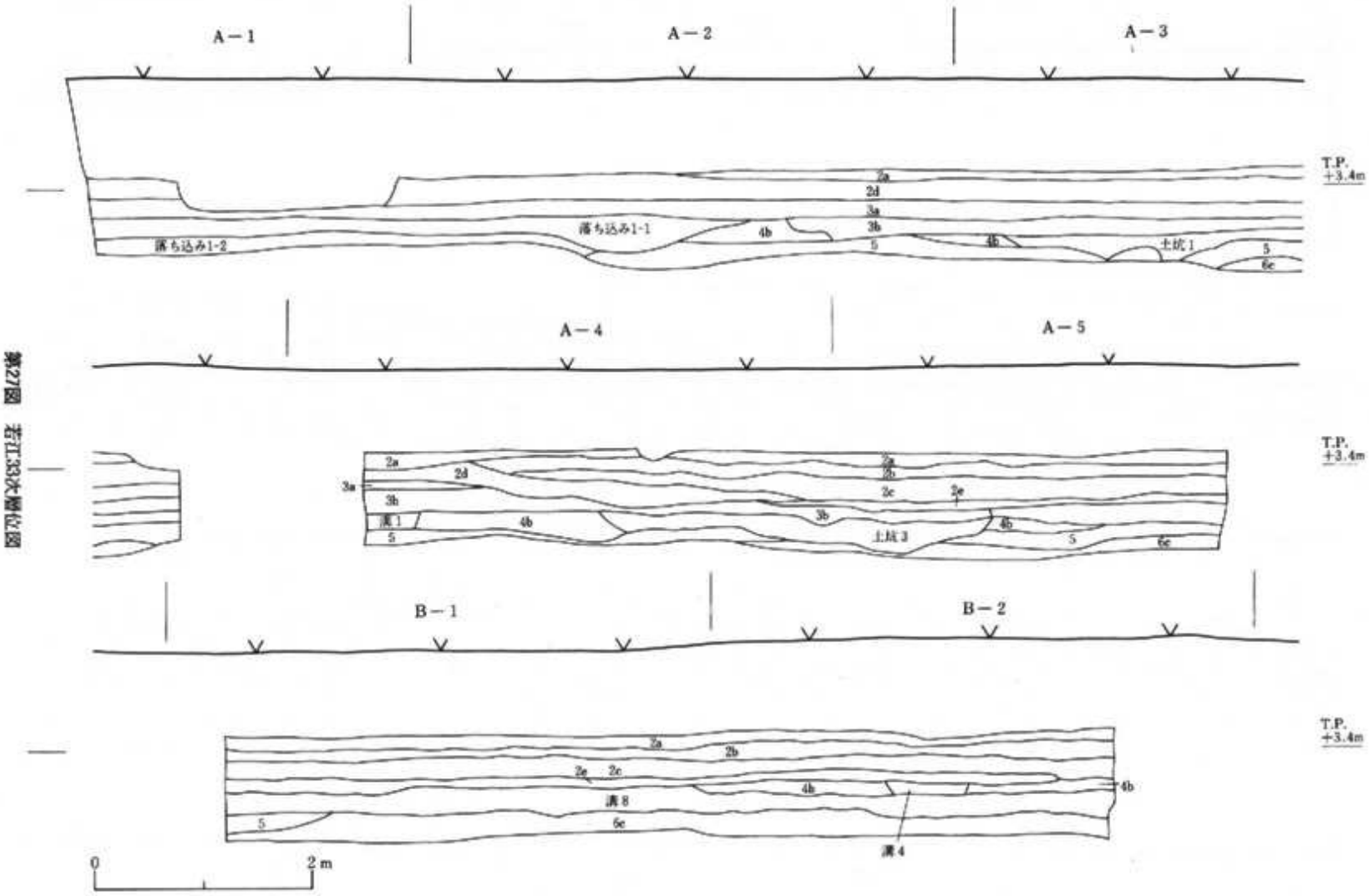
(13) 上野利明・吉村博恵『若江遺跡第29次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会　1989年

(14) 吉村博恵『若江遺跡第25次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会　1987年

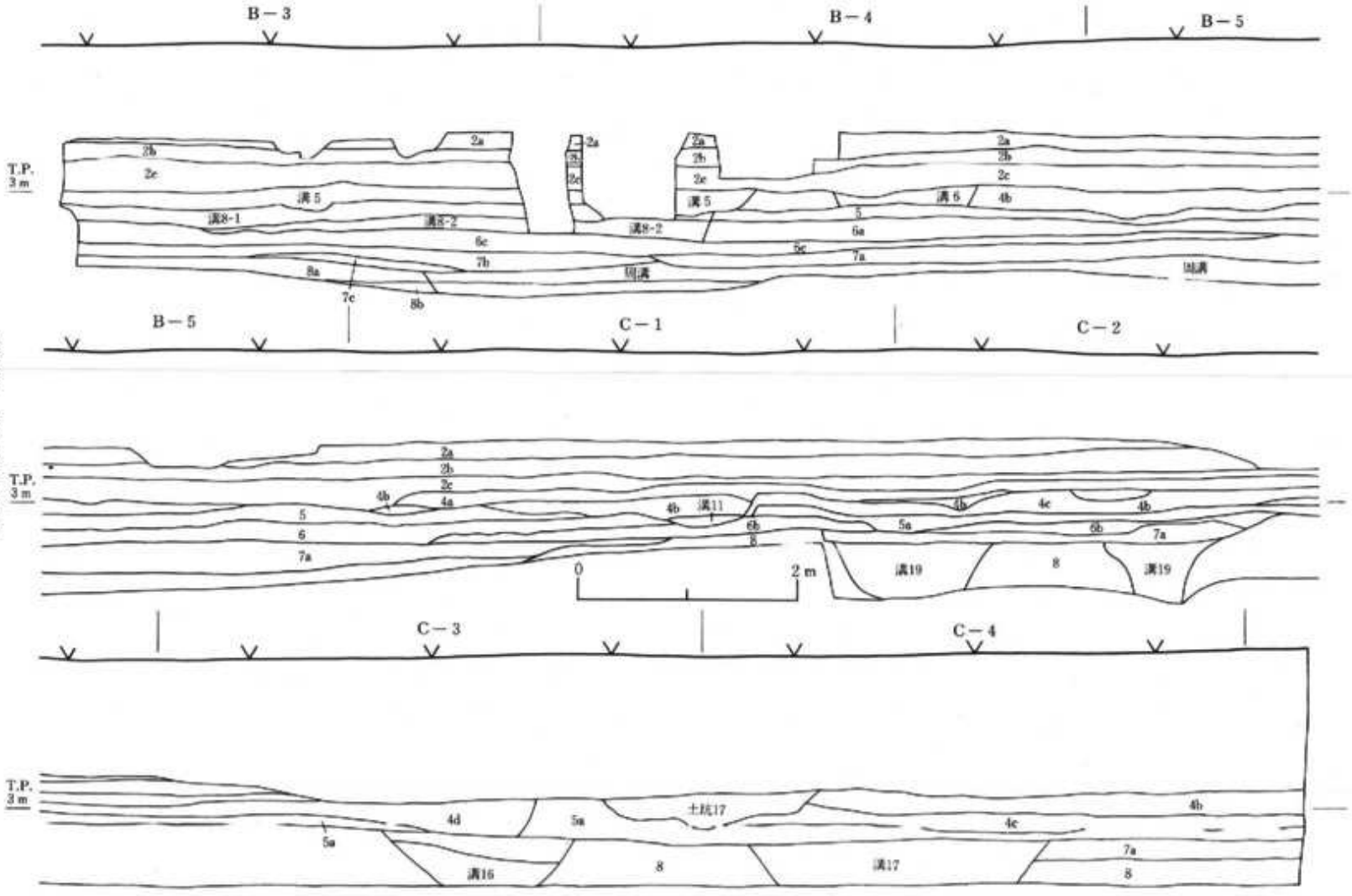
(15) 注(12)

(16) 笠井敏光『古市遺跡群Ⅵ』羽曳野市教育委員会　1985年
笠井敏光「高屋城跡」『中世末から近世のまち・むらと都市』第27回埋蔵文化財研究集会資料
第4分冊　埋蔵文化財研究会　（財）　大阪市文化財協会　1990年

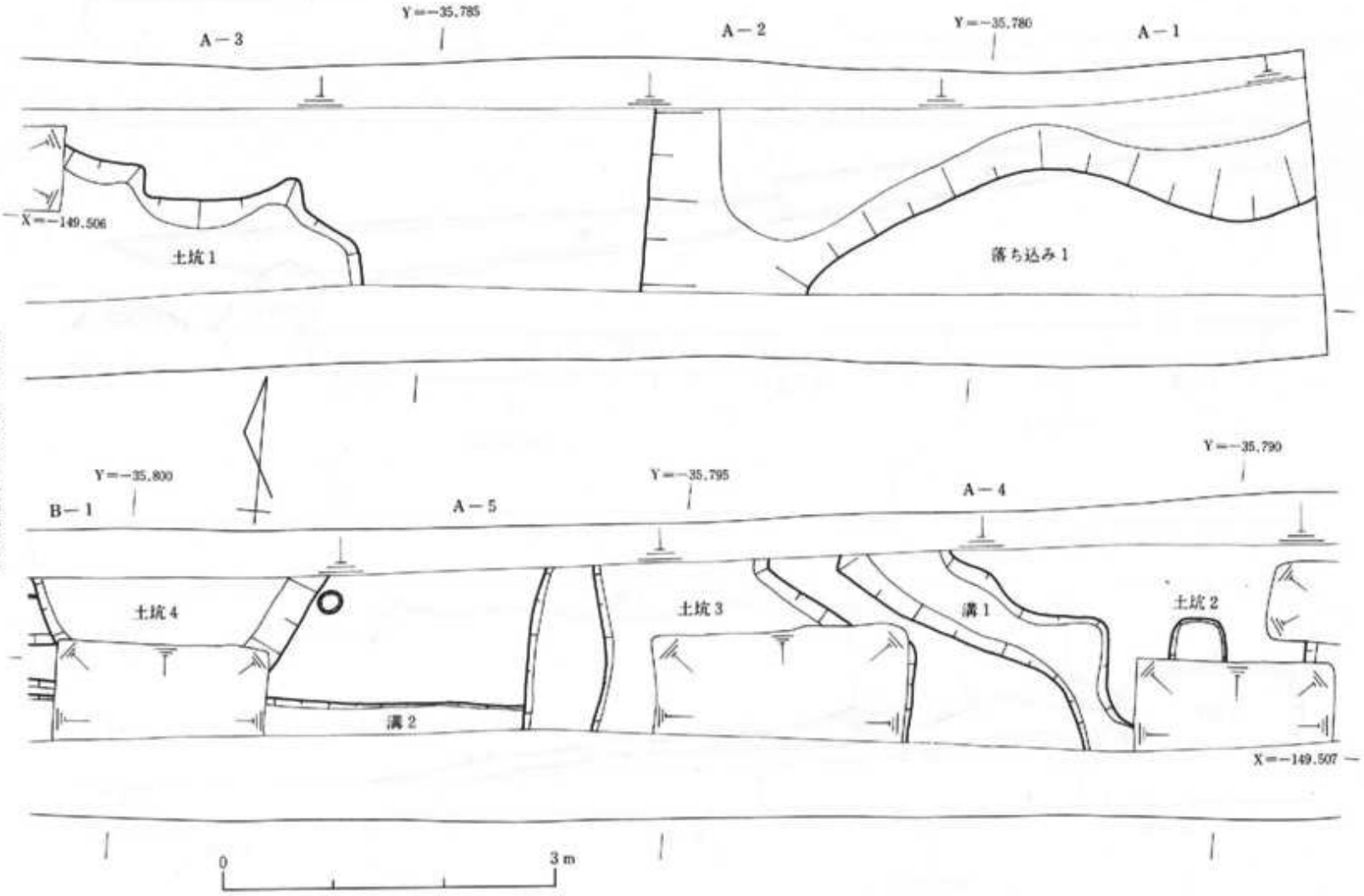
(17) 勝田邦夫『若江遺跡第35次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会　1988年



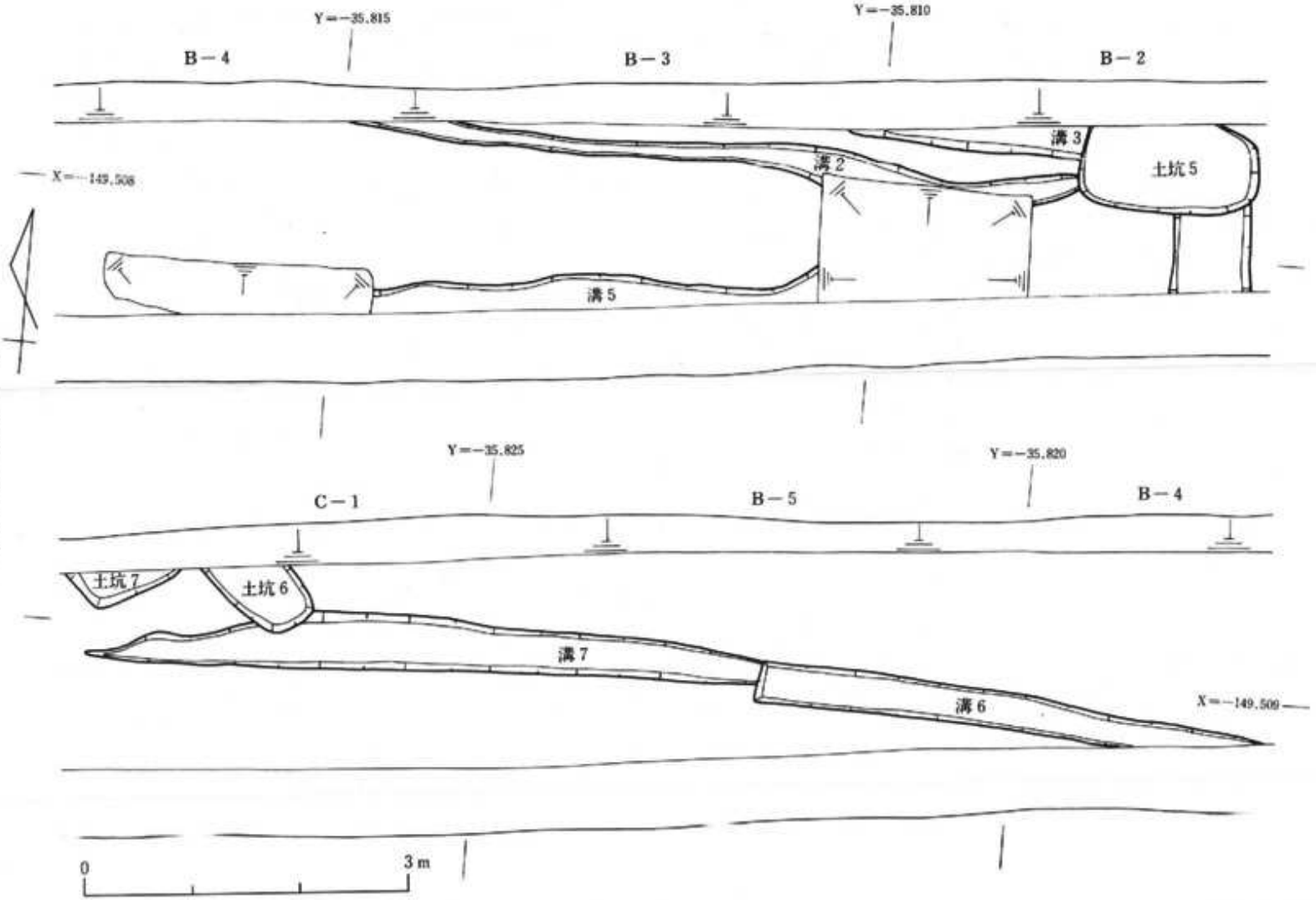
第27図　若江33次層位図



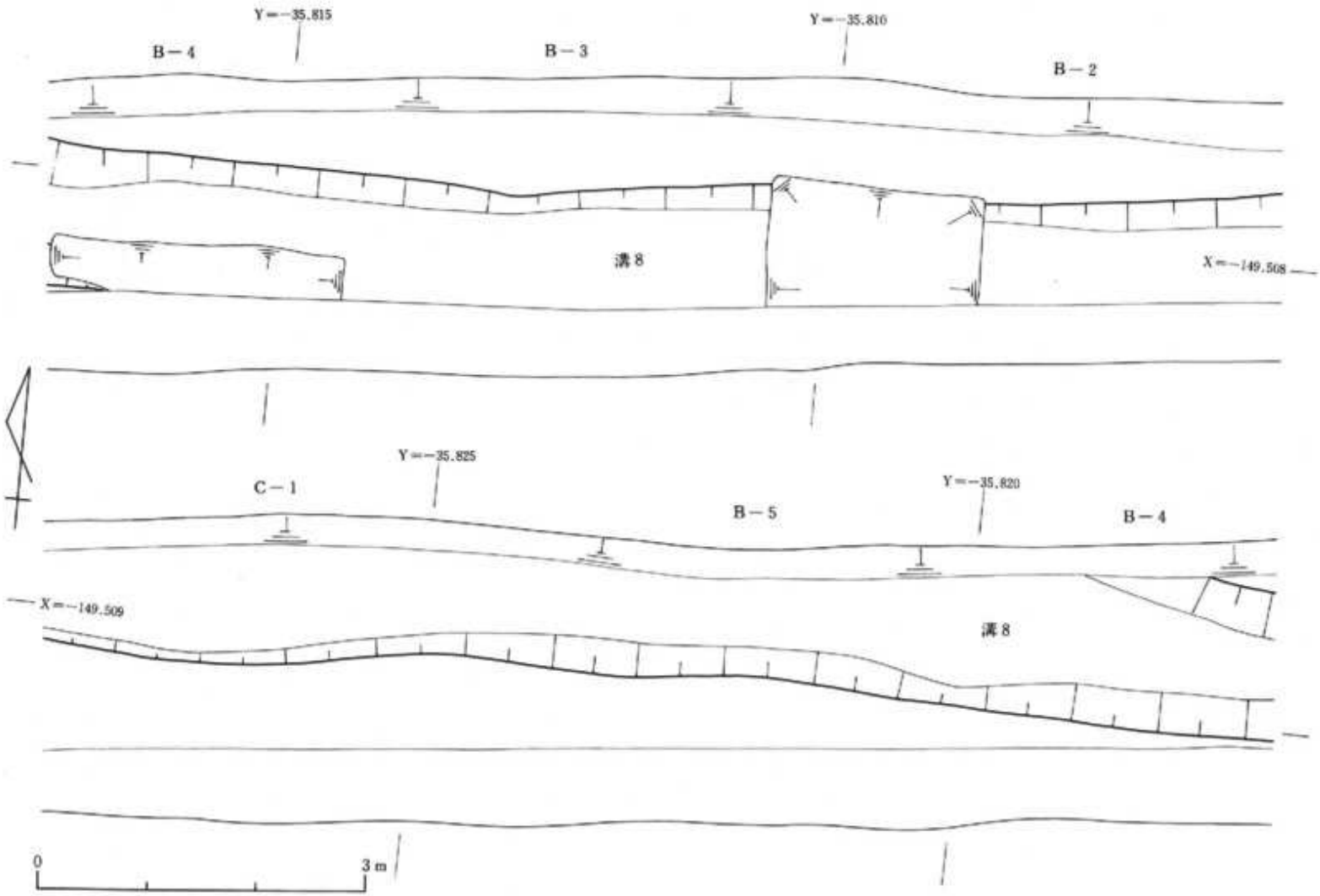
第28図　若江33次層位図



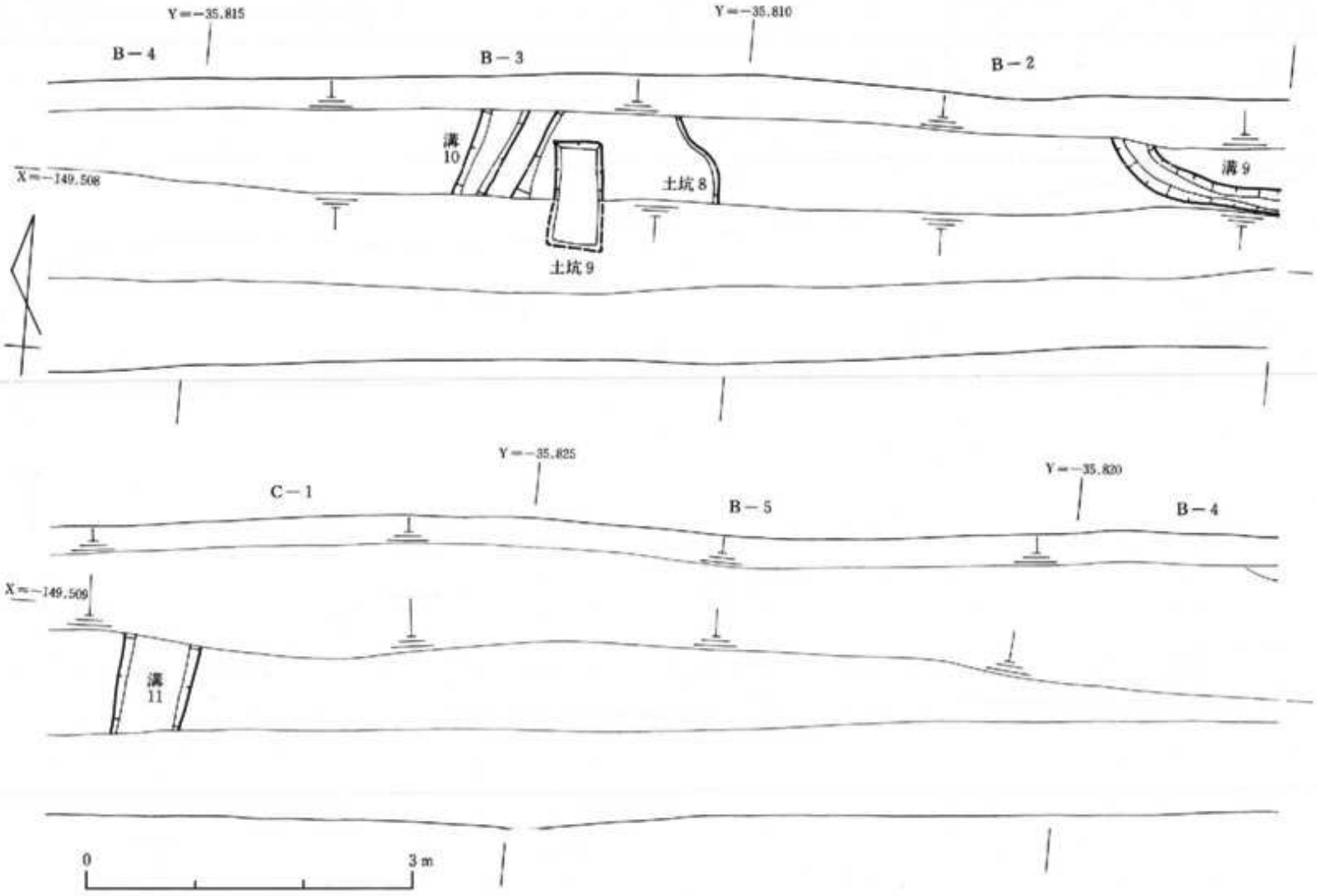
第29図　若江33次遺構実測図



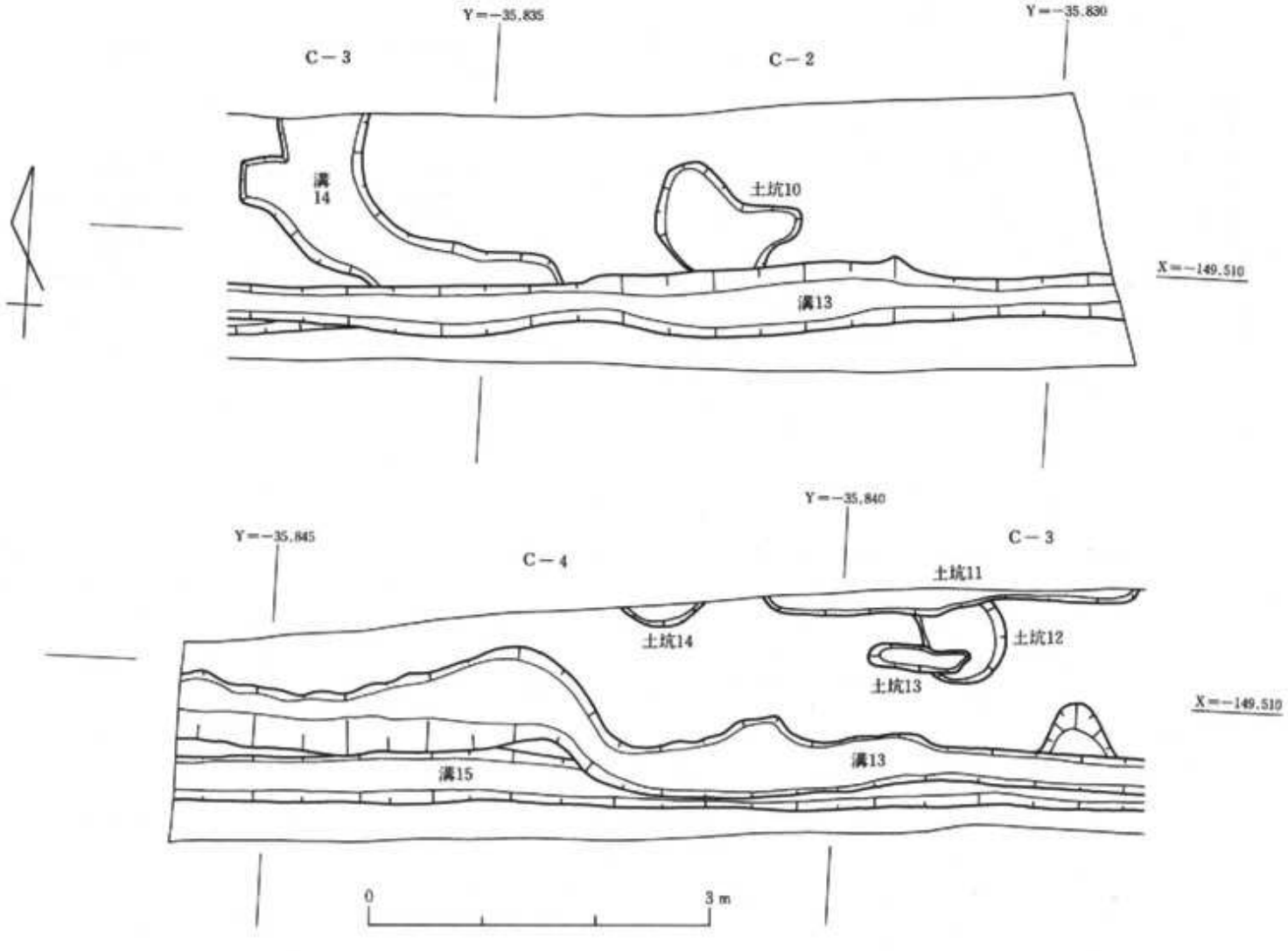
第30図　若江33次遺構実測図



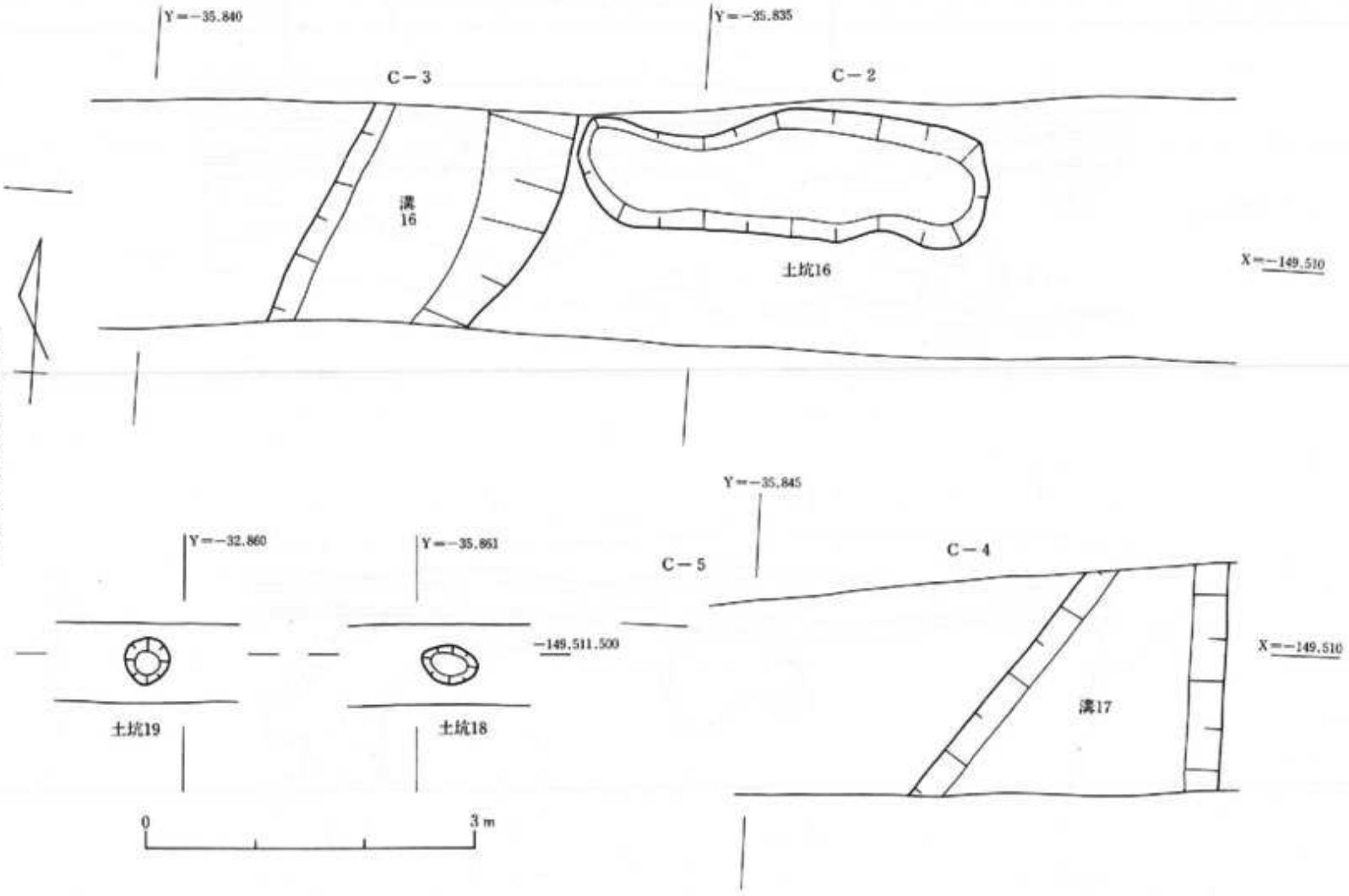
第31図　若江33次遺構実測図



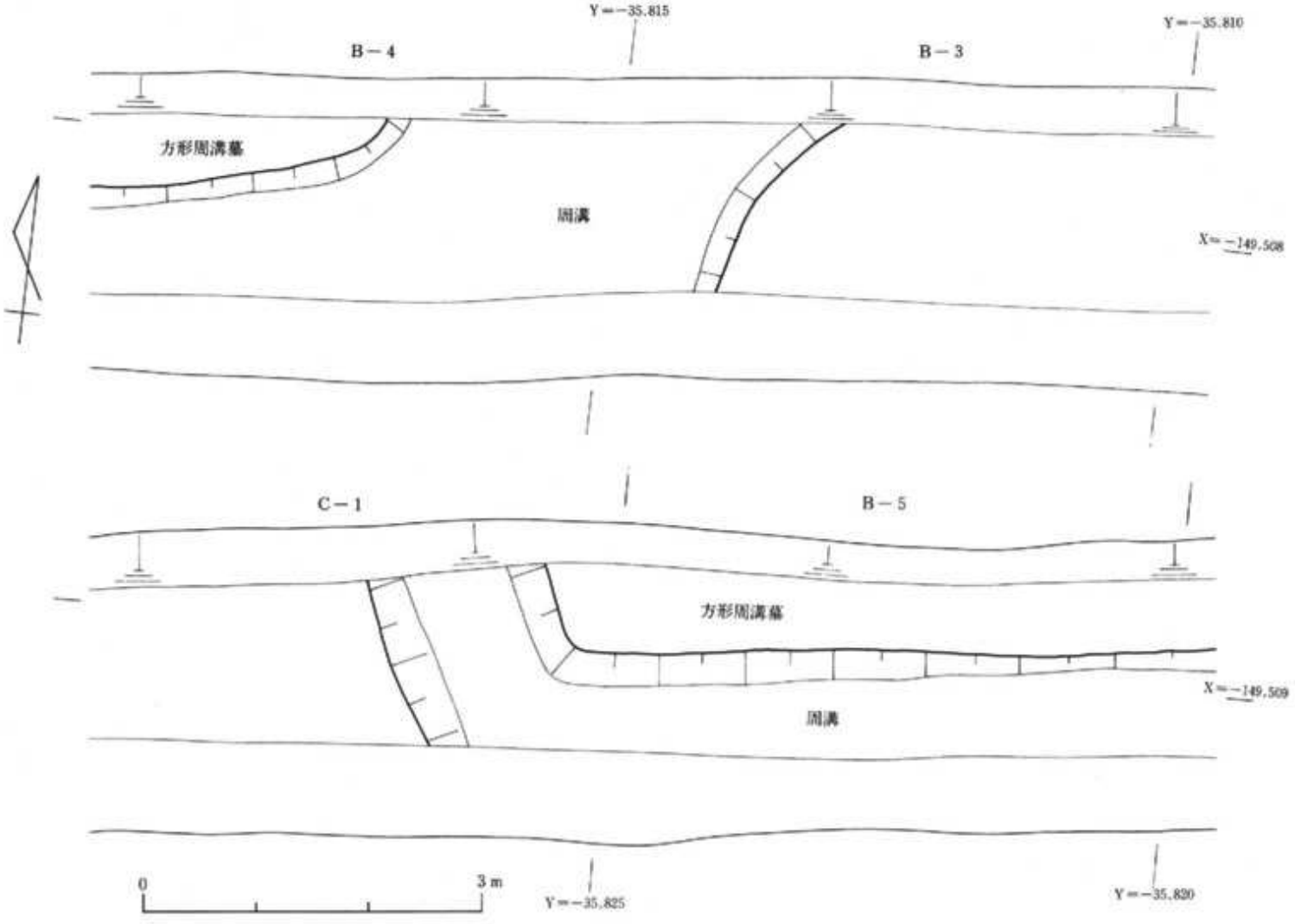
第32図　若江33次遺構実測図



第33図　若江33次遺構実測図



第34図　若江33次遺構実測図



第35図　若江33次遺構実測図

図　　版

図版1　若江32次遺構

1．堀第Ⅱ期遺物出土状況

2．堀第Ⅱ期遺物出土状況

図版2　若江32次遺構

1．堀第Ⅱ期漆器椀、ヘラ状木製品出土状況

2．堀第Ⅱ期石仏出土状況

1．堀第Ⅱ期下駄出土状況

2．堀第Ⅱ期紡錘車出土状況

図版4　若江32次遺構

1．堀第Ⅱ期完掘状況

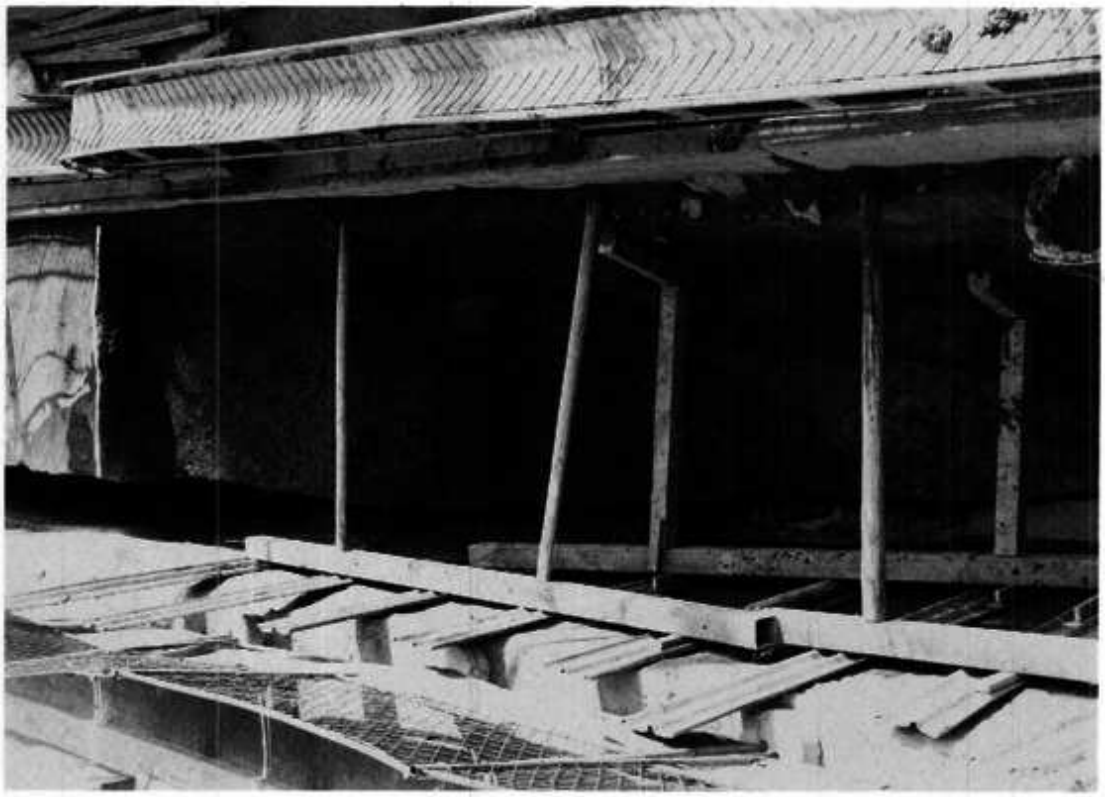
2．堀第Ⅱ期堆積土層

図版5　若江32次遺構

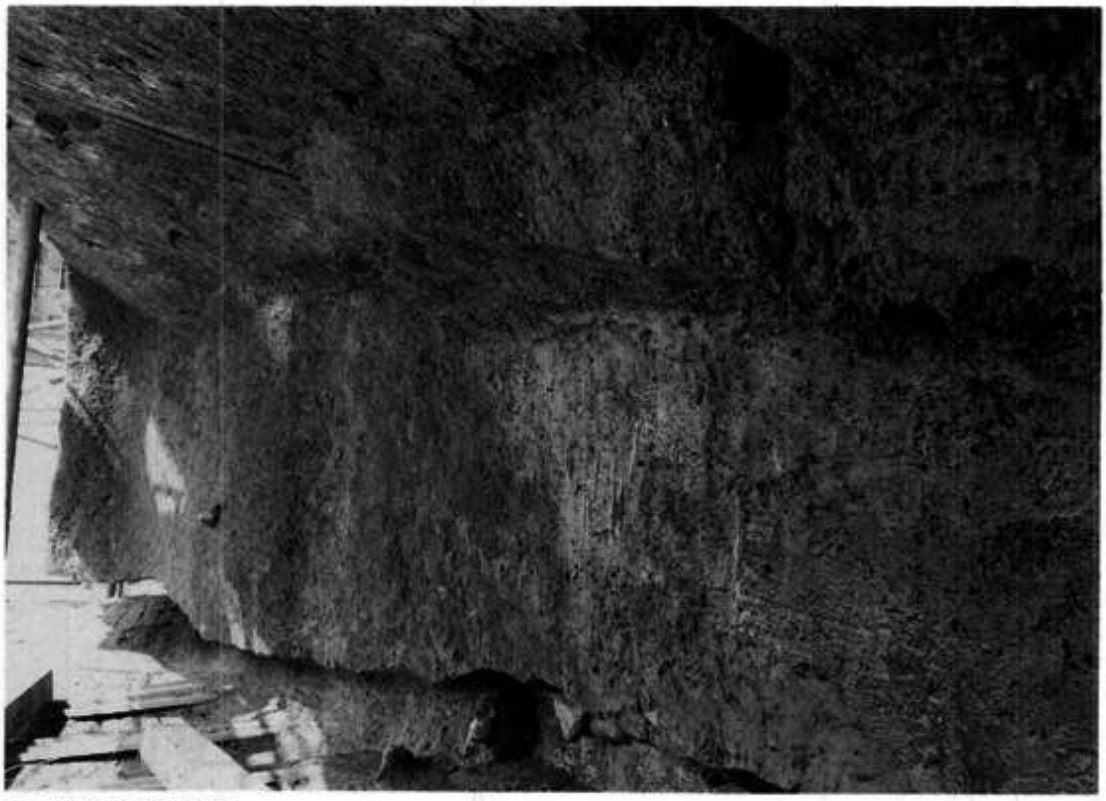
1．土墨盛土状況

2．土墨盛土状況

図版6　若江32次遺構



1．堀第Ⅰ期完掘状況



2．堀第Ⅰ期完掘状況

図版7　若江32次遺構

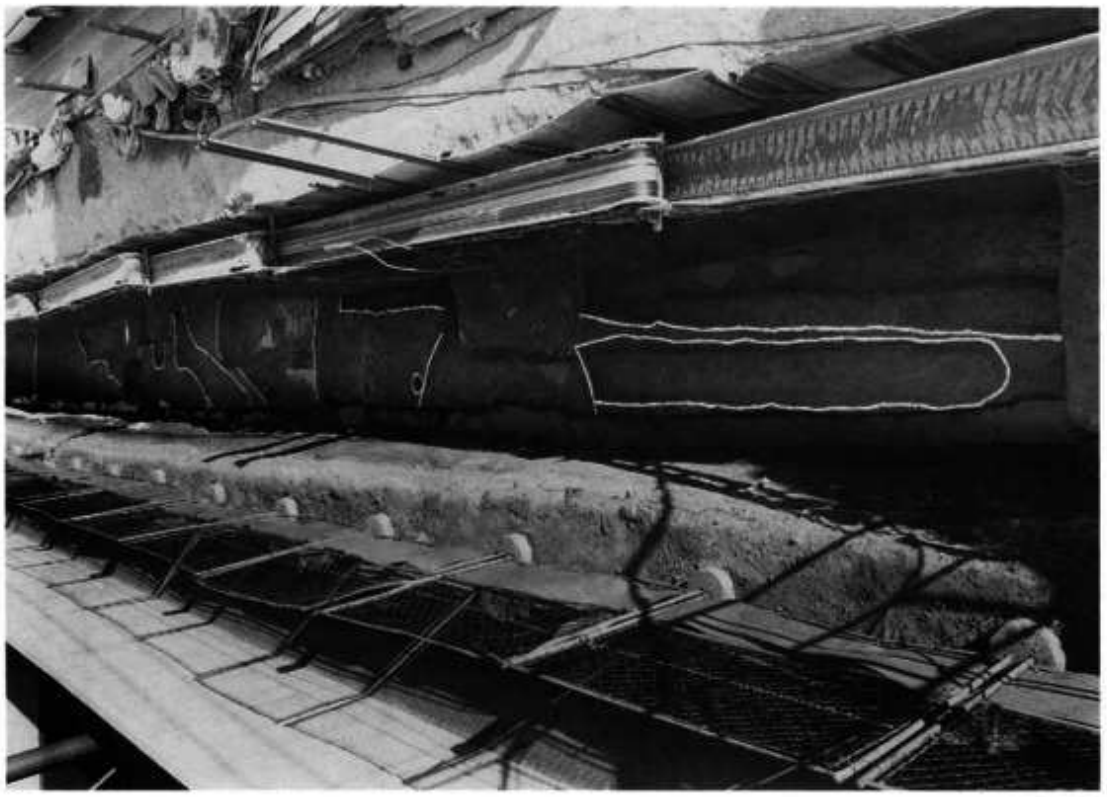
1．土墨東側

2．土坑1

図版8　若江32次遺構

1．溝3

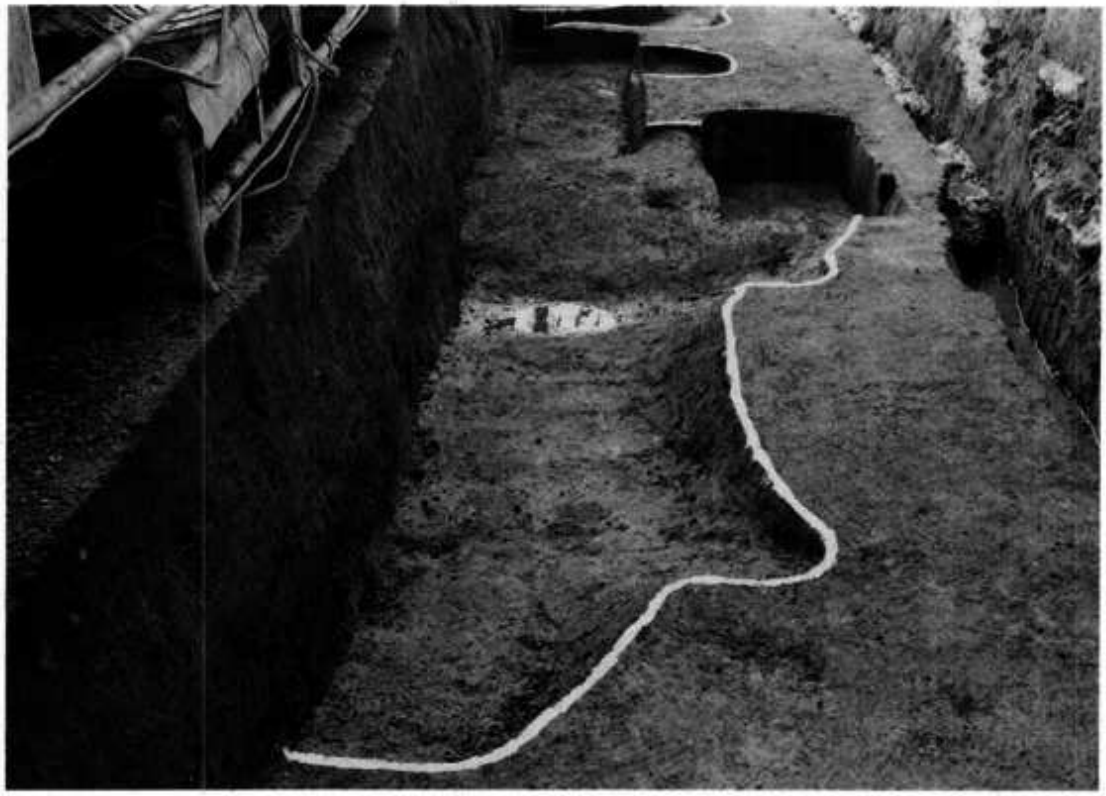
2．溝3



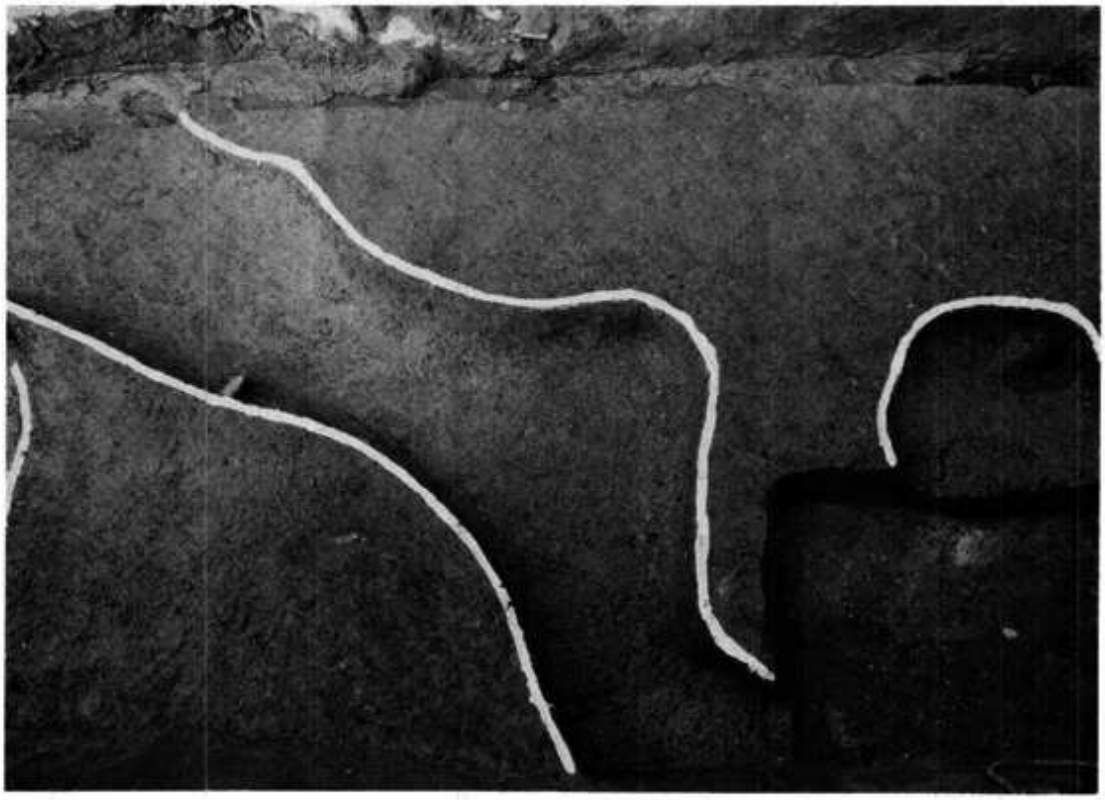
1．A1～B1地区全景

2．落ち込み1　遺物出土状況

図版10　若江33次遺構



1．土坑1

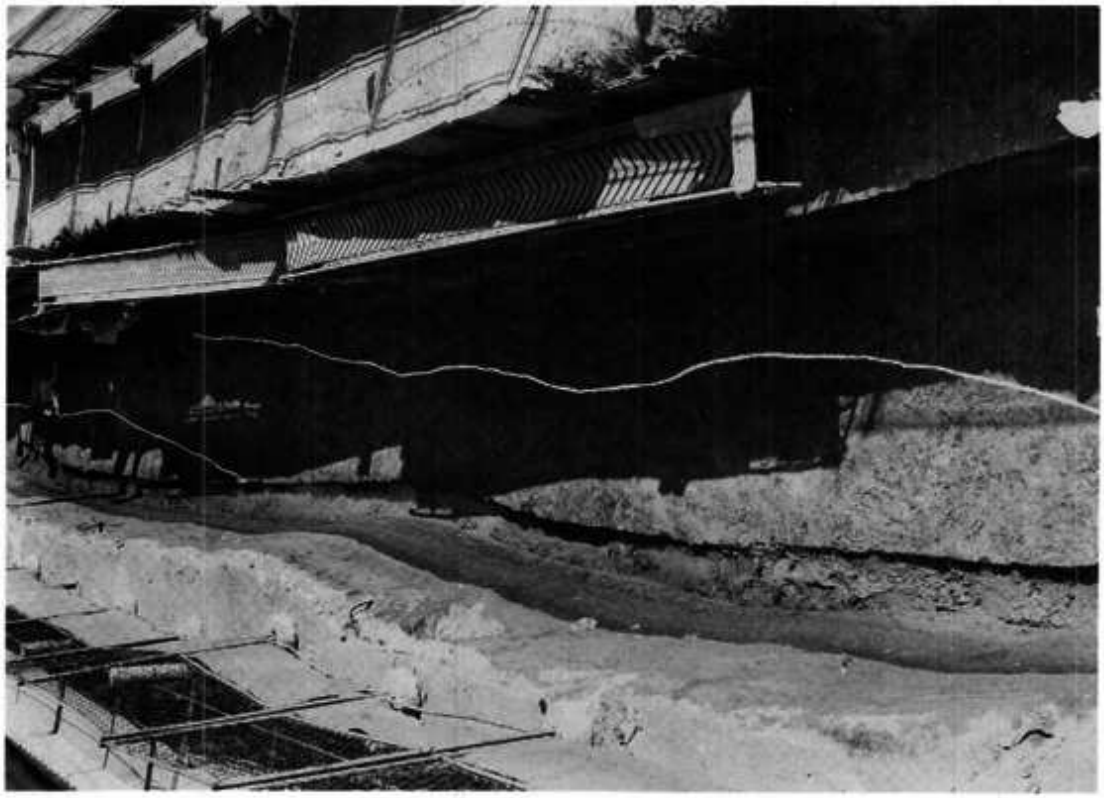


2．溝1

1．B2～C1地区全景

2．土坑5

1．土坑5　遺物出土状況



2．溝8

1．B3～C1地区全景

2．B2～B3地区全景

図版14　若江33次遺構

1．方形周溝墓（東より）

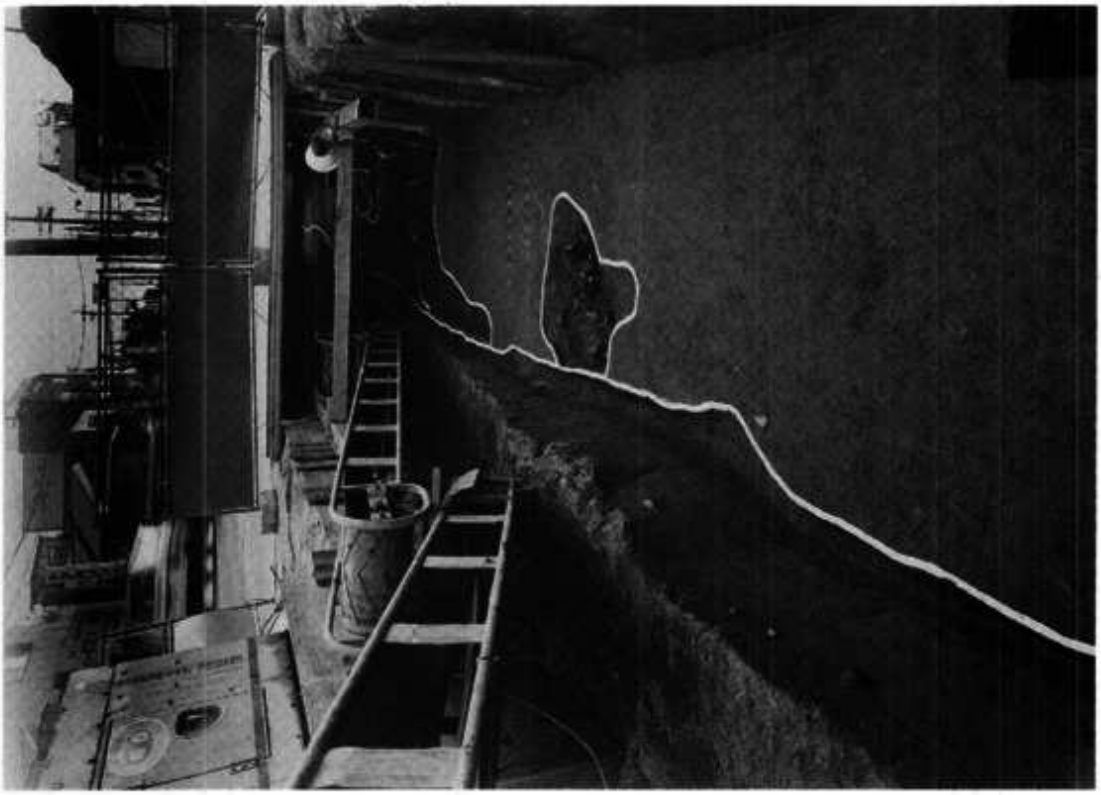
2．方形周溝墓（西より）

図版15　若江33次遺構

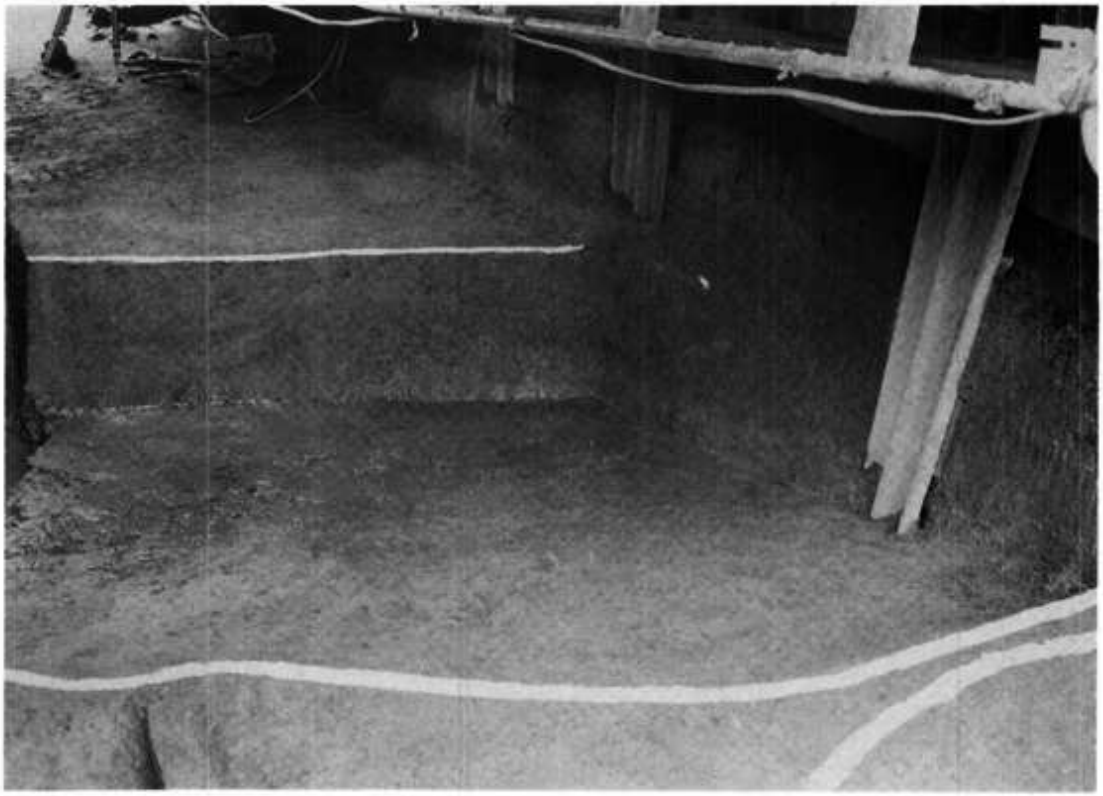
1．弥生土器出土状況

2．土坑10

図版16　若江33次遺構



1．C1～C3地区全景

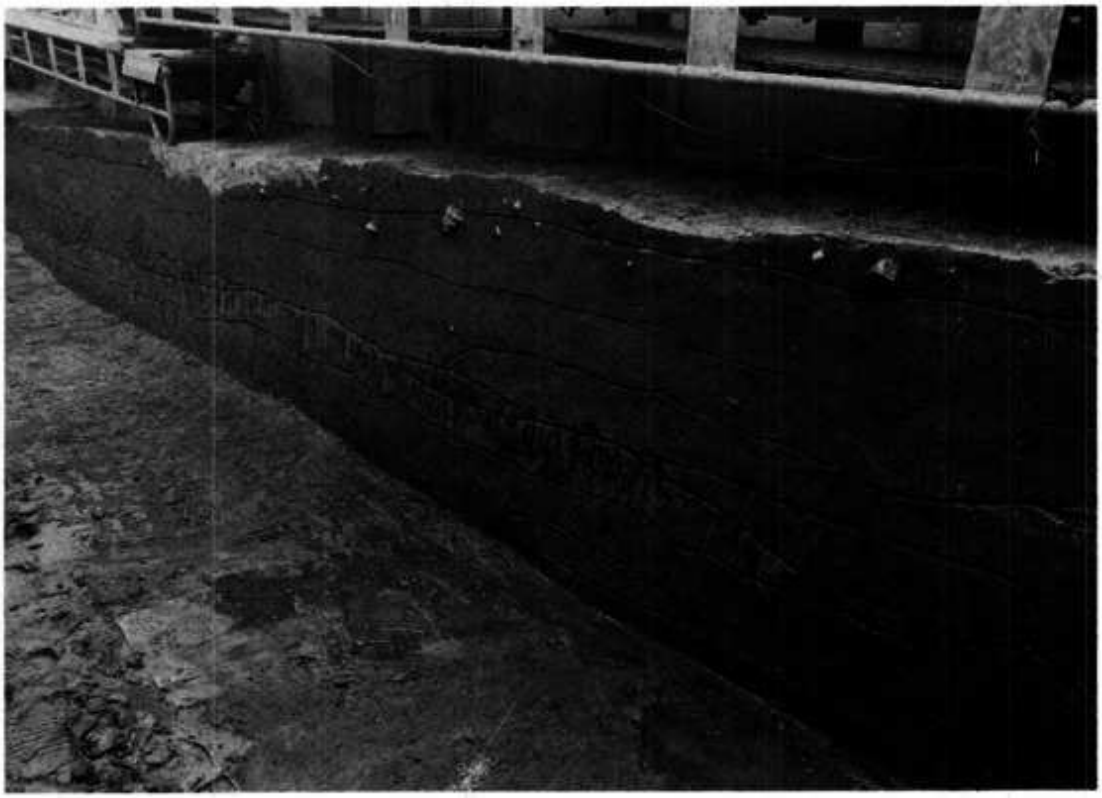


2．溝17

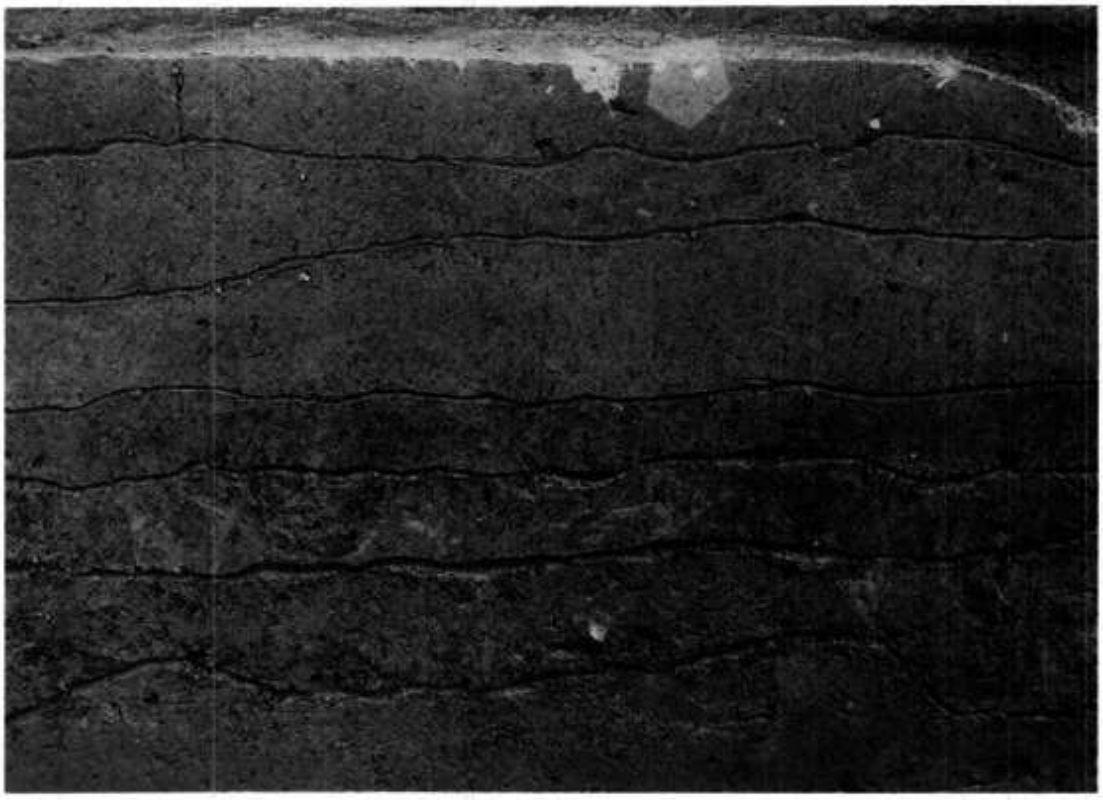
図版17　若江33次遺構

1．土坑18

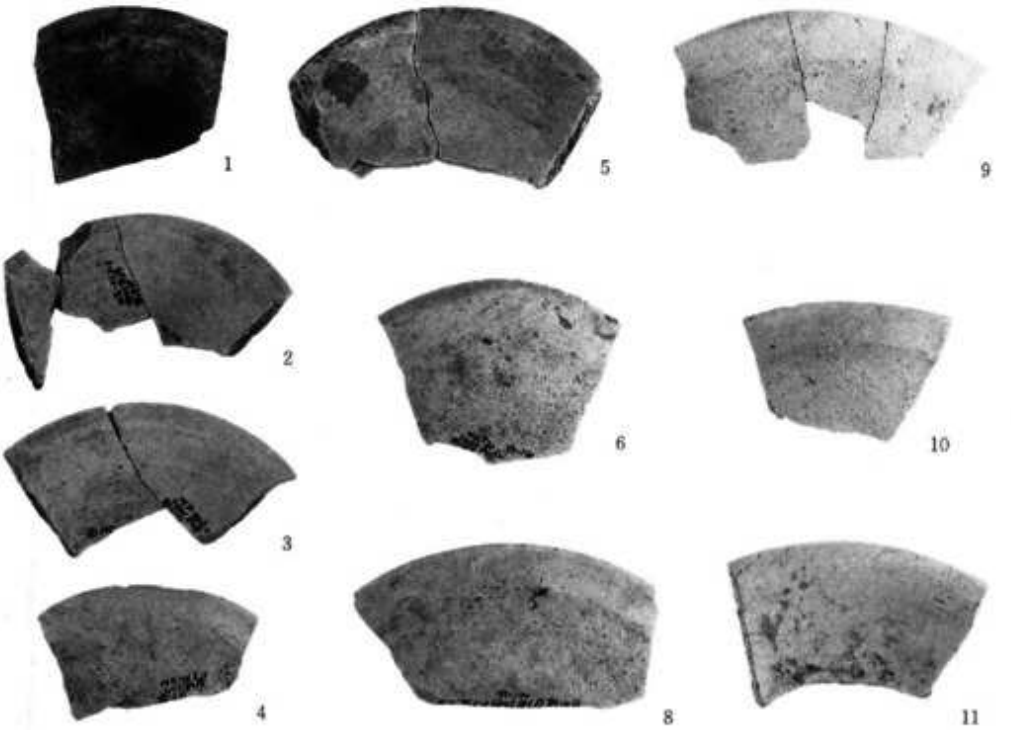
2．土坑19



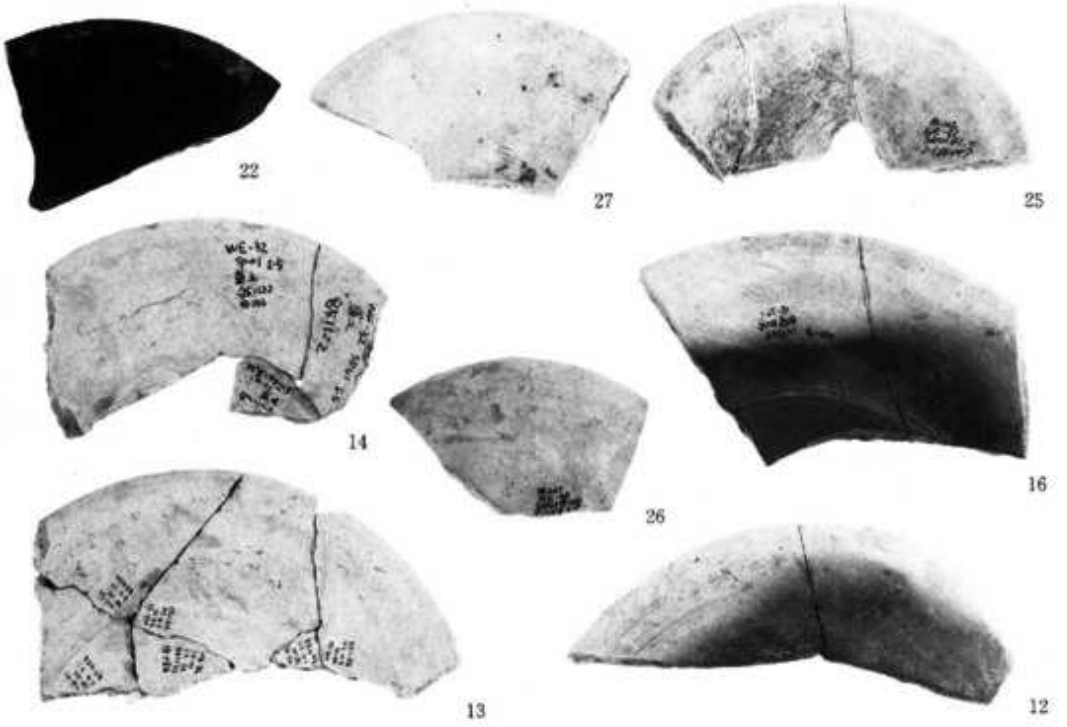
1．B4～C1地区南側断面



2．B2地区南側断面

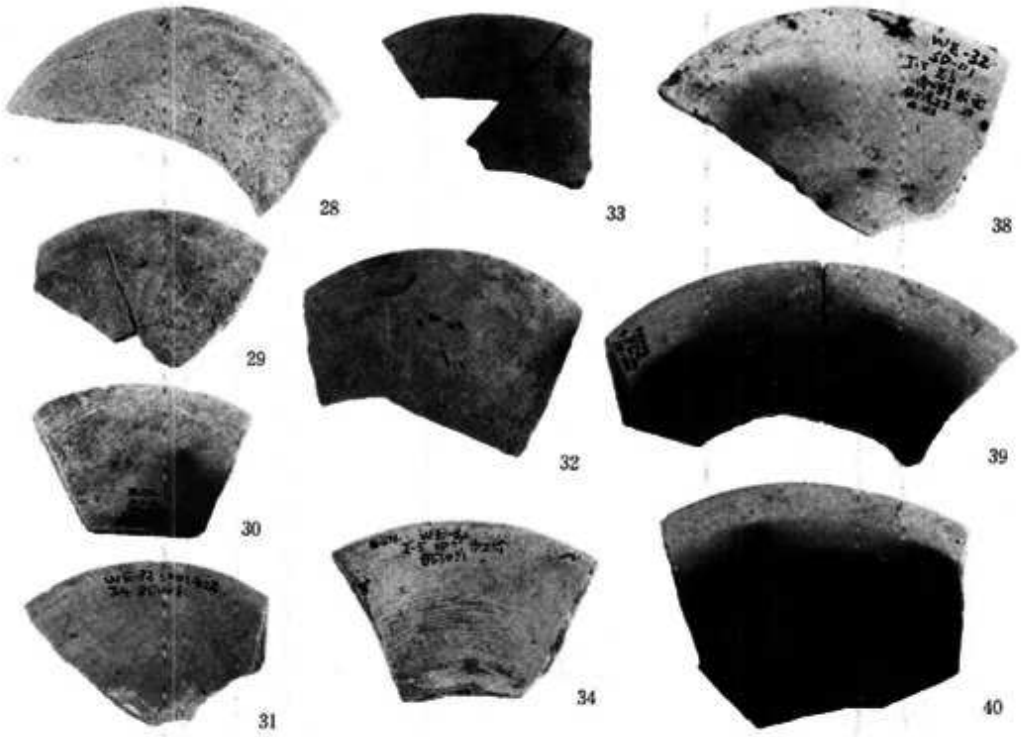


1．土師器皿

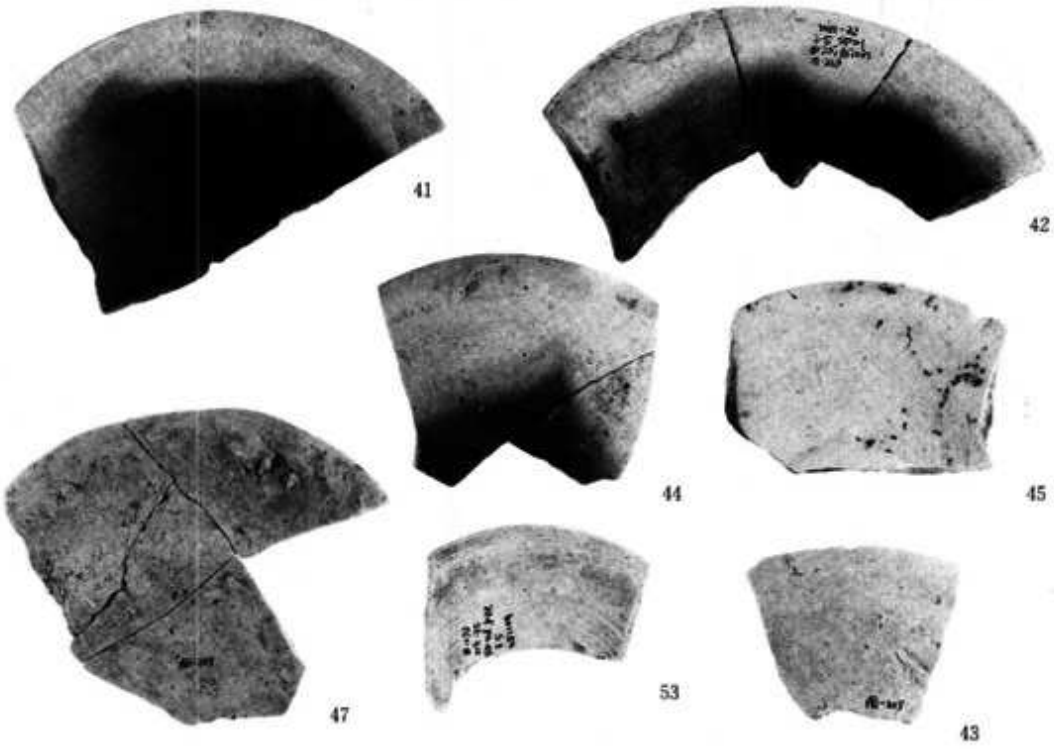


2．土師器皿

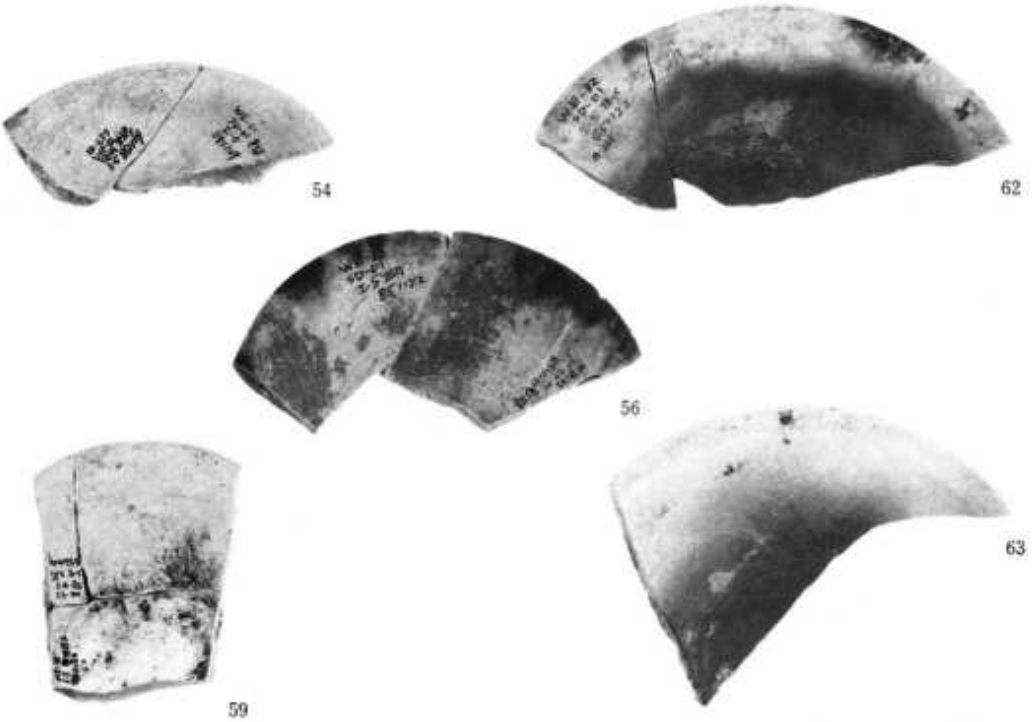
図版20　若江32次遺物



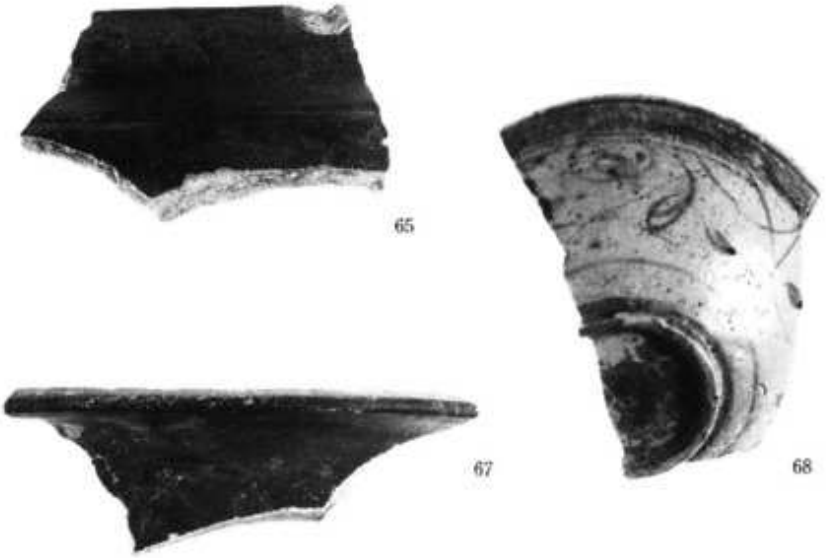
1．土師器皿



2．土師器皿

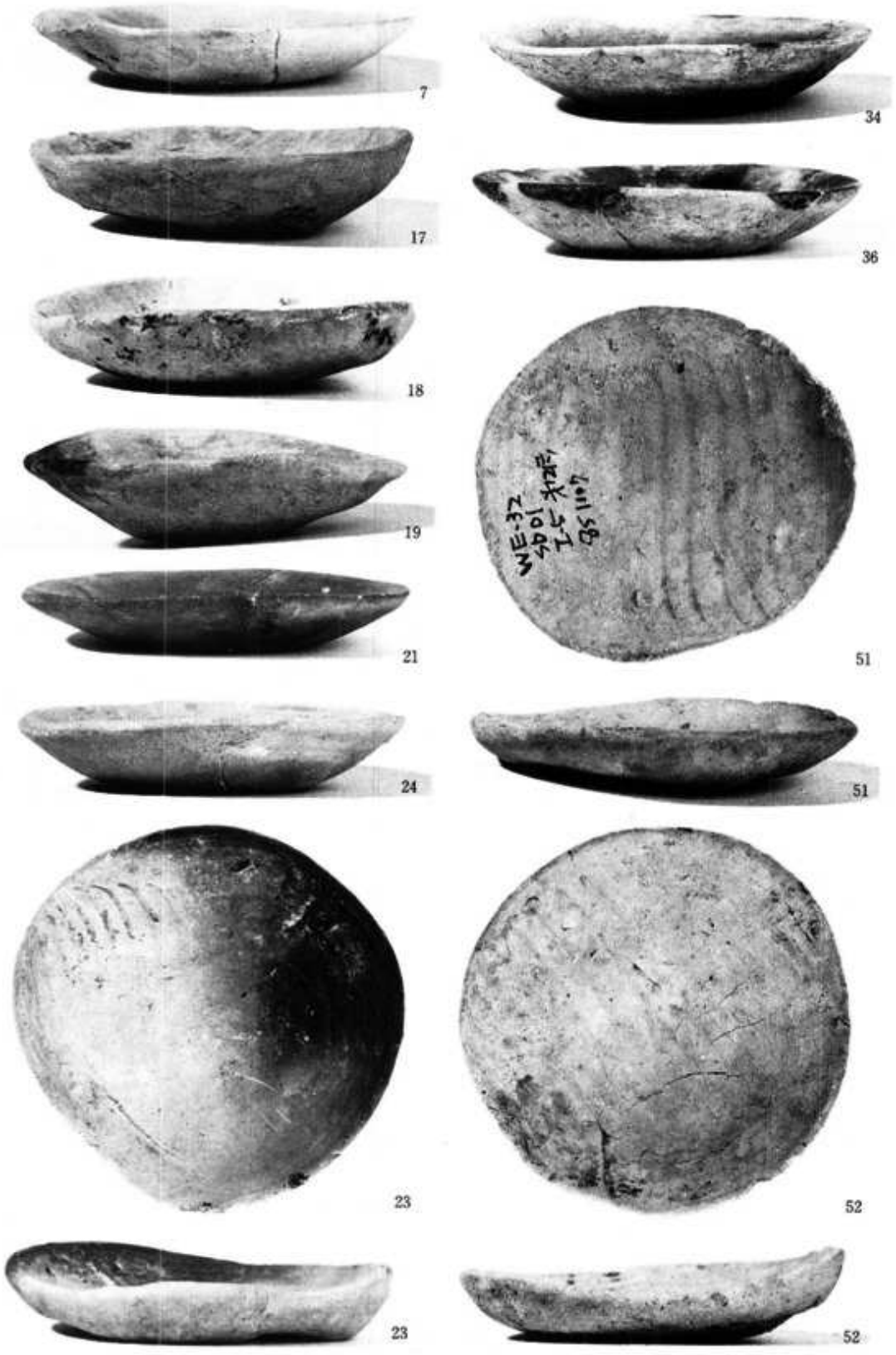


1．土師器皿



2．瓦器釜、土師器羽釜、青花椀

図版22　若江32次遺物

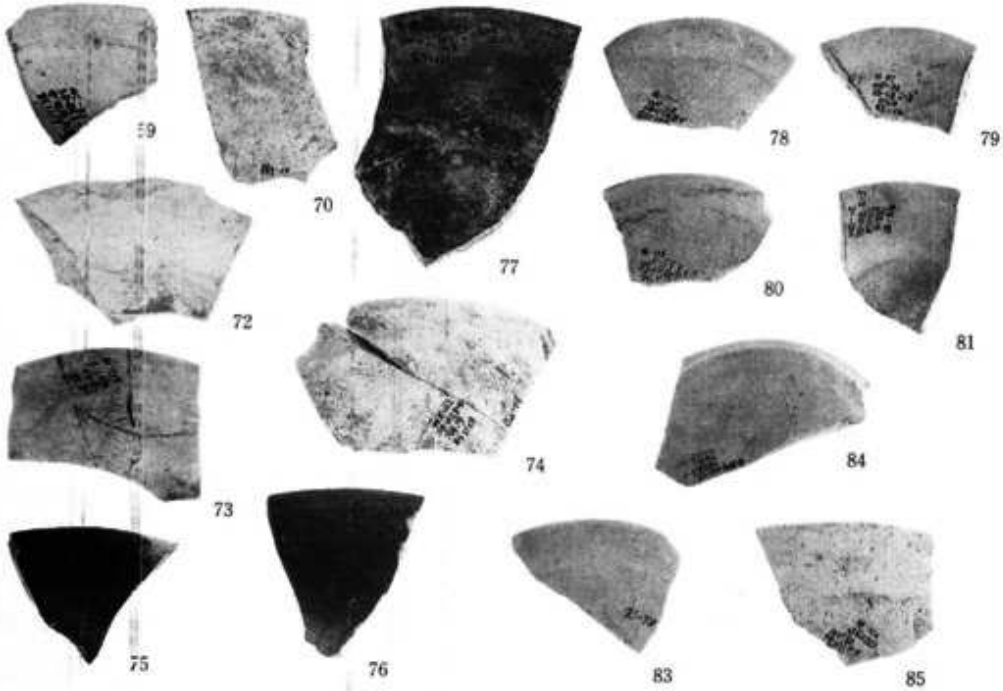


1．土師器皿

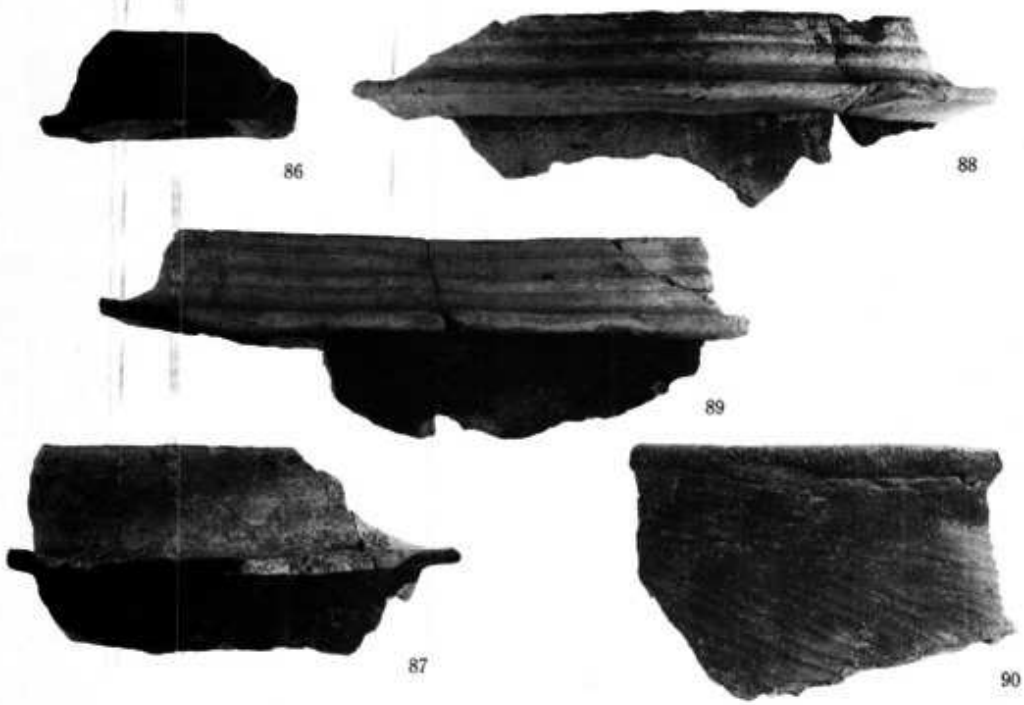
47
49
55
57
58
64
61
71
82
98
100
101
112
113
127
142
143
144
149
159
160

1．土師器皿

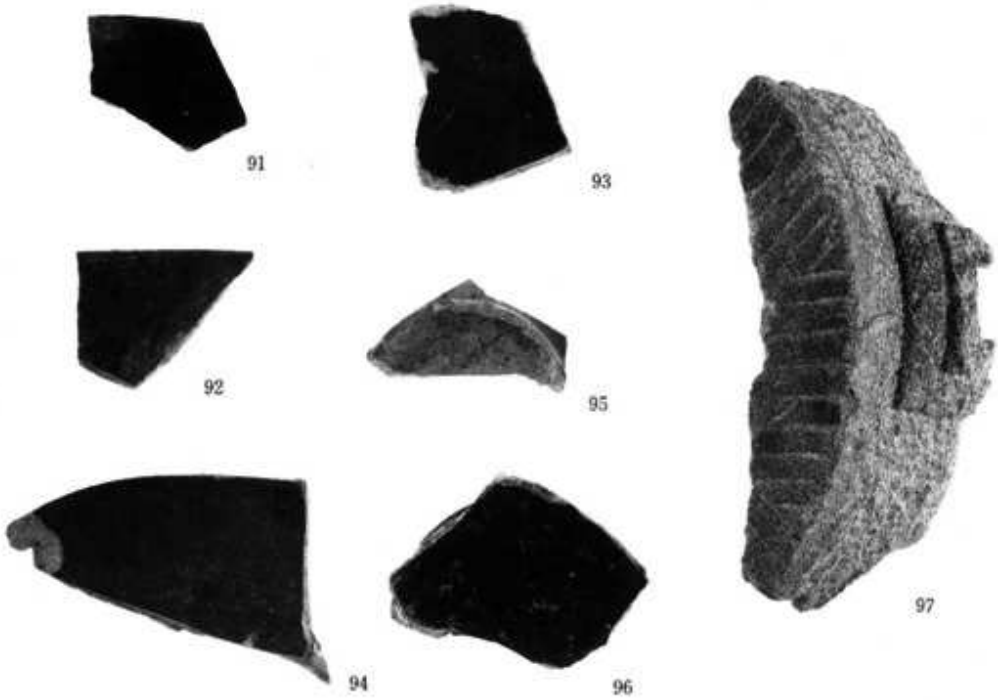
図版24　若江32次遺物



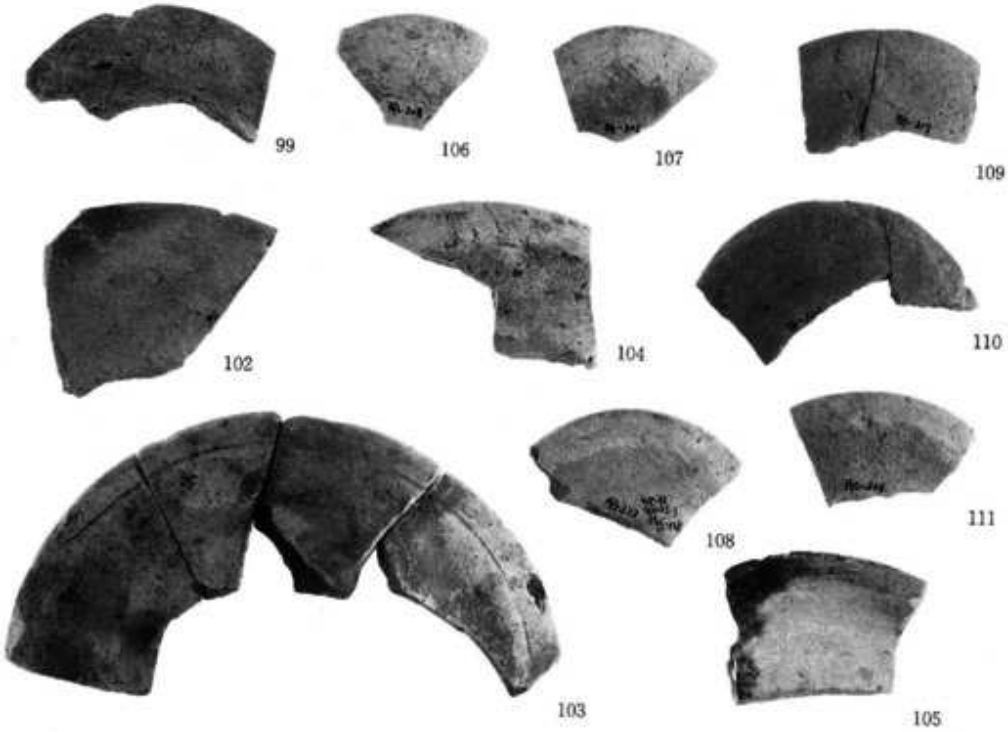
1．土師器皿



2．瓦器羽釜、甕

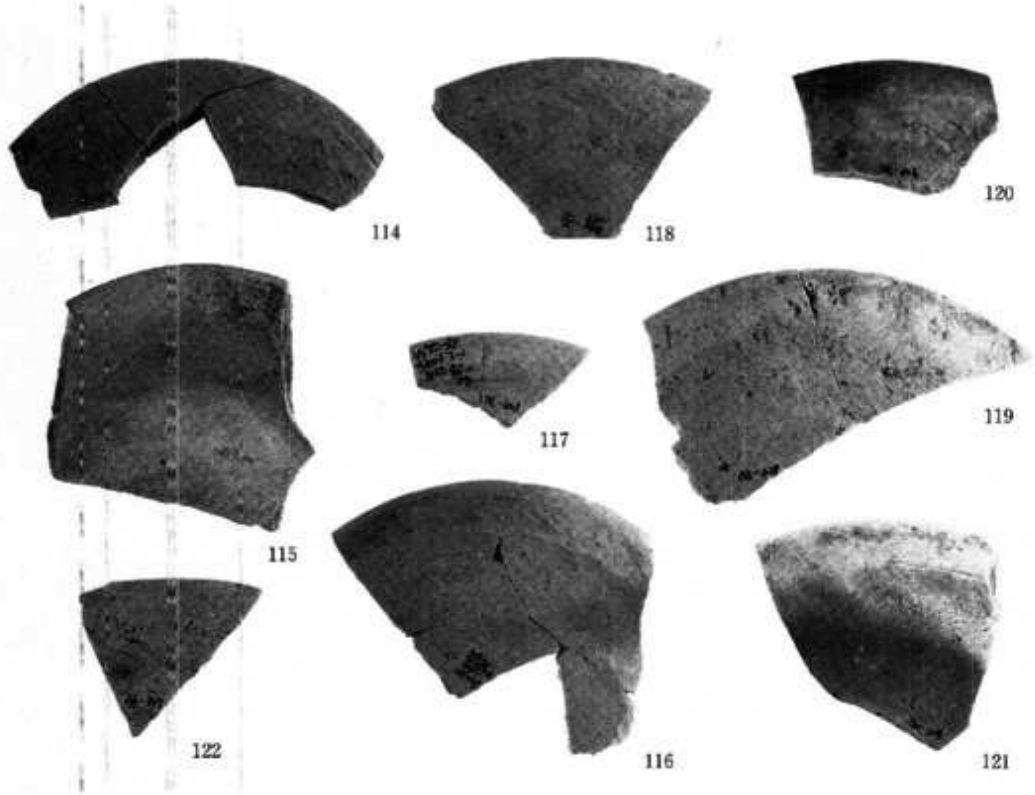


1．瓦器椀、石臼

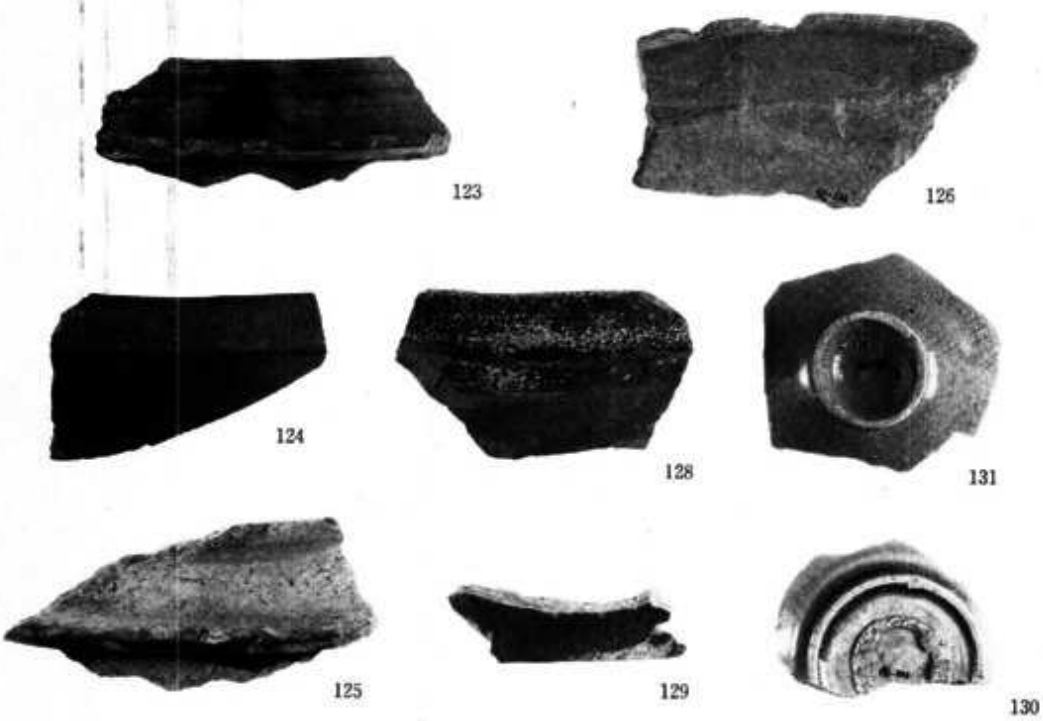


2．土師器皿、瓦器皿

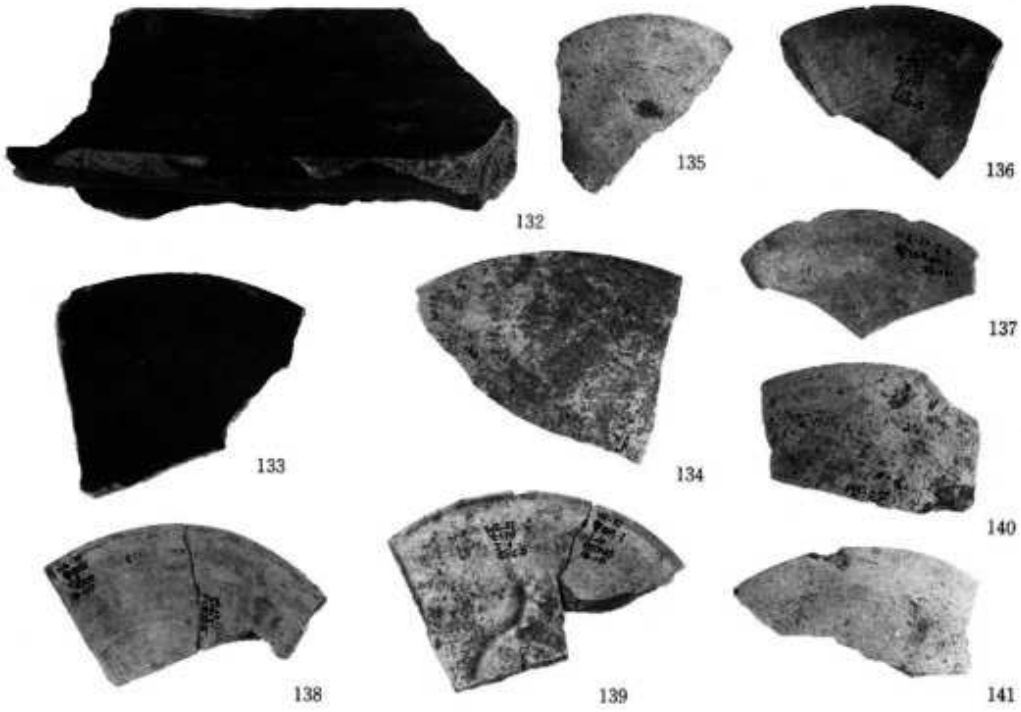
図版26　若江32次遺物



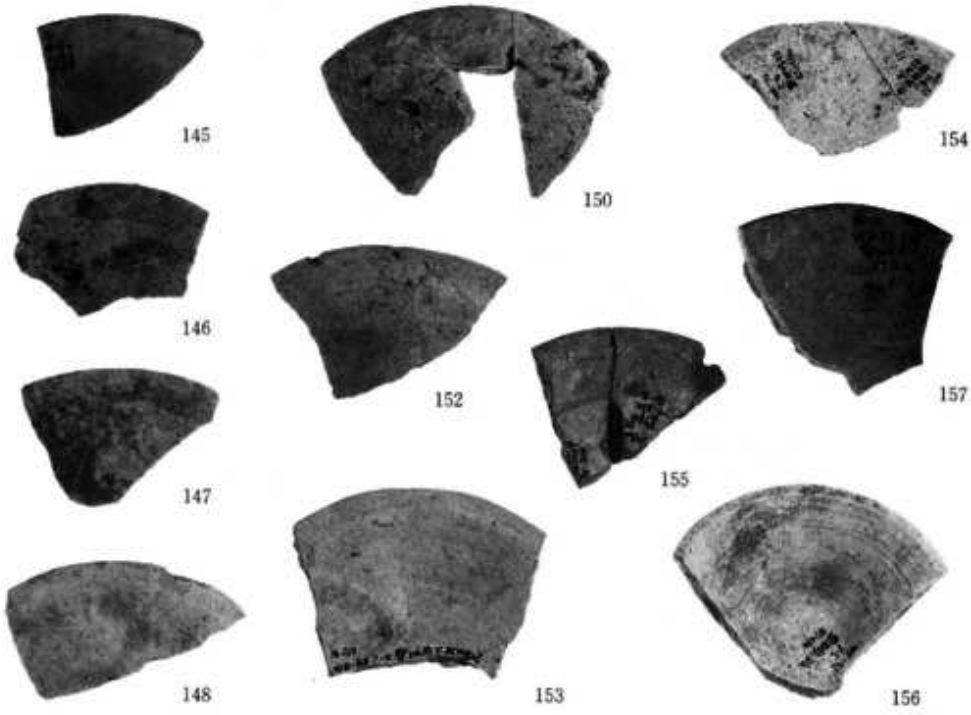
1．土師器皿



2．瓦器羽釜、擂鉢、備前焼擂鉢、土師器羽釜、鍋、美濃焼皿、陶器椀

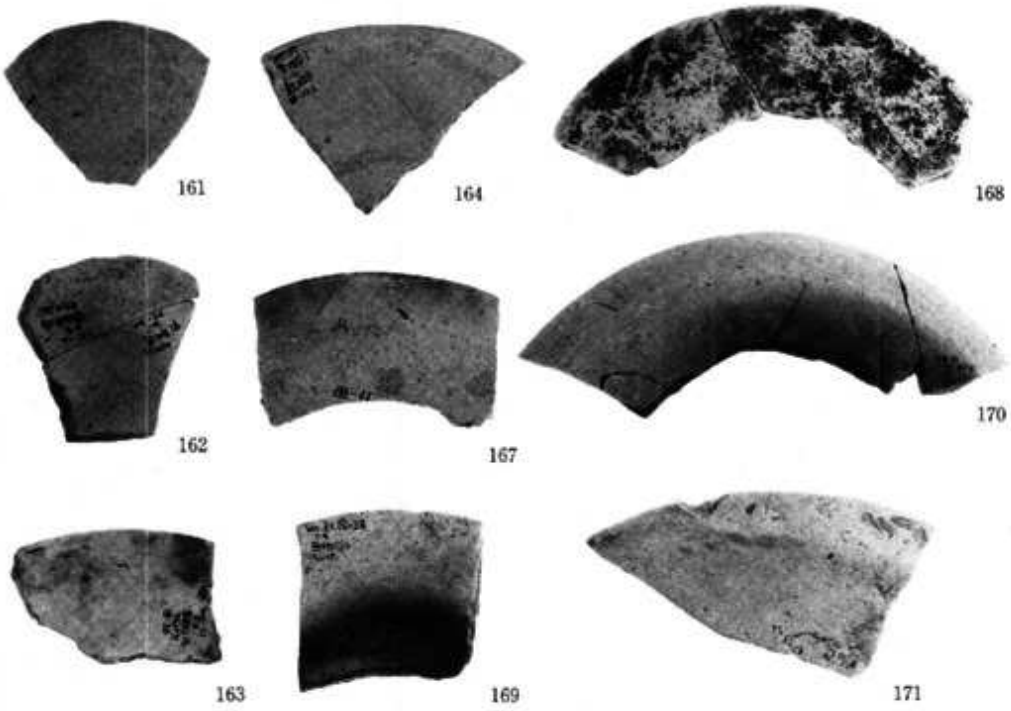


1．瓦器羽釜、椀、土師器皿

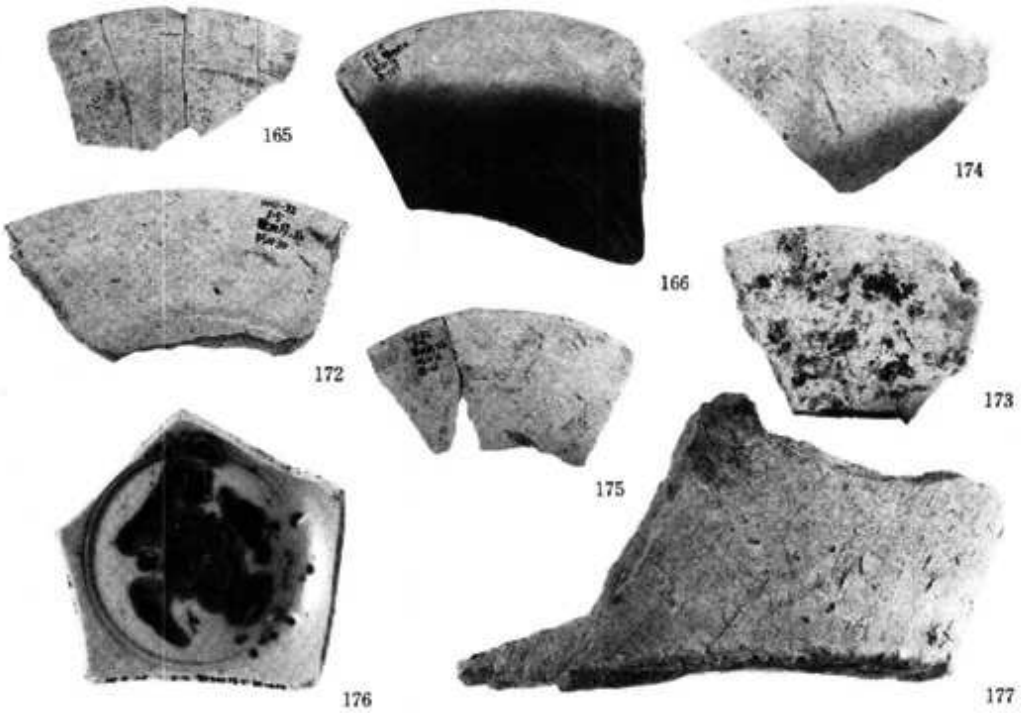


2．土師器皿

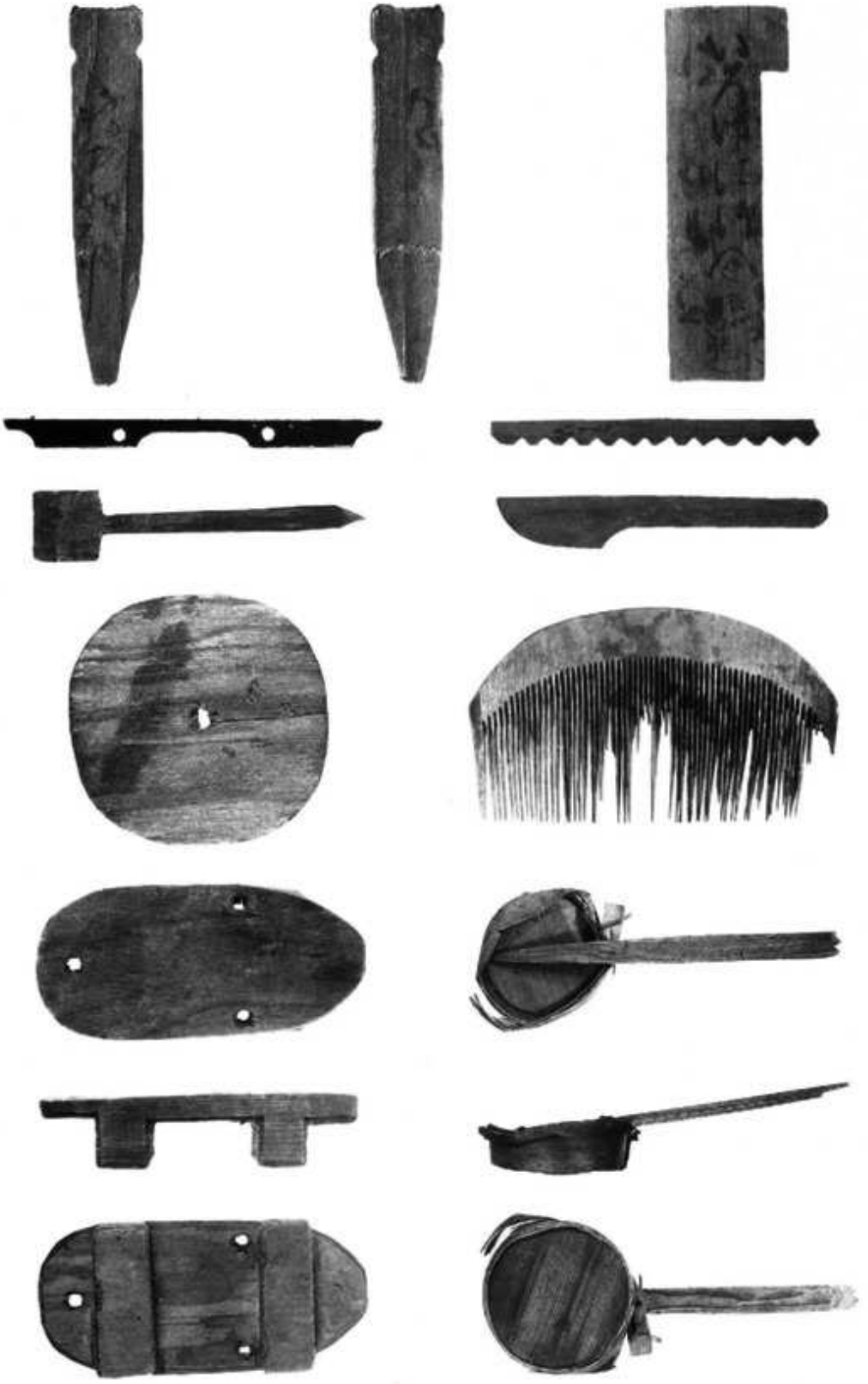
図版28　若江32次遺物



1．土師器皿

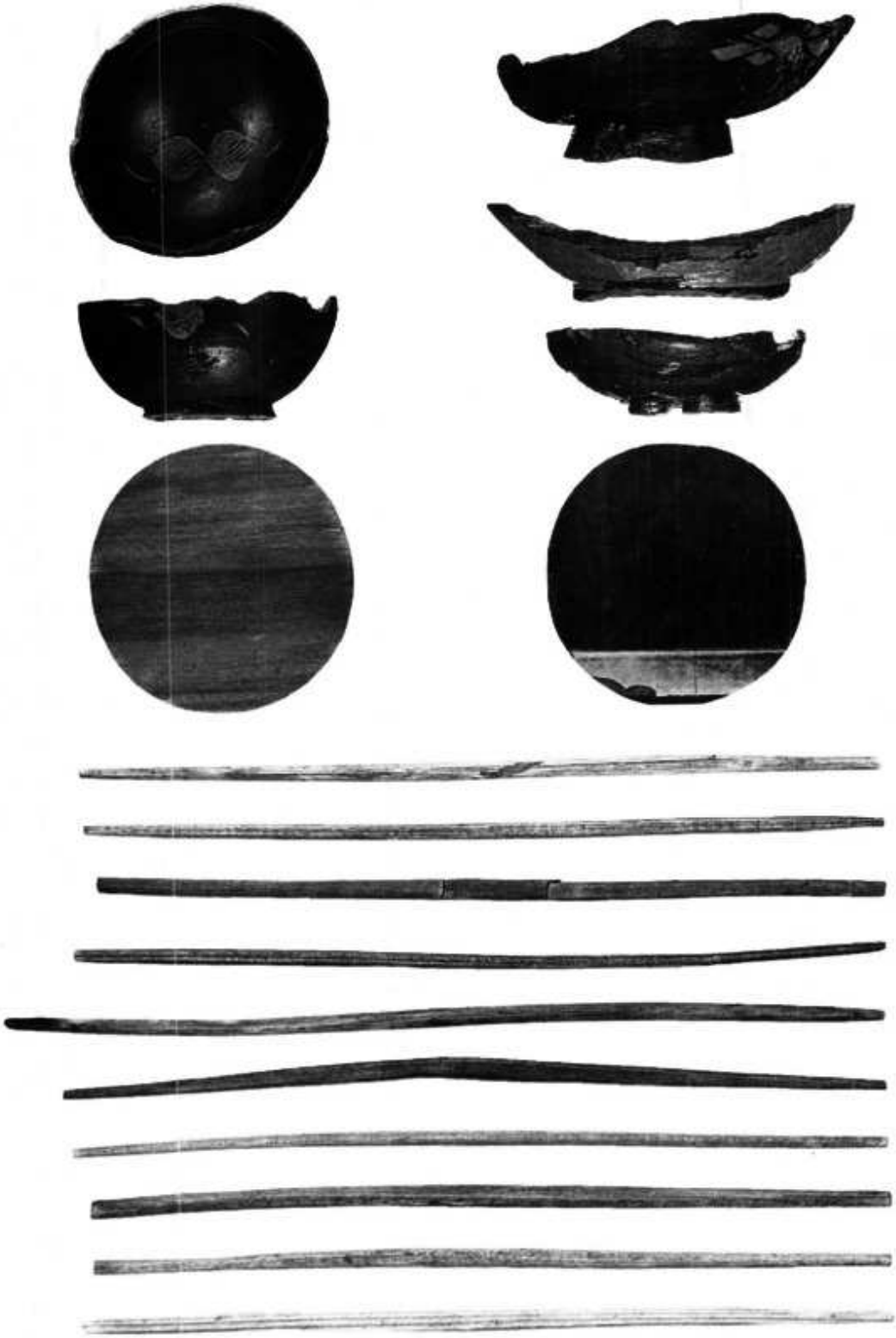


2．土師器皿、青花椀

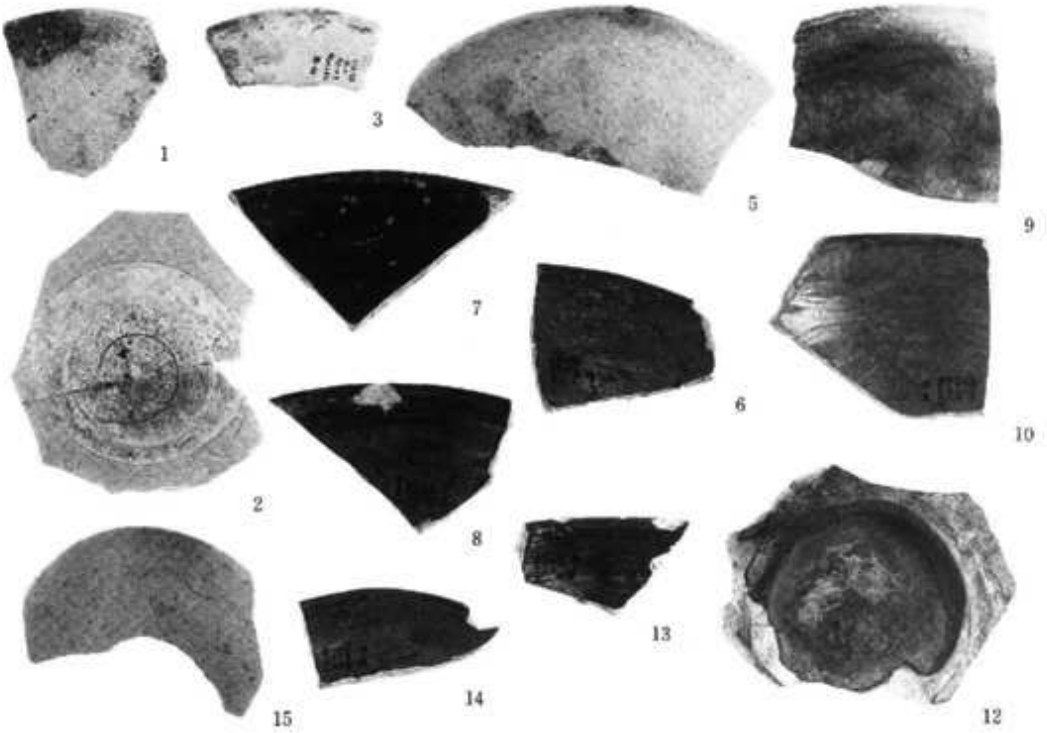


1．木製品　木簡、ハケ、ヘラ、紡錘車、櫛、下駄、柄杓

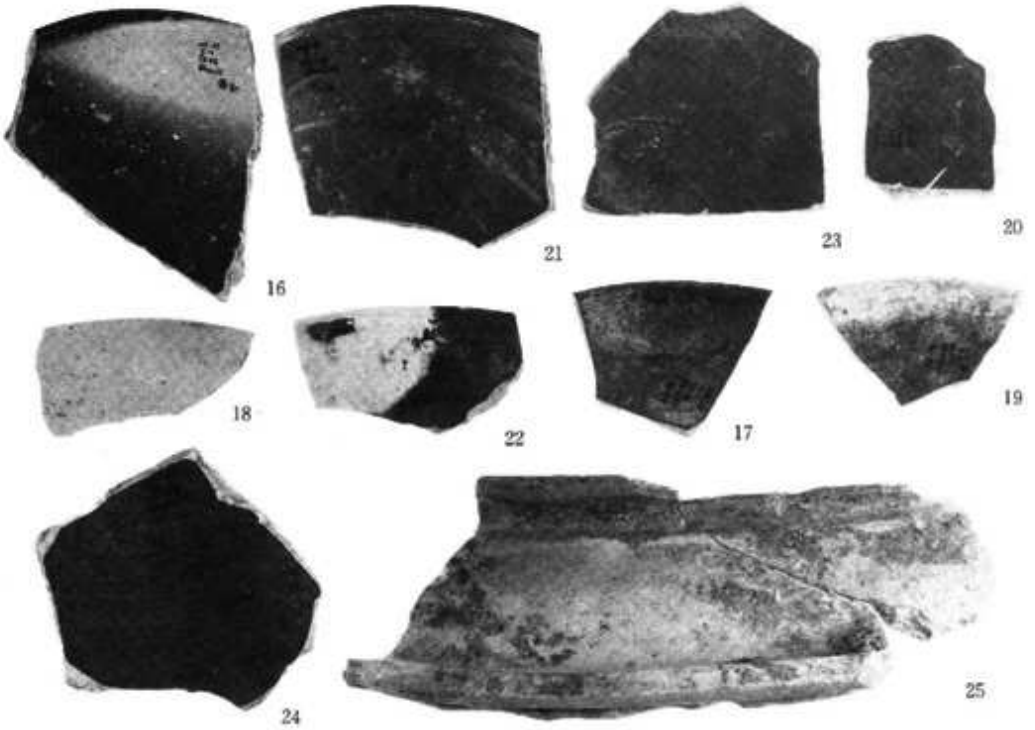
図版30　若江32次遺物



1．木製品　漆器椀、蓋板、漆塗円板、箸

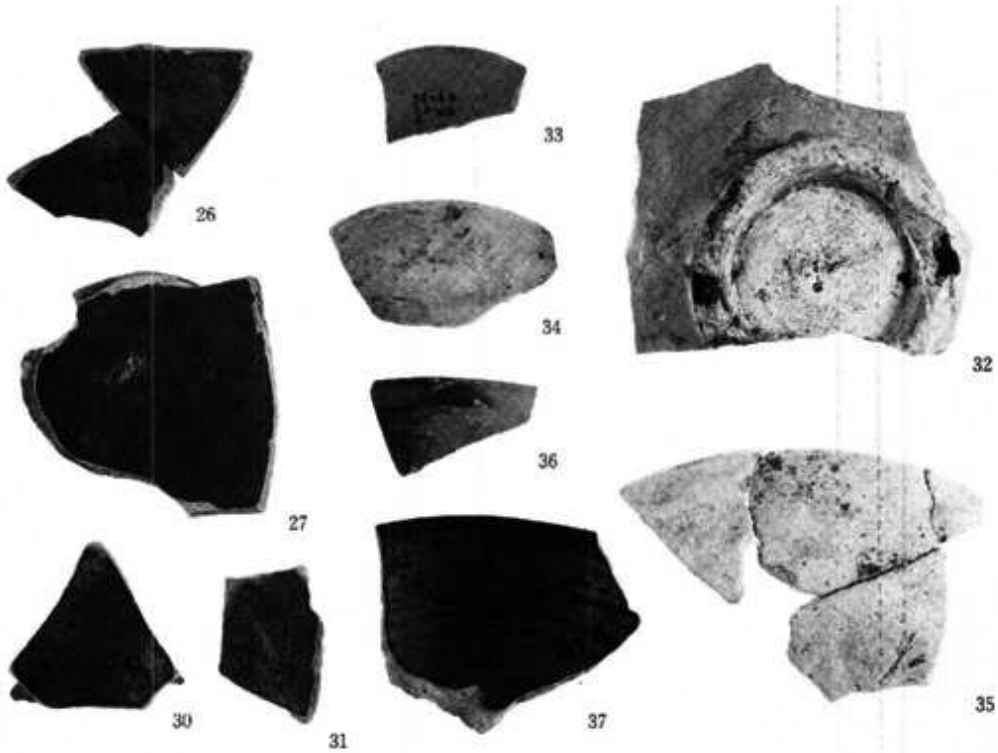


1．瓦器椀、白磁椀、土師器皿

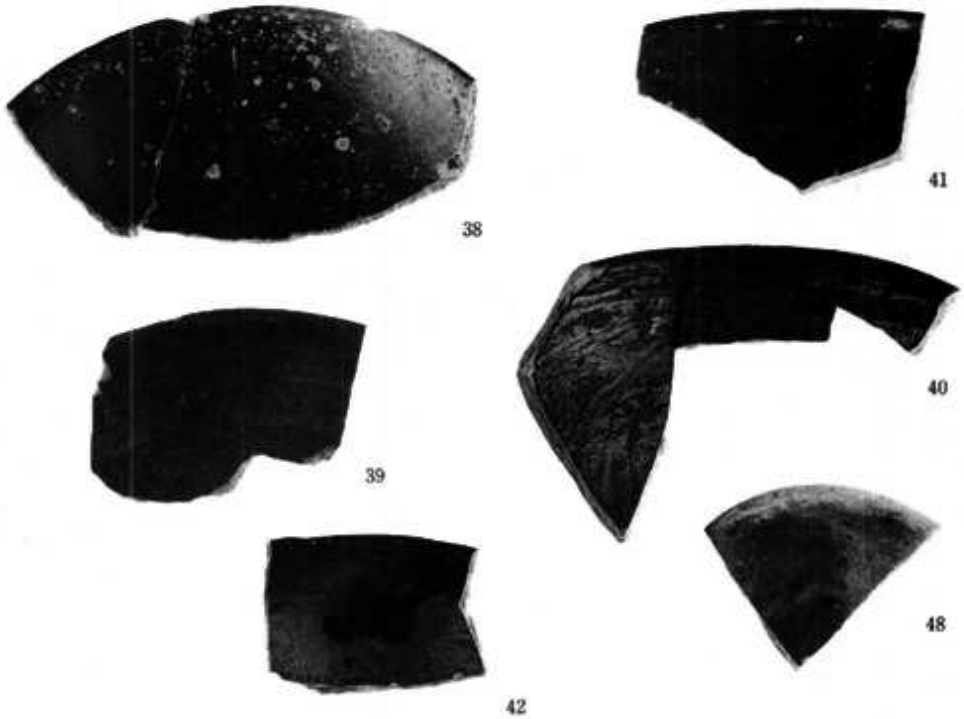


2．瓦器椀、土師器羽釜

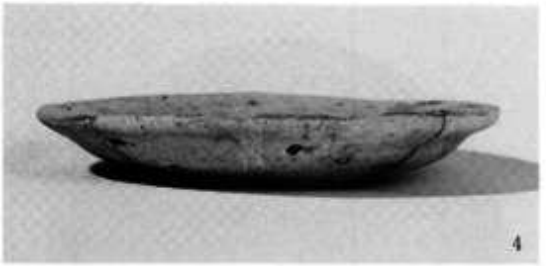
図版32　若江33次遺物

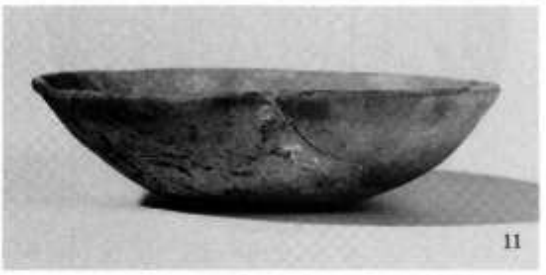


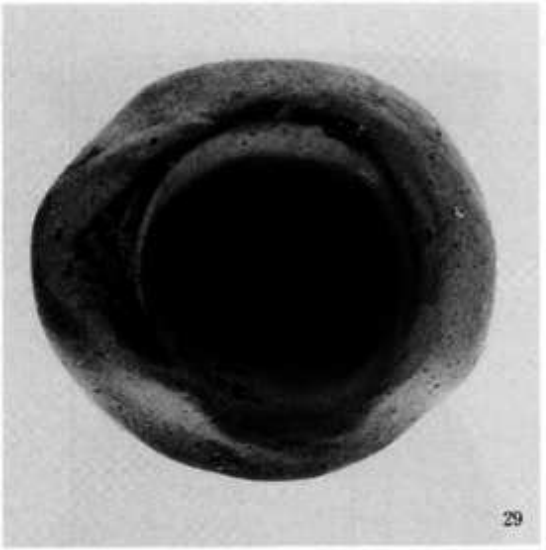
1．瓦器椀、皿、土師器皿、白磁椀



2．瓦器椀、皿

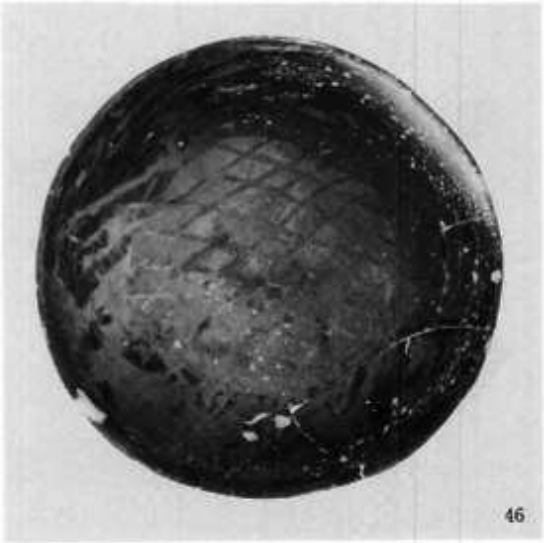




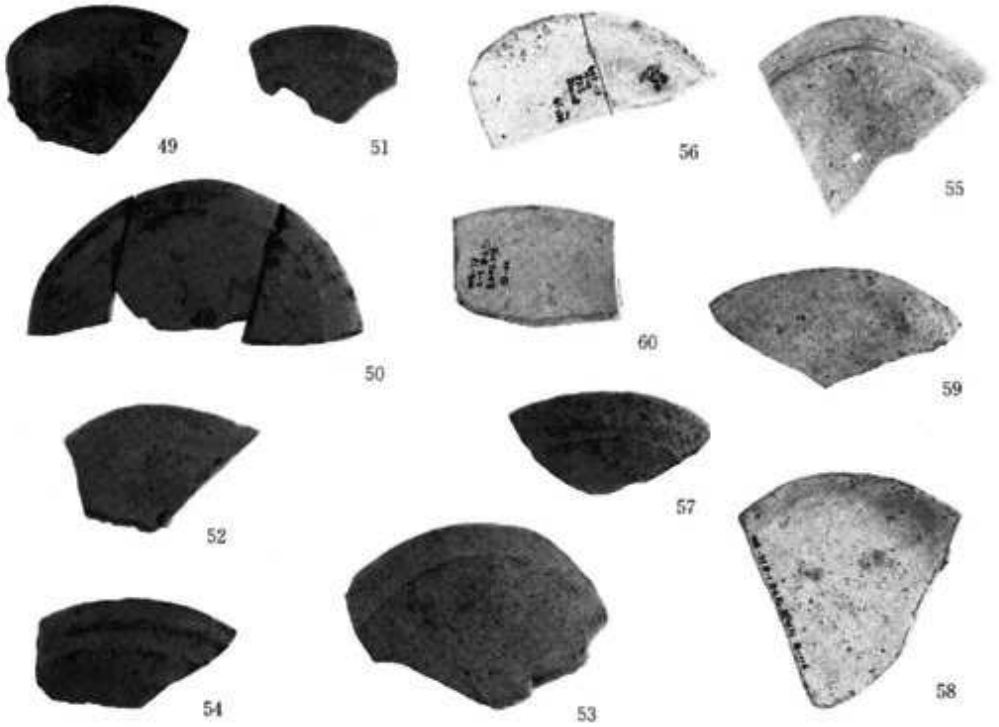


1．土師器皿、瓦器椀、土製品

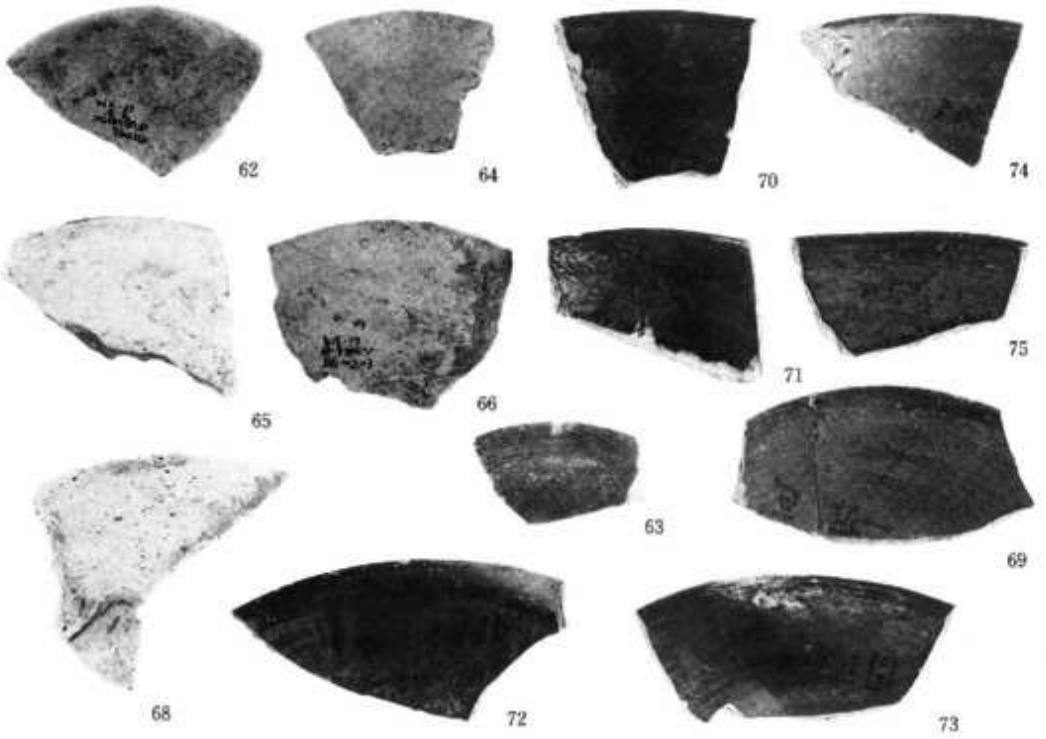
図版34　若江33次遺物



1．瓦器椀

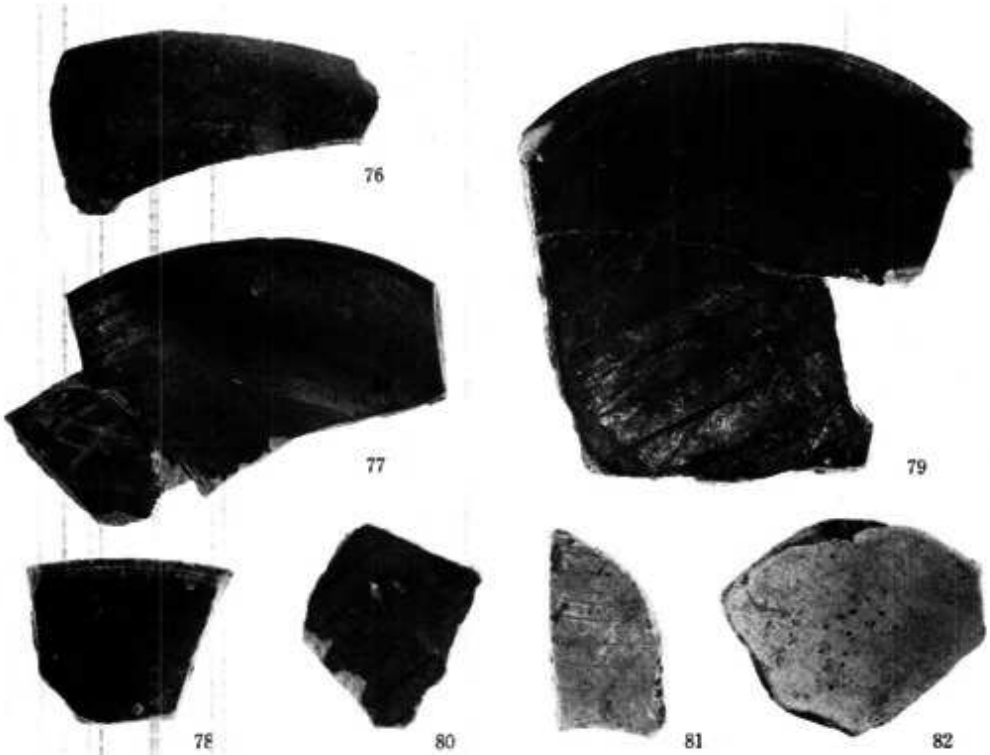


1．土師器皿

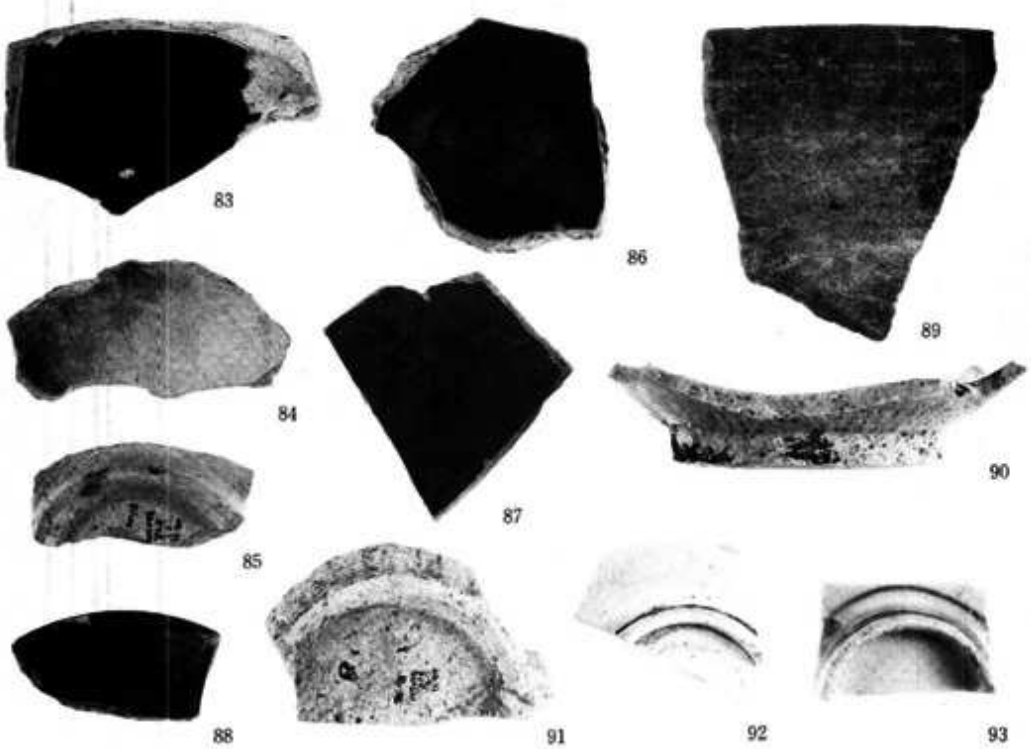


2．土師器皿、瓦器椀、皿

図版36　若江33次遺物



1．瓦器椀



2．瓦器椀、擂鉢、青磁椀、磁器椀

図版37　若江33次遺物

94

97

96

98

99

1．須恵器杯身、杯蓋、直口壺

101

102

107

105

108

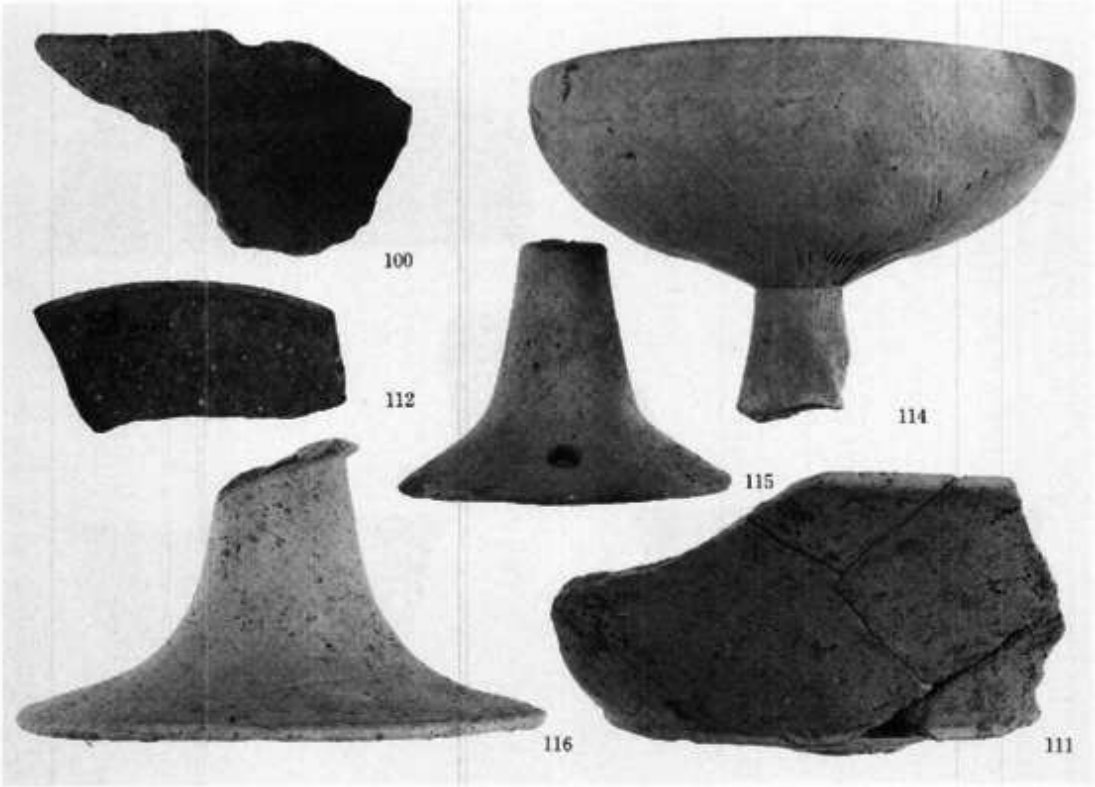
109

103

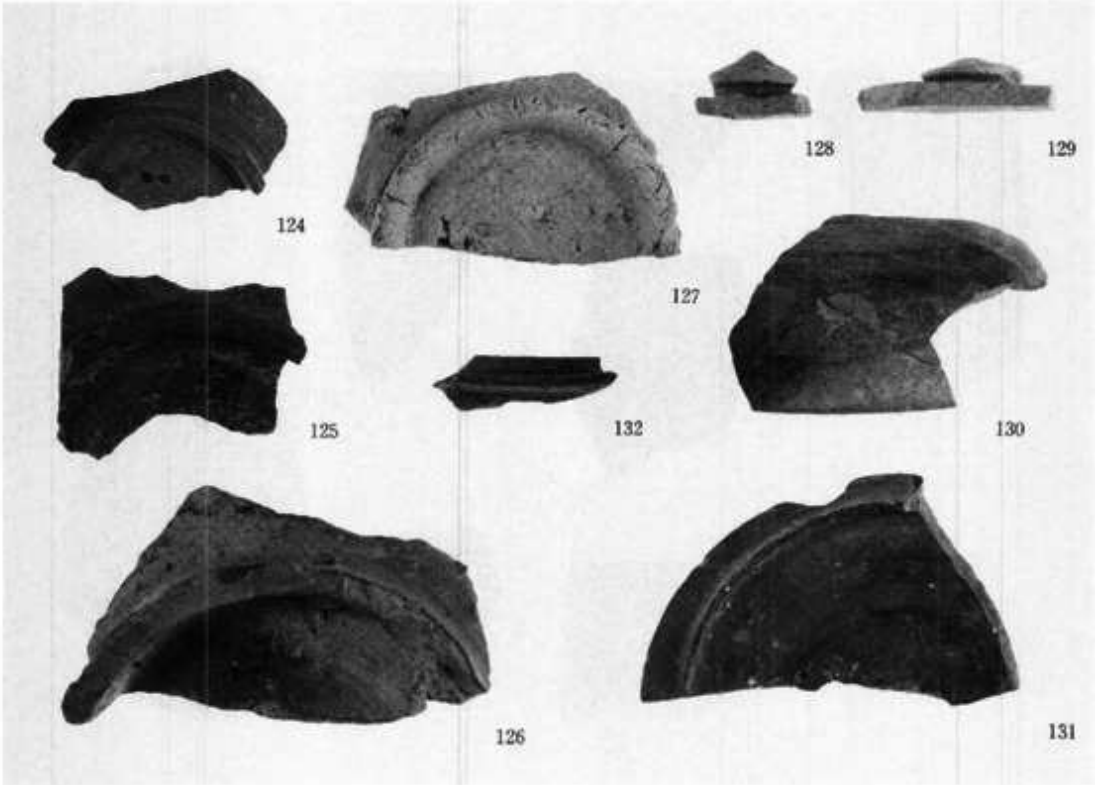
106

104

2．製塩土器

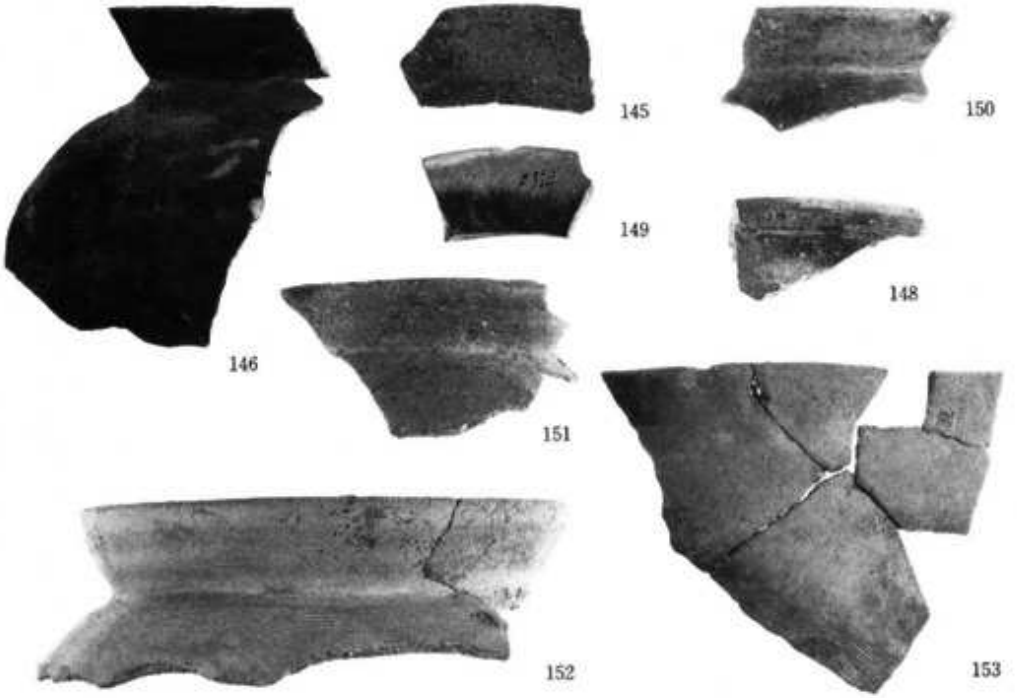


1．土師器高杯、甕

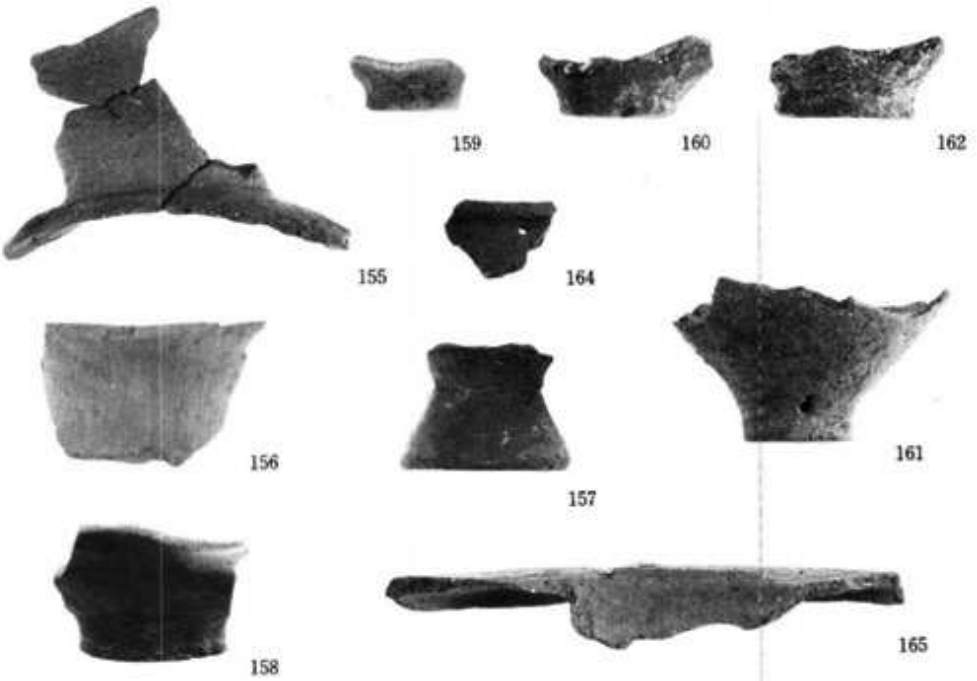


2．須恵器杯

1．土師器高杯



2．土師器甕



1．弥生土器壺、無頸壺、高杯

2．土師器壺　　弥生土器壺

67

118

113

119

117

120

1．土師器皿、壺

図版42　若江33次遺物

95

133

121

143

123

147

1．須恵器杯身、土師器壺、甕

若江遺跡第32・33次発掘調査報告

1990年3月31日

発　行　財団法人 東大阪市文化財協会

印　刷　株式会社 中島弘文堂印刷所